



北極探險實記
尾角 白加
下卷

東京 博文館

スタンレー探検實記

下巻目次

第十九章	パナルヤに到着、バーナラントは死せり	一
第二十章	後隊の悲劇	三三
第二十一章	ナイアンザに對する第三回の旅行	六八
第二十二章	ボドー嶺嶽に到着す	一三〇
第二十三章	エミン、パシヤ并にウエンソンの禁獄	一
第二十四章	エミン、パシヤ并に東園等カバに於ける余等の會餐に来る	三〇
第二十五章	余等共にサンワーバルに向て歸る	七九
第二十六章	再びエミン、パシヤに就て	一四八
第二十七章	アルバルト、エドワード湖に迄	一
第二十八章	ルウエンソリ并にアルバルト、エドワード湖	三八





スタンレー探検實記下巻目次終

第廿九章	アソコリを通じてアレキサンドソン、ナイルに向ふ……………六一
第三十章	ウヰクトリア、ナイアマンの南端なる英國教會の屯營に迄……………八五
第卅一章	ウヰクトリア、ナイアマンをよりサンマーマスに到り……………一〇八

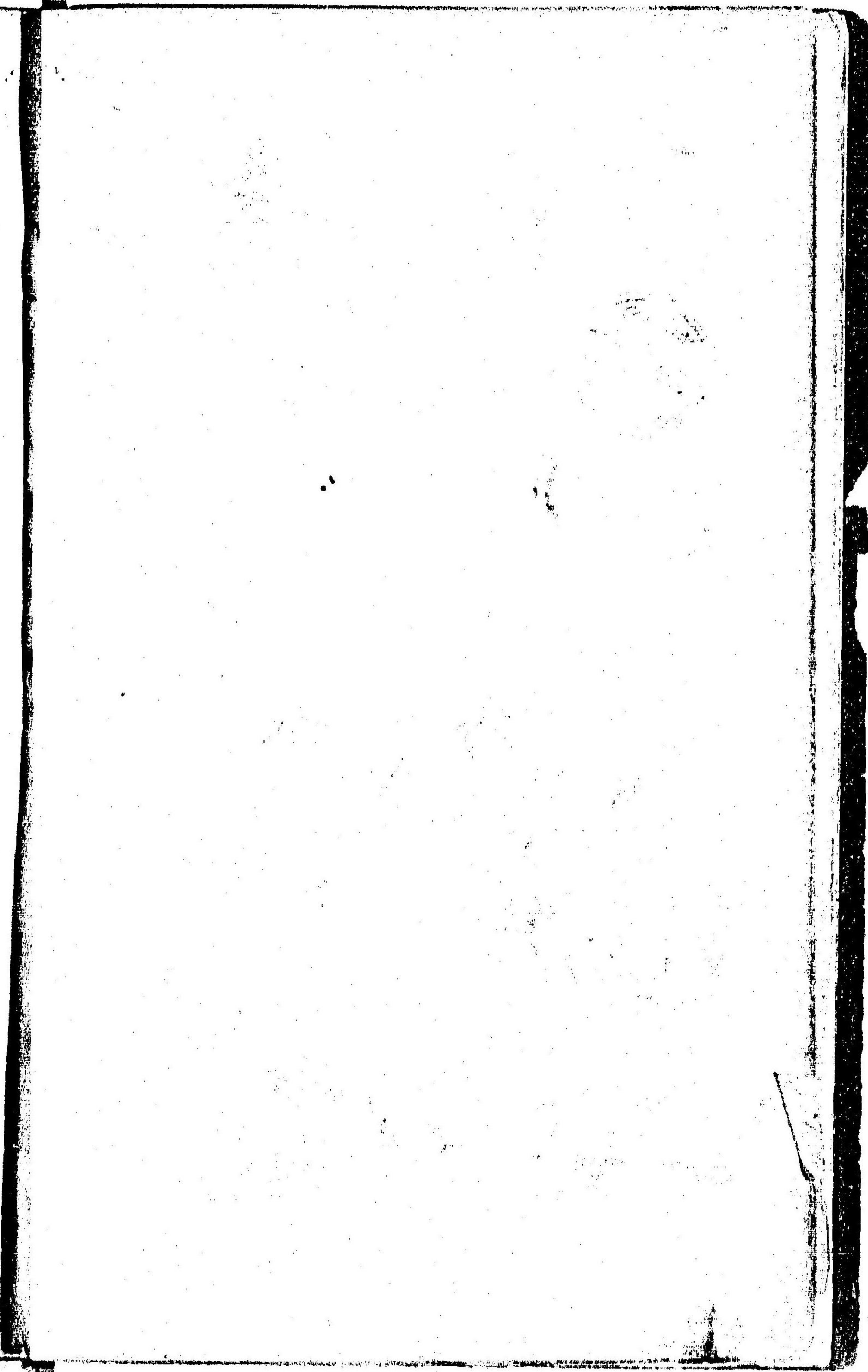
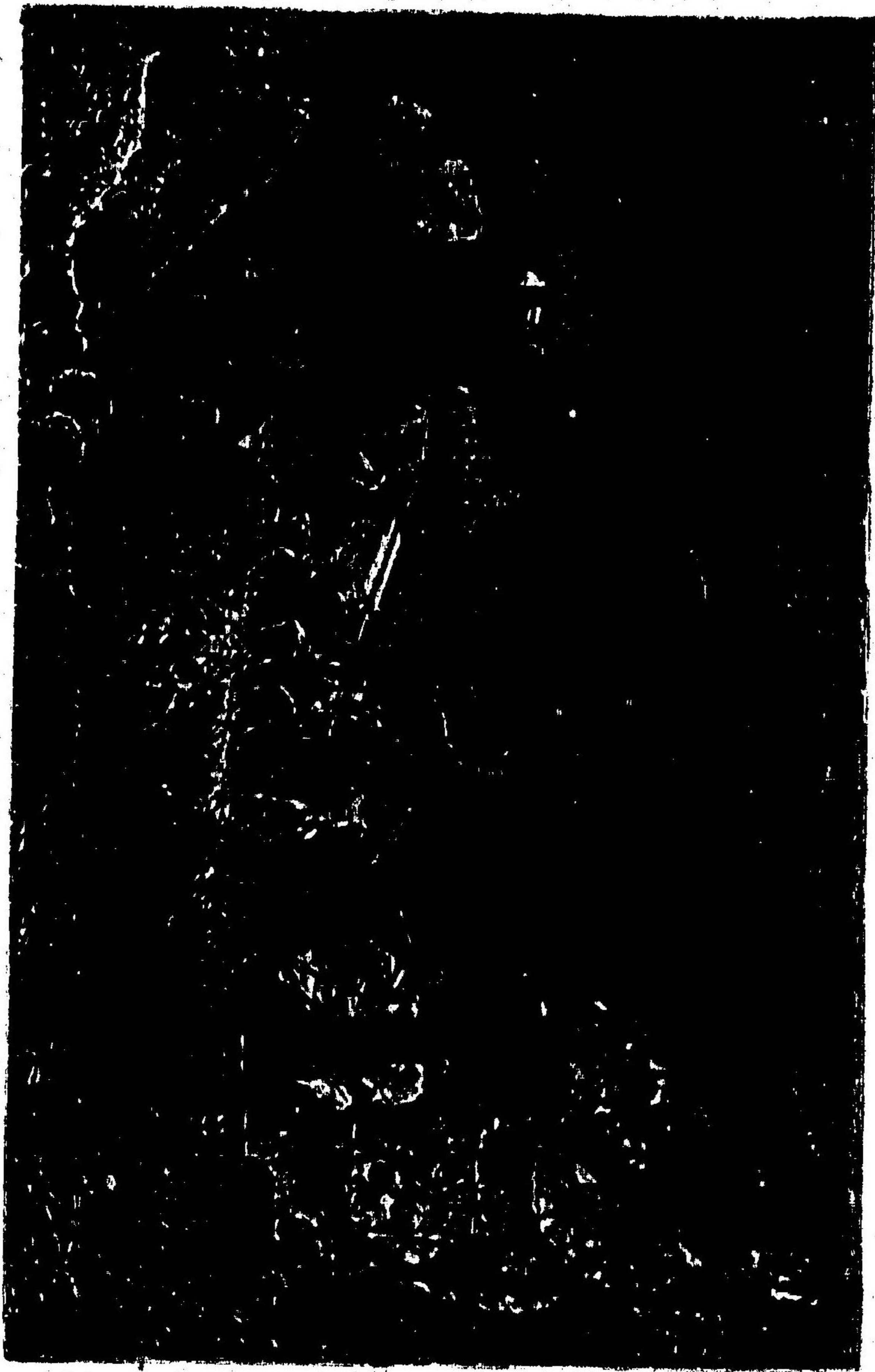


新島一平
大正九年九月八日

新島一平

新島一平
大正九年九月八日

る内と所るす見柱のほれ床てしとんら去び運を標標標人は



闇黒亞弗利加第四編

目次

第十九章 バナルヤに到着、バーテラットは死せり。

扶助隊○奇跡の田圃○余等○ボトに墜す○キロンガ、ロンガ、巴江の部下の非難に内つて謝罪す○酋長余等に應答を返す○ドクラー、ミーヤ井に十四人ガドイ地帯に歸る○イチャウ河を渡る○余等が謝罪の辭○余等皆て通知し置きたる荷物を殺傷す○マンヌユムの御解毒○レンダ河に懸橋す○肌へたるギン人○ザンウーメル人とギン人の出陣本非に死傷○余の獵物ランデー○ウロヤンダの廣大なる間地○土人の婦人等御解毒○余等ウヤロウの形跡に墜す○アミー、フオーヤムに於ての馳走○チバビ、ソオリス○アマンダの破止場に留る○ギン酋長の死害○ハンゴの陸に據り置きたる余等の荷物は切られたり○ロハム井にナンテラット○林間通行の災厄○余の使直サミとザンウーメル人との對話○イマヤガ村に於ける許多の蘭船○余等はアビシムに迫り、ザンロバハ人の一小女に會す○チロヤンビの瀑布井にマンガの瀧○ハンガの土人○マアウイの地に於て余等殺害の宴會を妨害す○リスツの瀧に於てウガロウに迫り、其に余等の使者等に處て害に會す○使者の一人殺害の遺體を踏る○ドクラー、ミーヤよりバーテラット少佐に迫りたる前白き青輪○余等の舟行陣河に從つて下る○ハンダの土人○ナイアンダを船に上り余等の追ひ○陣河に迫りたる赤黒○沖舟各地の荒船○余等マナルヤに墜す○ギン人に會す○少佐は死せり○バナルヤの會話

第二十章 後隊の悲劇

ナンテラット少佐イ、エム、バーテラット○ウロウ、リス、ウロウマンン兵○ハンナント、マード兵○トレン井にギン

剛兵○後頭の處置に關するマーテラント少佐の報告○ガチー兵との對話○ガチー兵に與へたるマーテラント少佐の書翰○ワ
ルミアム、ガチー兵の記述より考案し得べき事實○ワード兵バンヤウに於て捕縛す○スマンレー、フォールムに於て少佐の敵
師の在り○マーテラント少佐の遺骸○ガチー兵の語りたる虐殺の次第○遺骸人ヤンガの所語○ワミアム兵はバンヤウの
屯營に於て熱病の爲に死す○前後兩陣の會合○會營の置くべき状況○チアツアツにマーテラント少佐○ワミアム兵○
ハルバルド、ワード兵の報告。

第廿一章 ナイアンザに對する第三回の旅行。

ガチー兵非にザンローバル人○ザンローバル人の懇請○マエオタタの毒○アエラウ非にサリムとの會話○余等捕隊に向つて
ナイアンザの宿營を語る○余等チアツアツをバンガンケの島に待つ○人員の點檢○八月十二日附スマンレー、フォールム
リのワミアム兵の舟輪○南水舟隊の出發○マ、の瀧○ウカローウ非にサリム、ミン、モクメツドの渡船○チアツアツ。
マーテラント少佐非に其人尖○サリム、ミン、モクメツド○チアツアツに對する余の答○サリム非にマンニエム人○スマン
の離落○マンニエム人尖非にマンニエム人間の天然痘○二人の狂女○更に二人のザンローバル人捕獲者殺す○遠征隊に於ける
約束の破却○アエラウの相續ビリスツの瀧○一行中の十八士人の爲に喰はる○マンニエムに於ける舟の擱着○マンニエムに於
けるチアツの宿營隊○アエラウ非に應○余等の料理人ワヤン難穴の爲に死す○パンガの瀧○チウヤンビの瀧○船上の出展○一
行中の病人○土人の愛情○ガチー兵バビカイの村を見す○モミン、マシヤ非に攻襲○バビカイ土人との出會○ロセ、ゾロ
ードに於ける軍軍の使領ソータの死○アエラウに於ける出展軍○ザンローバル人捕獲の結果○アエラウの瀧に於ける不慮
○アエラウに進むに先づて食物の調集を爲す。

第廿二章 ガドー壘營に到着す

再びウカローウの屯營に遷す○ソングに由り○一行イチム河を渡る○余等アハケの耕作場に達す○ガチー兵土人の火け
を計る○土人の歴史并に衣服○手摺扇を以て會話す○土人の妻○森林間に於ける捕獲其他の獸類○アエラウの問答○余等
破れたる衣服○イヒム河○食物の欠乏○アエラウの食物○ウレテ糧食を捜索す○兩陣會合の欠却○余等再びカロンガ、ロ
ガの村に到る○更に死するものあり○森林、旅行に便を加ふ○アエラウの小捕獲○土人并に捕獲物の語○余等カ
の問を絶く○旅行隊の失敗○ソーマタス人の最後の生俘者○強雨降る○インダローに於ける遺骸の發見○余等ダイ河に集
す○余等の會營に於ける遺骸○余の使領ソータの森林に遺す○余等ウカローウを離れ行く所を知らず○余の使領ソータ
り来る○帆船の會營○余等全隊を捕獲し、林間に於て之に遺す○イヒム河○次でガドー壘營に到着す。

闇黒亞弗利加第四編目次終

閩黒亞弗利加第四編

ヘンリー、エム、スタンレー著
五洲 矢部新作譯

第十九章 ハナルヤに到着、パータラットは死せり。

其地獄○行路の困難○余等イボトに達す○キロンガ、ロンガ、己れが部下の非難に向つて謝罪す○諸酋長余等に施儀を返
 還す○ドクター、マータ非に十四人がドー屯營に歸る○イナムリ河を渡る○余等が舊營跡の跡○余等皆て相知し置きたる滑
 物ヲ復歸す○マンヘイの物擧者○レンガ河に架橋す○帆へたるマータ人○ザンローバル人とマータ人間の出來事非に死虫
 ○余の獵物ワンデー○ウレヤンダの廣大なる間地○土人の婦人等擧擧を爲す○余等ウガロリーの屍跡に達す○アミー、
 フォールスに於ての馳走○テバビ、フォールス○アハンゾアの波止場に宿る○マータ酋長の死喪○マソボの邊に埋め置きた
 る余等の荷物は切られたり○ロムヤ非にナンゾ失踪す○林間通行の災厄○余の使來サヤとザンローバル人との對話○マン
 ゴ非に於ける許多の驚駭○余等はアビシバに達し、ザンローバル人の一少女に會す○ザンローバルの遺布非にマンガの處
 ○マンガの土人○マアウイの地に於て余等被害の被害を助告す○マソンの處に於てウガロリーに留宿し、茲に余等の使者非
 に逃亡に會す○使者の一人被害の證據を語る○余等の舟行隊河に從つて下る○マソンの土人○ナイマンヤを離れしよ
 り余等の通行○後隊に關する消息○沿岸各地の驚駭○余等ハナルヤに達す○ボチー氏に會す○少女は死せり○ハナルヤの
 會談

六月十六日早朝、余等は勢好くホドー嶽を出發してヤンマヤの方に向ふ、兵并に屯圍等は皆余等を送りて余等の無事と成功とを祈れり。一行は一百十三のザンワーバル人、九十六のモーア人、四人のエイムの兵卒、二人の白人、外にドクター、パークは十四の人衆を率ひて余等とイボト並同行すべき都合なり。十七日の夕に於て、余等は非常なる暴風雨を犯してインマカに達し、翌日は他の西蕪實を集めんが爲に止れり。十九日に、余等はウンダグ、レンヤに於て會營し、翌日はウンマヤに到りしが、是に至て余等は再び森林進行の困難に遭着せり。余等が過去七箇月間殆ど忘れ居りたる、先鋒叫喚の聲は、一層の響を以て余等の胸を打てり。

「氣を附け！氣を附け！赤嶺の大軍だ。銃甲がある、銃甲がある、左の方には隘路右の方は谷だ。樹叢の林だ、オー茲に穴がある、俯へるぞ、泥濘三尺。東へ寄れ、又嶺だ、及穴だ。是れ會營より會營に達するの間殆ど絶へざるの音聞なり。」

此邊の村落は唯僅かに存立すると言ふ迄の事にて、小屋は傾き、屋根は腐りて居住に堪へ得ぬ有様あり。併し余等は此中に入つて眠らざるを得ず、過度の疲勞と激烈なる暴風雨とは余等をして會營を作る能はざらしめしを以てなり。

二十一日に、余等はマンダグに達し、翌日はレンダの間に於て會營せり。ホドー嶽より四十

七時間進行の後、余等はイボトなるアラアの村落に入れり。此處は余等が曾て飢餓の餘に、彼等落着者の獲する所と爲り、余等の部下が大に武器と弾藥とを失ひしの所なり。今や部下は何れも強健の身と爲れり、毫も彼等を恐れず、寧ろ復仇の爲に一擊を加へんとの意氣込を見はしければ、酋長カロンガ、ロンガも大に之を恐れ、彼のマンユエマ人が不法の舉動を以て余等に對せし罪を謝し、何事にても余の命に従つて報復の道を講ずべき旨を告げ、而して十九挺のリメントン銃を余の前に供へたり。余の配する所に據れば彼等は三十挺を所有せざるべからず、此他に六挺は余が支拂の抵當として預け置きしもの、二挺はストアアス氏が余の名に由て與へたるもの、一挺はテルソン大尉が賣りしもの、十挺はザンワーバル人が賣りしものなり。必竟十一挺は未だ余が手に戻らざるなり。又彼等は飢餓に迫りたるザンワーバル人より二箱と三千個の銃包を買ひ去りしが、余の手に戻りしものは僅に五十に過ぎず。當時カロンガ、ロンガの人衆等は地方に掠奪に出でしものと見え、營内に止るものは至て少なかりしかば、余等は能く五十の人衆を以て之れを打破するを得べかりしも、余は敢て此事を爲さしめず。余等は遙に其重の目的を有するものなり、一日も早く少佐パークラント等を助けざるを得ず。且つ又徒らに茲に戦ひを爲して一時の勝を制するとも、ホドー嶽の状況は十分堅固なりとは言ふべからず、彼等復讐の爲に彼處に向つて襲撃するに至らば、嶽内の人又其安危を保すべからざる

を以て、余は深く彼等と實むることを為さざりし。
 此事情あるに由て余等は、余等の前に供へたる施餼と、山羊、米等の贈り物を受け取り、又ザンツ
 ーバル人をして彼等が所有する所の象牙を賣らしめ、以て二百貫の米を得たり。是れ余等の旅行に
 向つて尤も必要なるものなり。
 翌日に至り、酋長は更に二挺の施餼銃を返へせしが、余等の部下は僅く、皆武器を以て喰ひしの故を
 以て、余は之れを彼れの手に托し、先きに與へ置きたる六挺の施餼銃と共に、彼れに支拂ふべき金の
 抵當に宛てたり。
 午後に至り、ドクター、パークは彼れが十四の乗車と、十三の荷物を負ふてポドー縣野への脚途
 に上れり。余は彼れを通じて最後の指揮を艦内の人に與へぬ。
 六月二十五日、余等は十五のマンニエ人を雇ふて博博と爲し、余等にウガローアの外營なるアマ
 の都落を伴ふべきの約束を調へて以てイボトを出發せり。午後三時に余等はイナエリ河に到着し、一
 度に九人を運ぶに足るべき舟を得て、以て前岸に渡る。此一回の往復平均二十三分を要すると故、余
 等の一行未だ其半を渡らざるに日は已に暮れたり。
 翌日早朝に、再び渡行の業を始め、二時に至て凡て對岸に渡るとを待しが、獨りマンニエ人等は、

之を渡るに照し、或はザンツーバル人等の復讐を恐れ、敢て之を渡るとを為さざりし。

余等は今可なり人なきの森林間に入れり、去歲十一月に於て遠征隊が、一箇の慈悲なき飢餓の爲に皆
 しめられしは則ち此所なり。余等は再び、余等の一行が歩みながらに、相率ひて斃れ去りし所を見
 舞ふに意なし、當時偏に余等の心を支配するものは、先きに涙出したる二十の使者は、已に後隊より
 の背輪を持って此邊に歸り来るならんとの想像是れなり。彼等が未だイボトに到着せざる以上は必ず
 此道に於て會はざるべからず、彼等は他に道を知らざればなり。余等は此想像を懐て渡行場より殆ど
 三時間の旅行を爲し、余等が去歲十月十四日に於て北岸に渡りし所の合營に達せり。余等が故に困難
 の中に止りしの際に去歲尙ほ今の如し、廣き尖の根に、木皮を以て、カニス頭領等の爲に木皮に書
 附けたるの文字は、依然として明らかに余等の眼に映せり。

二十八日午後一時十五分、余等はイナエリとイヒエルの合流に對するナルンが飢餓の合營に達せり。
 去歲十月ナルン大尉は幾多の病人と共に飢餓を友として致に止り、死に類したる周囲の人々が一擲
 の食だに得る能はずして血に泣くの間、彼れ自らも又許多の潰瘍の爲に其足を破はれ、起つ能はず、
 動く能はず、時に時を待ち、日に日を待ちしの後、僅かに彼れの友人ウエフソンの爲に扶助せられて
 九死を一髪の間免れたるは則ち此所とす。余等は今四日間にして此間の旅行を爲し得しも、彼の時

に當ては十三日川を費せしなり。飢餓の人の足を止むる又甚しきものある也。

當時マニソンの扶助隊は盡くの荷物を運ぶ能はずして、残りを地中に埋め置きしが、余等今之を掘り出し見るに依然として其儘に存せり。メルマンハムのカイナックに山て製造されたる弾薬は、八箇月の間沙中に在り、絶へざるの雨に、熱帯地の濕氣を受けしにも拘はらず、其性質を變りし所は滲て少く、八分は尙ほ元形の儘にて十分の使用に適せり。此中凡そ一千箇を各人の間に分與し、又他の要用なる物品を集めて八箇の荷物を造り、残餘は再び元の場所に取りめて急ぎ此地を出發せり。

此夕會營に達せし時、余等は四人のマーア人、ワンワーベル人の荷物を以て何れか逃去せしと知りし。彼等此森林の中を知りつゝ其足跡を哨ます、是れ道途の困難なるに驚いて早く已に藁を河中に求むるに至りしには非るか。果して然らば彼等も又憐むべきものなり。

日没に於て、余等は彼のマンユエマの捕獲者等が、余等の會營に入り來りしに驚けり。彼等は一旦屯營に逃げ歸りしも、酋長キロンガ、ロンガは之れを叱責し、其務を全ふし余よりの書狀を有するに非れば決して歸り來ると勿れと命せしに由るなり。

二十九日に、余等は河岸を離れて森を横切り、道を南西の方に取て、皆てヌターアヌ中尉がカガローツよりの踏路に取りたる道に出でんと欲せり。如個ランツトは常に能く道路を見分るの明ありと稱

しければ、彼れをして先導を爲さしり、二十九日より三十日に渡つて専ら南西の方に進めり。余等は途上種々、土人の道に遺棄せしもの、ランツトは之を見分ると能はざりしかば、余等は近に余等の見る所に從つて進み、七月一日早朝に、レンタ河の谷に入れり。時にランツトは余等は已に道よりも來過しものなるべしとの事に、余等は西方の道を取り、直接に森を通じて旅せり。二日の正午に、余等はレンタ河に出でしが、此河筋は翌日の正午迄、余等が進みし間、常に北、北、東に向つて流るゝものなるを見たり、河水兩岸の闊く所を爲りて僅に三十ヤード幅あるを發見しければ、余等は之に橋を架して對岸に渡り、以てツガローツの屯營に達するの道を見出さんと欲せり。依て余等は近隣の林より三本の喬木——一百十五尺一百十尺并に一百零八尺の長さある者を選び出し、之を對岸の岩石に架して安全なる一橋を造り、五日の初十時に於て一行は對岸に達するを得たり。

マーアの火等は荷物を輕めんが爲に、麻糸を途上に遺棄せしを以て、今は深く之れが報果を收むるの時に及べり。彼等は頻りに食物なき事を申出でしが、他の割合を以て決して然るべき筈なし、余は特に彼等のみに向つて巨額を供給すると能はず。依て彼等の中には次第に過勞瘵の徒を生ずるに至れり。

余等は左岸に沿ふて西方の道を指し、此間南東并に北西の方に涉れる幾箇土人の道に遺棄せしが、併

し余等は未だ一も是れぞ確實なるべしと思はるゝ道を見出すと能はざりし。
六日に、余等は其地は廣からざれども十分に實を結びたる芭蕉林の邊に來りしに、飢えたるモーア人は恰も狐が好餌を獲たるが如くに此中に飛び入り、忽ちにして全林を齧食し終れり、然し其中三人は地上に隠くし在りたる鐵甲の爲めに其足を傷めぬ。

七日、余等は一回雨を衝いて進み、全身ぬれ鼠の如くになりて道なき森林の中に合營を爲せり。翌日一時間許の旅行に出で余等はパリアの一小村に達し、後五時間を経てパンヤヤに留れり。

此日余等は種々の困難と騒事とに遭遇せり。余等がパリアを出立するや、忽ち寒氣を含みたる驟雨降り來り、裸裎なるモーア人三人は互に數歩を隔て、頓死せり。余は此驟雨の始に於て留留を命じ、一百五十尺四方の天幕を張りて一同を此中に入らしめしが、雨の止むを待つて再び出發するに當り、尙ほ周圍の枝葉よりしたしれ落つる水は少なからざりき。ザンワーバル人は是等の事に馴れ、且つ身も健全なりしを以て格別の苦惱を覺えざりしも、モーア人等は之れが爲に大に身心を害し、恰も射られしが如くに遂に斃るゝに至りしなり。

エモン、パンヤの兵卒一人并に一人のザンワーバル人は鐵甲の爲に激しく足を傷け、余等人をして彼等を選ばしむるの止むを得ざるに至りぬ。パンヤヤに近く、更に他のモーア人病に罹り、一人のザン

ワーバル人は大膽なる婦人に山で射られ、矢は肋骨の間に入りしが、併し生命に關する程にては非らざりし。此他に尙ほ二三の奇禍に罹りたるものありたり。

翌日土人の一婦人、自らウカローフへの道を知ると稱しければ、余等は之れに任せて進み、尤も難なる旅行を爲せり。到る所皆危険の道にて、或は數丈の高さに横はれる滑かなる樹を渡り、或は急流眼を眩するの邊を越へ、時には又深き林叢の間を匍匐して進み、或は枯枝を縱横に交錯せるの地を踏み、歩々皆危険の思を爲して打ち進みしの後、正午に近く余等はウヤヤンダの廣大なる開地に出たり。余等は此地に近く、早く合營を爲し、人衆を派して數日間の糧食に供へんが爲め、芭蕉實の團聚を爲さしむ。

天幕を観察して、余等は北緯一度零分十六秒の所に在るとを知れり。

十日に於て、余は此道を進むに於ては當に目的の地に達する能はざるのみならず、或は八日に合營せし所の近邊に戻りはせぬかとの考を懷きしが、ザンワーバル人は頗りに、道を知るは土人に加はずとの意見を述べし故、其酋婦人の後に從ひ行きしに、十一時頃に至て果して八日の朝通過せし所の一小村の邊に出でたり。斯くて余等は全く此邊を一週せしなり。故に於て人衆等は大に怒り、彼の婦人を殺し去らんや勢を見せしが、余は其敢て故意に出でしに非るとを知りければ、單に彼の女を放逐し

たり。余は磁石を手にして北方を西方へと通み、十一日より十二日の朝に至り、漸くにして北東の方に涉れる一路を發見せり。

七月十三日九時に於て、余等はウガローアの外營に聞するイチエリ河畔の合營に達せしが、見渡すに彼等は已に此地を引き拂ひしものと見えたり。余等は茲に於て少佐の消息に接するを得べしと思ひしが、同ふべきものは已に見えざりければ、直に又イチエリの岸に沿ふて道を急げり。一昨の風色舊に依つて異ならず、彼の水其の波行場、彼の合營、此の圖等皆余等の熟知する所のものなり。

翌日糧食は凡て盡き、モーア人は二人三人と死去す。余等アミリの流に達せり。余等合營を爲すや否や、人衆は馳せて糧食の匯集を爲せり。ウガローアは此近邊に六百の人衆を養ふとなれば、少許の距離に於ては食物を得べからず。余等の部下も又遠路を厭はざるなり。彼等は南方の道をたどりて頻りに突き進み、數時の後漸くにして一山——其が麓は一林に鬱鬱なる芭蕉林を以て蔽ふの邊に出でたり。彼等の喜悅思ふべし。夜に入りて遙く、彼等は此佳報を聞らして合營に傳へ、飢えて窮みたる眼に向つて、熱したる、香ひよき、巨大の芭蕉實を示しければ、何れも飛び立つばかりに喜悅の情を見はせり。

余等は勿論一日の滯留を命ぜり。翌朝拂曉合營は唯魯兵と病人とを残して何れも皆芭蕉林に向へり。

午後に至り、彼等は十分の菓實を得て返りしが、間々二人して大なる芭蕉の枝を抱え來る様、恰も彼の形像に示せる、カレマとマロレニアがイレカルの捕獲を運ぶに似たるものあり。之を持運ぶに便利を得せしめんが爲には、之を皮剥ぎ、之を切つて火の上に乾かすにあり。其糧者が留守の間、病弱なるものは起つて薪を集め、木の網を造り、之れを以て菓實を、徐ろに乾かすの用意を爲せり。斯く乾かしたる菓實は菓子を作り、或は粥と爲すを得るものにて、久しきに涉つて腐敗するとなし。

七月十六日に於て、余等は再び河に沿ふて進發を爲し、成るべく先きに通過せし所の道に據つて、七時間の旅行を續け、ナベビの流の上なる一小激湍に達せり。翌日はナベビの流を過ぎ、皆て余等が小舟を扱へせしの邊に出でしが、水底の荷物は已に何人かの手に由つて拾ひ上げられたるものと見えたり。四時間を經て余等はアマンリなる古合營の所に達す。道は以前に比して遙に平坦と爲れり、始めて余等の先鋒が斧を振つて之を切り開きしより以來、殆ど一千人の足は此道を踏み堅めたり。幾多の骸骨は到る所の途上に於て横はる、余等のモーア人も又更に此仲間に加はらざるを得ず、彼等は日に死するもの絶へず。彼等は悉く食物を節制することを知らず、時には過度に食し、時には飢餓に苦しむを以て、大に其身体を害し、殆ど憐むべき狀況を呈せり。余等は彼等をして休憩する所をらしめんが爲に、二日間アマンリに留れり。

廿日に、余等は七時間半の旅行を爲して、パンエードの湖を去ると數哩の所に合營す、途上一人のサン
 ワーバル人并に四人のモーア人を失へり。此四人のモーア人中に一人の頭領あり、彼等は鐵甲の爲に
 強く足を傷けしに由つて赴きに到りしものなり。此初出發の際に、彼等は彼れの人衆を集めて直に死す
 べきとを告げ、彼等に分與するに胸飾、足飾、耳環等項等を以てし、然る後遺首を述へて海濱として
 死せり。凡て是れ感すべきの事なり。彼等は如何ともする能はざる場合には、心を安んじて命運の示
 す所に任するを常とす。併し彼等にして若し之を爲すとなく、斃れて後止むの勢を以て飽く迄も事を
 逃げんと欲するの氣象を窺ひたらんには更に可なるものあるべきか。三時間許を経て、余等は一艘の
 舟を見出し、次で更に二艘を得るに至りければ、病人を以て此上に載せるとなし、大に余等の負擔
 を輕めたり。

翌日は僅かに二時間を過り。ウガロワは數日前よりしてパンエードの湖に滞留し、河上より湖口
 に達する迄、殆ど一村落に等しき一大合營の建設法を見計らひ居りしなり。ヒボ、モーアに達する
 前に於て、余等は都合四艘の舟を得たり。翌日は湖の近邊に於て晝休を爲し、余等が去歲運搬に堪へ
 ざるの故を以て、埋却せし所の、鋤其他の物品を掘り出さんとせしに、已に逃亡者或は土人等の爲に
 發掘されしものと見え、一物も残り居らざりし。午後に於て遅く、余等はパンボの湖に合營せり。此

湖の間に於てサンワーバル人は數箇の小舟を見出し、其んで之れに乗じて河を下りしが、彼等は急流
 激湍に向つて毫も注意を爲さず、忽ち舟を轉覆し去つて一人のサンワーバル人并にパレヤの兵卒に屬
 する一使僕を獲へり。パレヤの兵卒二人又此舟の中に在り、共に其施佈銃と荷物とを失ひ、辛ふして
 一身を救ふを得たり。

二人のサンワーバル人ウニマ并にナレンツと呼ばれたるもの、隊より離れ去りて其踪跡を失へり。依
 て余等は二十四日を、一日滞留の事と爲し、二人に向つて搜索隊を派山せしか、午後に至り遂に彼等
 を得る能はずして歸れり。然るに一時間許を経て銃丸の余等の頭上に響くものあり、何事ならんと之
 れを取調べしに、耶人は彼のナレンツにしてウニマと共に歸り來り、彼等は余等の部下、營外に在る
 ものを認めて土人ならんと思ひ、發砲するに至りしものなりと告げたり。彼等は又平氣に、彼等が余
 等と分れしの大節を物知り、彼等は途上に於て懸なる遺棄林を見付け、之を探り、之を皮剥ぎ
 て以て之を乾かさんとし、其間——凡そ十八時間——に道を失ひ、余等二百人の所在を知らざるに至
 りしなりと首へり。彼等の首を所殆ど信ずるに足らず、彼等にして若し果して遺棄林に留り、余等に後
 れしものなりとせば、土人等の取調む所と爲りて容易に脱し來るを得ざるべき筈なり、何となれば此
 邊の土人は常に、余等の後に追ひ來りて好んで迷路者を捕獲せんと欲するものなればなり。

廿五日、余等はヘビョウの池の上に會合し、朝日はホロホロ河の口に對するマヤヤの繁榮なる村に入
れり。是れ則ち今より十三箇月前に於て、トクロー、パークが見事に彼のサンサーバル人の足を截斷
治療せし所とす。

此日余は非常に林間旅行の害毒を感ぜり。余の身味は、久しきに沙つて唯植物のみを食せし故を以
て著しく衰弱を來し、常に比して神經の過敏を覺えたり。恰も此時に於て部下に三十の裸體なるマ
ヤ人あり、其顔色何れも最後の遠からざるを示し、其漆黒の肌もさめて灰色となり、骨は高く肉を弱
ましが如く、如何にして個體なる骸骨が今ま尙ほ歩行の力を有するやと怪しまるゝばかり。彼等は何
れも皆病に罹れり、或は腫瘍、或は潰瘍、或は疥癩、或は全軀に瘡癤を來して已に昔日の面影を失ひ、
余は一見爲に顔と塗つて同情の感に咽ぶ程なりし。地は一昧に腐敗せる草木を以て満たし、日光之を
照らして蒸發氣を蒸騰せしむるを以て、周囲の空氣は腐敗物の化を受けざるなし。加之ならず、余
等一步一歩を進むる毎に、種々の雜草細木、余等の頭、背、胸、衣服等を攻めて、左なきだに煩悶せ
る心に苦惱を加へ、茲には又許さぬ色の蟻ありて多くは樹枝の上に留り、余等の通行を待つて即上若
しくは首の周圍に落ち、以て一度之を刺せば其痛は鮮或は赤腫よりも一層甚しきものあり。他に尙ほ
是等の毒虫少なからず、之れをして身軀健全に、希留十分なる時ならしめば左程意とするに足らざれ

ども、次第く活氣を失ふの今日、余は一方ならざるの感慨を生ぜり。余の心は已に先きに送りた
る二十の壯夫が未だ後隊より返群を持來らざるに驚けり、如何にせしならん、如何にせしならん。何
人も答ふるものなければ、幾間の絶ゆる時もなし。余は殆ど過去一箇月の間、肉類を食せしとなく、
單に蒸蕪を食するのみなれば、爲に困憊せる胃を満たすに由なし。余の筋骨は次第に高くして旅行
の間に、容易に震慄するを見たり。

會營に於て、余は余の使僕サーと他のサンサーバル人とが左の如き會話を爲すを聽けり——
サー曰く「恐くは、主公は永く彼の生命を保つ能はざるべし、彼は近頃日に生氣を失ふものに似
たり。」

他は曰く「兩三日の中には何れにかして山羊或は雞を見出して、主公に捧ぐべし、肉類を食しなば必
ず回復すべし。ウカローワにして彼の地を出立せざる以上は、我等之を得るに難からざるべし。」
サー曰く「嗚呼サンサーバル人が、禽獸に非らずして人間なりとせば、彼等は集糧の際に得たる肉
類を主公に捧げざるべからざる筈なり。彼等は彼れの銃砲と彈藥とを用ゐ、又之れが爲に給料を受く
るものに非らずや。何故に彼等は彼れの施儀を以て獲たる所の肉類を彼れに分たざるにや。」
「思ふに斯くの如き大悪人は是れなかるべし——彼等にして果して之を獲たるよめりとせば、他は答

「サリ曰く」之れありく、我は之を知れり。彼等の中には殆ど毎日の如くに、雞或は山羊を見出すものあれども、一匹も主公の前には之れを持ち来らざるなり」。

此時余はサリを呼びて果して其事實なるや否やを問へり。而して余は彼れの前に出で、現にサンマーハルの頭領ムラホ井にクアなるもの去る二十五日に、一頭山羊、三羽の雞を見出せしが、之を會營に持ち歸らずして私に喰ひ去りしとを確りたり。蓋し斯くの如きとは數々之れある例ならんが、余の氣附きしは今を以て始とせり。余も殆ど之れが爲に生死の境に在るとなれば、更に部下のものを飛むる所ありしに、此日よりして彼等も余が言を味し、夕刻に及んで三羽の雞を持ち来りしかば、數日を以てして余の氣力は大に回復せり。依て思ふにサンマーハル人も唯時に肉類をだに食するを得ば、尙ほ回復の見込あるなり。

余等はアヘマに於て許多の西番實を準備すると得、又許多の小舟を發見するに至りければ、此中に、凡てのサンマーハル人、荷物、并にサンマーハル人の一半を載せんと爲せり。

余等は翌日アマガの瀨に近く會營を爲し、而して二十七日に、舟隊を以て無事に瀨を下り尙ほ數哩の旅行を爲して留る。

此日余等は、去歲七月三十日より八月に涉り、道を失したる遠征隊の爲に、非常に待ちわびし所に來りて晝飯を爲し、而してマインの村に於て會營せり。

日没後、余等は此村に於て巨大なる蝙蝠の大軍を認めたり。ヌツロツ路にて之れを「ボ、」と云ふ。彼等は余等の頭上を蔽ひ、河を渡つて今夜の獲物を拵んとするなり。余は一度に六百八十の蝙蝠飛び來るを數えしが、此測を以て計算するに、此村近傍に棲むものみにても其の數は數千の多きに上るなるべし。

七月三十日に於て余等はアヒンバに達す、是れ則ち土人等が去歲余等に対して激戦せし所にして彼の毒矢の爲に、部下の數人を失ひし事は今尙ほ明らかに余等の肥應に存す。或る小屋の中に於て、余等は余等が天幕の柱を見出せしが、土人等は丁度木葉を以て、之れを包み、他に銃包紙の數片、外科器械よりの緑色の天幕紙、并にリメントン彈藥の眞鍮片等あり。思ふに土人等は是等を集めて一種の記念に供せしものならんか。

他の小屋に於て、余等は鐵製の首環并に十個の未だ用ゐざる銃包を見出せり。此銃包は恐く我が遠征者の所持せしものにて、彼れの肉味は疾くに彼等の釜中に入りて晚餐の好佐料と爲り終りしものなるべし。他に一個の古きヤッケを見る、愈よ以て其然るべきを説すべし。

余等が上陸して一村の中に進入するや、殆ど八歳許なる裸体の娘、突然余等の前に出で来り、サンマール語にて語て曰く――

「其通りく、銀砲の音を聞き逃して隠れ家より出て参りましたが、銀砲は他の人が所持し居るべき筈なれば、君等は我等の一族なるべきか」

斯くて彼の女は其名を告げてハツナ、ムヤニなりと言ひ、而して彼の女は他の五人の年丈けたる婦人と共に、病氣の故を以て、ウガローワの爲に見棄てられたるものなるが、ウガローワが大なる舟隊を以て此地を出發するや否や、土人は突き來つて五人の婦人を殺し去れり。此間に彼の少女は身を挺して、林藪中に逃れ、葉は草根木實を探つて之を食し、夜は私かに芭蕉實を探りて其生を保ち、以て炊に至れるものなるを語れり。ウガローワはアヒンバと戦つて大に之れを殺傷し、糧食を集めんが爲に炊に止ると五日間、凡そ十日間程以前に出立せしものなりと云ふ。

四時間半の旅行を以て、余等はインクウニアに達し、更に七時間半の進行に由て、マヤヤンビの湖を去ると數哩の所に來れり。施條統并に彈藥等は之を陸揚げし、水火をして單に小舟を取つて左方の支流を下らしむ。陸行隊は荷物の處理に就て急はしき間に、水火の多數は右方の支流を下らんと好み、其結果一人のサンマールの酋長、五人のローア人并に一艘の小舟を失ひ、同時に他の二艘も擱置せ

しが此分は取り收むるを得たり。サリムと名づけられたるサンマール人は身を激しく浪に打たれ、又岩に撃たれしを以て、是より殆ど一箇月の間は歩行するを得ざりし。

午後三時に、余等は再び旅行を続け、同じく五時にパンガの湖に達せり。小舟を渡る爲に一隊の人衆と分ち置き、余等は此湖の下に合營を造る。此間陸行隊は唐黍の少許を發見し、之れを粉にして余が爲に晚餐の粥を作れり。

半夜よりして降雨頻りに、八月五日の午後一時迄絶へ間なく降り敷きしが、其夜に至り余等は漸く十九の小舟を安全に、我が合營の前なる湖の下に繋ぐを得たり。

パンガの土人等は、凡て彼等の小舟、雜其他の物品を携へて右岸なる一小島の中に移り去りしが、彼等は諸所に於て漁網を其儘に忘れ行きしかば、余等は之を以て若干の大魚を捕獲するを得たり。余等は固より土人を害するものに非らず、彼等は安全なり。然るに彼等は島中より出で來り、水を頭若しくは身体に注ぎて、平和を欲するの意を示すにぞ、一行中の氣輕なるもの追み行きて話を始めたり。土人等の中、豫め計る所ありしや否やは知るに由なけれども、其勇猛なるもの數人漕を渡つて來り、突然部下の一人を背部に於て刺せり、

翌日は滞留の事と爲し、四十の人をして内地の方に集積を爲さしめしに、夜に入つて各自十分の獲物を

を携へて来れり。但し其の中の一人(モーア人)は矢の爲に背部に重き創を負へり。

七日に於て、余等は余等の古營跡なるイチニリとウングラとの合流の所に来れり。此十一哩許の距離を舟行隊は僅かに二時間半にて達せしが、陸行隊は八時間餘の時を費せり。

余等が翌日到着したる所の、北岸なるマンバンガに於て、余等は昨多の糧食を發見するとを得しが、爲に部下のサンワーバル人ヤヤフなるものは胸部に、激しき矢傷を受けたり。一インチ半程の矢の先きは内部に折れて容易に引き出すと能はず、彼れは凡そ二箇月間事を執ると能はざりし。

次に到着したる村落は則ちマイユイなるが、以前に比して其見えを變へたり。凡ての村は火の爲に焼かれ、立派なる芭蕉林は打ち壊され、一村恰も一合營の形を成せり。是れ疑もなくウガローアの合營ならんと信じ、余は部下をして注意の發砲を爲さしめしが、彼等は敢て之れに應ぜず。依て余等は左岸に於ける余等の合營に歸りしに、茲には彼のヌアアヌ中尉が、後隊バーナント等の爲に、千八百八十七年七月三十一日の日附を以て、木皮に記號を附せるを見たり。

一同古營跡に歸るに及んで余等は茲に驚くべき物体を發見せり。ウガローアに屬せる一人の婦人の跡あり、漸に殺し、洗ひ、以て河に近き岸上に横へしものにて、其側には三房の芭蕉實、二箇の大鍋并に五人を容るに足るべき一艘の小舟あるを見る。是れ則ち彼の女人種等が、今夕の襲撃に向つて草

備せしものなるべけれど、余等の發砲に驚いて遂に逃散せしものと見えたり。

河を渡つて一隊の斥候隊を派出せしに、須臾にして彼等は歸り來り、ウガローアは今朝を以て河を下るに至りしものなるべきと告げたり。余は甚だ遺憾に思へり、余は河下なる少佐の消息を、彼等より聴かんことを願ひ、又彼等に對して後隊の爲に、安りに村落を打破し、芭蕉林を平げ去るとなからんとを求めんと欲せしに、僅か一日の相違にして相會ふを得ざりしは返すくも遺憾の事なり。

八月十日、余はサンワーバルの總頭領なるラントに托するに三十五の強壯隊を以てし、余等の古道に依り、陸上ヲヌアの湖に向ふべき事を命ぜり。余は此間他の人衆を率いて舟行隊を構成し、急ぎ河を下りてウガローアに迫らせんとを希圖せしなり。但し其にヲヌアの湖にて待合すとす。

斯くて午前六時四十分に於て、余等舟行隊は出發し、流れに沿ふて舟を急ぎしかば、午前十一時に於て早くヲヌアの湖の上部に達せり。余等は急流激湍を見るに及ばず、又轟く湖の音をも聽くに及ばず、河の右岸に於て一大合營あるを發見し、眼を注いで之れを観るに、白衣を着けたる人影、林藪の間を去來するあり。是れ則ちウガローアならざるべからず、雖も銃砲の達すべき距離に來りければ部下をして注意の發砲を爲さしめ、又舟頭に向つて余等の旗を建てしに、彼等之れを察知し、古風なる鐵砲は重き響を放つて之れに應ぜり。須臾にして數艘の大なる舟は岸を離れて余等の方に來り、ヌア

ヒリ帯を以て我等を歓迎せり。常の如く互に挨拶を爲せし後、余は彼の六箇月以前に少佐に向つて派
 出したる二十の火火は、止りてウガローアの許に在るとを知れり。彼等は三月十六日に於て、スター
 アス中尉を辭し、ウガローアの古屯營を出發せしものなるが、其れより十七日間の旅行則ち四月一日
 に至りてワヌアの池に來り、此處に土人の襲撃を蒙りて進む能はず、遂に四人の同志を失ふて引き返
 へせり。彼等は到底此小人數を以て目的を達する能はざるを思ひ、再びウガローアの屯營に歸るとを
 決して、四月二十六日に同地に着し、以來該酋長の配下に戻りしものなり。是れより一箇月を経て、
 ウガローアは外營より人數を殘らず引き上げてイナユロ河を下るの旅行を始め、余等の火火も之れに
 従つて共に來り、七十六日間を費して、八月九日にワヌアの池に達せしなりと云ふ。

余等は余等の合營を、彼等の對岸なるパンアヤの樹村に於て送りし後、生存せる余等の火火はウガロー
 ア并に其諸頭領に伴はれて合營に入り來り、其中の一人沈黙なる聲を以て左の驚くべく、悲しむべき
 話を述べたり。

「主公よ、君が我等に向つて少佐に對する義勇隊を募らるゝに際してや、我等は何れも皆指つて目的
 を達し、以て至高の名譽と報償とを受けんとを欲せしなり。我等は一日も此事を忘れず、力の與ふ丈
 け、心の及ぶ丈けを盡せしが、遂に成功する能はず。余等の四人は殺されたり、他の十五人は何れも

傷を負へり、今に至りて全きものは余唯一人あるのみ。自信者の中二人は今尙ほ生存すれども、矢の毒
 に由り到底回復は覺束なかるべし。此中の或るものは一人にて五箇の矢傷を存せり。我等がアローバ
 に達する途は、途上格別の難事もなかりしが、彼處に於て遂かに熾烈なる戦は起れり。インジュエに
 於て二人は傷けられ、パンガの池に於て又三人、矢の爲に激しく自傷せり。是れより以來、我等は日
 夜殆ど戦を休むとなく、土人等は我等の迫まざる前に、早く已に我等の人數を知るものと見え、恰も
 我等を傷殺せんずる勢を以て四方より迫り來れり。何故に彼等は、我等が君と共に、曾て此地を通行
 せし際には無事を仰りながら、今回に限り斯くの如き事を爲すに到りしにや、我等之れを誰にする
 能はずと雖ども、思ふに我等の逃走者が一度彼等の手に罹りしより、彼等はサンサーバル人の肉の味
 を占め、以て我等をして彼等の二舞を演せしめんとするに至りしものならんか。而して余等が此村則
 ち今君等と我等とが合營せる所の此地に來るや、我等の中、事に堪ゆるものは僅に十一人のみにして、
 他は皆創の爲に病み、一人は死に傾し居りしが、最後の戦争は忽ち茲に始れり。彼の對岸なる大村落
 の土民は此パンアヤの土民と連合し、河は舟を以て濊ひ、林は兵士を以て濊たすばかりなり。我等一
 時間程の激戦を續けたり、彼等の許多は死せしならん、何となれば河上の如きは人衆を以て場を築き
 しを以てなり。戦は暫らく止り、余等は此間に障柵を建て、又た夜に向つて五六の小屋を造れ

夜に入りければ、余等は常の如く精兵を置き、以て敵の來襲に供ふる所ありしが、數日來の戦争に非常に、疲勞を覺えしものと見え、彼等も思はず眼に就けり。忽ち叫喚の聲あり、我等の眼を破る。一同銃を取つて近寄り來るものを打ち留めしが、我等の一人は已に彼等の爲に刺されたるなり。我等は擊つて六人を斃せり、斯くて暫らく彼等の足を阻隔するを得しが、此時酋長は叫んで曰く「是等の徒はマラ、マヤより逃亡せしものなり、一人も生存せしむべからず」と。聲に應じて士兵等は河の方より又森の方より來り、我等の銃丸が光を放つ毎に、彼等の顔は之に映じて、其數幾許なるやを知らず、我等又爲に膽を冷せり。ツキンは此際在つて、尙ほ毫も屈せず、人衆を勵まして「彼等は肉を求むるものなり、併し我等の肉は決して彼等に與ふべからず、彼等にして強いて之を得んと欲せば、彼等の仲間肉を得せしむべし」と。彼等は即りに土人の間に銃砲を續けたり。果して幾許の人之れが爲に斃れしや、我等知るとを得ずと雖ども、我等の銃丸殆ど空乏を告ぐるに及んで彼等は逃げ去り、事漸く沈黙に歸せり。我等の二人は之れが爲に已に死せり、ロノヤと名付けたる一人は、即りに聲を擧げて我を呼びしを以て、我れ彼の側に至り見しに、彼れは已に死に咽せり。彼れは唯余に向つて辛うじて言を爲して曰く「此ても行かぬ。返れ〜ウガローに、是れ我れが願みた、遺言だ」。



ト者別に彼女の所置の骨をアラカに弄す

り。
 夜に入りければ、余等は常の如く消兵を置き、以て敵の來襲に供ふる所ありしが、數日來の戦争に非常に、疲勞を覺えしものと見え、彼等も思はず眼に就けり。忽ち叫喚の聲あり、我等の眼を破る。一同銃を取つて近寄り來るものを打ち留めしが、我等の一人は已に彼等の爲に刺されたるなり。我等は撃つて六人を斃せり、斯くて暫らく彼等の足を阻隔するを得しが、此時酋長は叫んで曰く「是等の徒はアラ、マッロより逃じせしものなり、一人も生存せしむべからず」と。聲に感じて土兵等は河の方より又森の方より來り、我等の銃丸が光を放つ毎に、彼等の顔は之に映じて、其數幾許なるやを知らず、我等又爲に膽を冷せり。ソキンは此際在つて、尙ほ毫も屈せず、人衆を勵まして「彼等は肉を求むるものなり、併し我等の肉は決して彼等に與ふべからず、彼等にして強いて之を得んと欲せば、彼等の仲間肉を得せしむべし」と。彼等は頻りに土人の間に發砲を続けたり。果して幾許の人之れが爲に斃れしや、我等知るとを得ずと雖ども、我等の銃丸殆ど空乏を告ぐるに及んで彼等は逃げ去り、事漸く沈靜に歸せり。我等の二人は之れが爲に已に死せり、ロニマと名付けたる一人は、頻りに聲を擧げて我を呼びしを以て、我れ彼の側に至り見しに、彼れは已に死に呻せり。彼れは唯命に向つて辛ふじて言を爲して曰く「とても行かぬ。返れ〜ウガロ〜に、是れ我れが願みだ、遺言だ」。須臾



チチカカに遺言の所圖の遺言ヲカキテ其ノミヤ

にして彼れは最後の息と共に地に伏して死せり。
朝に至りて我等は我等の死者を葬り、而して柵内に六人、柵外に九人、土人の屍を見出せり。我等は一々彼等の頭を割ね、之を集め來りて一所に積み上げ、生存せる諸人と共に將來の方向を賦せり。我等十七人は尙ほ存せり、併し此中創を受けざるものは唯四人あるのみ。ウニマが最後の跡は遂に我等の志を奪へり。此有様を以てしては到底少佐の許に達し得るの見込なきを以て一回ウガローワの屯營に歸るとに決せり。我等は實に困難の上に困難を重ね、災厄の上に災厄を重ねたり。一度負傷せしもの、其未だ全く癒えざるに、再度三度傷けられ、而して我れ一人を除くの外は他に余きものなきに至れり。舟は覆へりて我等は五挺の銃條銃を失ひ、イヌメリアはパンガの浦に於て射られて死せり。余等はウガローワを出で、より四十三日にして再びウガローワに歸り、生存者は十六人なれども、中十五人は負傷せり。彼の傷跡は今尙ほ此話を實にするに十分なるべし。
我等は今以上の事實を具して足下に以聞す、足下幸に徹夜の存する所を忖度せよ。
余等と共に相對して始めて此話を聽きしもの、何れも皆涙を浮べたり。次第に彼等の頭は濡れ、次第に彼等の涙は加はり、同じく其情感を分つて嘆息悲傷の意を表せり。彼れの話は止り、余は之れに對して未だ述ぶる所あらざるに、人衆は彼れの方に馳せ行きて、彼れの手を握り、涙を拭ひながら叫

んで曰く「好くやりました、君等は假令失敗せざるとも、其業は成功に譲らず。」
 斯くして大胆なる十六の壯士は余等に歡迎されたり、余等はホドー機智を發せしより一日も彼等の事
 を思はざる時はなかりき。彼等は彼等の目的に對して成功する能はざりしと雖ども、其に其光榮は成
 功に譲らず、假令少佐の消息を獲て歸りしとて、余等の心を動かすとは之れには過ぎじ。彼等が作
 業と痛苦の語は能く述べられたり、併し彼等各自の頭、面、手、足に存する創痕は、更に一層の雄辨
 を以て此事實を説明せり。思ふにウガローワも此話を聽きて強く彼等を憐み、彼等を悔ひしなるべし。
 彼れは親切に彼等を通し、彼等を慰撫し、以て其剛勇なる身心を養ひければ、彼等も久しからずして
 其傷を癒やすを得、再び元の如く健全の身と爲れり。但し其中の二人は今尚ほ回復の場合に達せず、
 是れより二箇月を経て一人は全快し、一人は遂に死去せりと言ふ。
 ウガローワの合營に於て、余等は余等が二人の病氣全愈者、并に三人の逃亡者を見出せり。此全愈者
 はスターアヌ中尉が迎へに來りし時、船糧に出で、相會はず、其儘引き續きて茲に残り居りしものな
 り。又此逃亡者の一人は彈藥筒を以て、他の一人はパンヤ并に余の靴を以て、逃れ去りしものなるが、
 彼等は小舟の轉覆に遭ふて幸ふじて身を救ひ、以てウガローワの許に達するに至りしものなりとの事。
 彼等は囚虜として一旦スターアヌ中尉に引き渡されしが、數日の間に逃れてウガローワの屯營に歸り、

今又余の手に引き渡さるゝに至りしなり。此中二人は其後痛憤の味を示せしが、他の一人は天然痘に
 罹りて苦しみ、自らチヤヤンビの池に飛び下りて溺死せり。

ウガローワは彈藥に空乏を告げしを以て、余等を通するに特に懇切を以てせり。彼れは四頭山
 羊、四袋の米、三艘の大なる舟を以て余等に贈られしが、其に是れ余等に向つて尤も必要なるもの、
 殊に三艘の大舟を余等の舟隊に編入せば、余等は百三十の壯士、使僕、從者、モーア人夫并に凡て
 の荷物を此中に積み、自由に水路を下るとを得るなり。

余等は是に至て尙ほ少佐并に後隊に關する風説だも耳にするとを得ず。余が去歲九月ウガローワに托
 したる書翰は余の使者のものと共に余の手に返却されたり。ウガローワは四十五の部下をして、余の
 書を以て河下に向はしめしが、マイニエとワヌアの流との中間なるマンキヤに於て土人の激しき抵抗
 を受け、遂に引き返へすに至りしなりと傳ふ。却て少佐パーワットに宛てたる兩箇の書翰は其に
 彼れの手に通ずるに及ばず、余は後隊に關して念益す不可思議の感を深ふするに至れり。

翌日は滞在。頭領ラント并に彼の陸行隊は十一日の午後二時に至て漸く到着せり。則ち舟行隊が五
 時間を以て下りしの距離に對し、彼等は十五時間を費せしなり。八月十二日には凡ての小舟、無事に
 流の下に達せしを以て、余等は正午に於て出發し、河に沿ふて下れり。余等一營跡の側に通せし時、

ウガローアの斥候隊舟に乗りて水を上り来るに會せしが、彼等は頼りにバンド土人の強暴當り難きとを説けり。二時間許を経てバンドの大敵は余等の來者を告げて猛卒を呼び集め、數艘の小舟は余等の舟隊を觀察し居りしが、余等が勢の盛なるに驚きしにや、其儘退いて村落を引き拂ひ、其重なる場所に於て余等をして平和に一夜の合營を爲さしめたり。

余等は十三日に、南部へに到着し、糧食を供へんが爲に一日の滯留をなし、翌十五日は幾多の小隊を涉つて、マの瀧の下に合營せり。

余等は今水上に於て、陸行の三倍を馳すると計、十六日には二千の人衆を容るに足るべき島中の村落に於て留れり。此邊を通じて兩岸は皆樹林と爲り、土人の後形をも見ず、何故に斯くの如き慘狀を呈せしにや、ウガローアは未だ茲に來らず、併し後部の方に於ては彼處此處に土人の住居せるを見しを以て、察するに固は内亂一揆の結果にてりあるべきか。

余等がアルバルト、ナイアンザを出發せるより此日に至て八十三日、ボドリ、羅碧を離れてより六十口なり。余等の經過は以前に比して遙かに好運なるを得たり。ローア火に就ては、非常之を畏へり、恐らく其一半を喪へり、併しザンワール人は已に亞弗弗加旅行の困難に馴れしものと見え、其生命を喪ひしものは僅かに三人にて、中二人は溺死し、一人は發狂に由て其踪跡を失ひしなり。已に五百

六十哩の道は旅し終れり、パンガンシの島よりヤンアヤ迄は九十哩の距離に過ぎず、然るに後隊の事情に關しては未だ毫も聽く所なきなり。余は實に心を傷りたり、更に一物の心を慰するに足るものあるなし。日に食する所は唯一粒なる置魚實あるのみ、一度去りし氣力は又回復すべし等なし。余が事に當て容易に屈せずと自信したる心も、今は殆ど余の身を去れり。余は日夜に於て獨り河邊に處し、日光次第に低く、遂にマクパナの方位を蔽へる梢頭に隠れて、其形恰も沈むが如くなるに對す。須臾にして灰白色の雲霧は靜なる室を通じて涉り、行くが如くにして歸り、止るが如くにして行き、殆ど其方向を見分くるに苦んで涙心又憂鬱に泣くものに似たり。彼の後隊がヤンアヤを出發すべき頃よりして今や全く三百六十五日を経過せり。此間に於ては假令唯一百の人衆を以てして、日に七回の往復旅行を爲すも、彼等はパンガンシに來らざるべからず。東國と人衆との間に大破裂を來して、人衆等は誠く相率つて逃散せしものなるべきか、余等他に原因を推定すると能はず。夜深よして余は獨り天幕の中に在り、余の神經は余の意に反して余の心を安んぜしめず、余は暫はし志を天に捧げて以て余等が、余等の同胞を救助し得るに重んじんと祈れり。

十七日定刻に、余等は舟行隊を以て河を下り、何れも力無げに楫を漕げり。東天は已に紅なり、日光は多少の霧を通じて限りなき林木の梢を彩色し幾分か余等の心を引き立てたり。一行パンガンシの

地方を下る間に、余等の到る所何れも荒廢の狀を告げ、バナルヤの灣の如きは以前は當地に稲なる豊饒の地なりしも、今は等しく無人の郷に化せるを見たり。然るに九時半頃に至て余等は遙か下方に當り、靄霧の間に一村あるを認む。近寄るに従つて熟視するに周圍には障棚を列ねたり。垣火にして白衣の人あるを見る、余望野鏡を取つて之を照むに、赤色の旗は空中に翻れり、余の心は忽ち固を以て活きたり、一陣の風は旗を開いて中に新月星の横はるものあるを示す。余は思はず飛び立つて叫んで曰く「少佐だく、滑げ〜」何れも之れを聽して喜べり、叫べり、舟は脱走の勢を爲して水を下れり。

村を去る二百ヤードの所に於て余等は舟を止めしに、岸上に許多の人出で来る。余先づ問ふて曰く「君等は何人なるや」。「我等はスタンレーの部下なり」。彼等は正確なるスワヒリ語を以て答へたり。「一人の白人門に依つて立つものあり、余彼等の首に疑なきを以て舟を押して岸に近附けたり。近く進むに據つて彼の白人は、則ち我輩征隊の醫因助手なるウヰリアム、ボカー氏なることを知れり。余は堅く彼れの手を握つて曰く――

「ボカー君、變りはないか。少佐は何處に、病氣かね。」

「少佐は死にました。」

「死んだぞ。如何に、熱病にでも罹つて。」

「イヤ、撃たれて。」

「何物に。」

「マンユキヤ人に、クマクマの部下の。」

「さてこそ、大事、してマシューマン氏は。」

「スタンレー、フオールヌに赴きました。」

「何しに、何の爲に。」

「更に人夫を得んが爲に。」

「然らばワイド并にトループの州民は何處に在りや。」

「ワイド氏はパンガクに在り。」

「パンガク、パンガク、何の爲に彼處に。」

「確かに彼れはパンガクに行きました、トループ氏は數日前に國に歸りました。」

是等の問答は彼れと余が、門の側に於て瞬間に相話せし所のもの、固より是れのみにては其詳細を知るに由なし。鬼に角余等は一大事變の生れしとを推せしのみ。

る誓約を破りて殆ど一月の間は何事をも爲さざりしなり。吏員等は再三再四之に迫り、之を糾すに及んで、遂に彼れは七百圓餘の旅行を爲して人衆の囂集に従事し、十一箇月の後に至て其集り得しの人を以て之を白人に托せり。然るに數週を經て一機事こそ起れり、人夫中の頭領なるサンガは突然彼れの銃を取つて後隊の總理に對し、以て之れを銃殺するに至れり。

第二 少佐エドモンド、マクスレーフ、パークラットは湖邊にして賦意に、且勇剛なる英國の軍人なり。皆てアフガニスタン并にナイルのソーダ人間に於て殊勳を述て、且つ頗る事務に熟練の開えあり。彼れの地位と過去の經驗とは是非とも彼れが後隊の首領ならざるべからざるものあるなり。彼れは彼れの吏員等、則ちワード、トループ并にボナーの諸氏がボロホより人夫を率ゐて來る迄、ヤンマに滞在すべきとを命ぜられたるものなり。若しヤンマにして此日迄に來らざれば、彼れは靜に彼れが二百十人の人夫を以て旅行を始め、一日二回の往復を爲して荷物を運び、又之れにても進み難き場合には或る種の荷物を棄て去るの自由を有す。彼れは命の指揮書を讀んで一々了解の旨を告げ、彼れは又自らボロホの人衆を待つの外、決してヤンマに留らざるべきとを明言し、余等をして後隊を幹理するに適當の人物を得しとを喜ばしめしものなり。彼れの背輪に於て、又彼れの首領に於て、其熱心賦意、遂も疑を容るべきの所はあらざりし。

第三

マエーナス、スレゴ、マエームソン氏は英國の富豪家にして、頗る博物上の研究を好み、而して少佐と親友なるの故を以て後隊の爲に副總理に任ぜられたるものなり。彼れの活潑なると、技倆あると、并に好んで事に當るの勇氣あるとは知人等の凡て信認せしものにして、如何なるとにても少佐の爲さんと欲する所は彼れの同意を得るに難からず。且つ又彼れは皆てマエームソン并にマエーム等に旅して冒險の經驗に乏しからざるものなり。彼れは少佐が銃殺せられしより後、四週間に於て、熱病と心痛との爲に其身心を破り、遂に敢果なき最後を遂ぐるに至れり。

此他に少佐の下に屬したる三人の吏員あり、其中ワード、トローアの二氏は必要なる場合に於ては職席に列するの権利を有し、以て前途の企畫に對して思慮を加つべき等のものなり。故に又彼等は凡ての決定と作樂とに對して責任を有せざるべからず。彼等は遂に學校を出でたるの青年に異り、事物に熟し、旅行に馴れたるの人なり。ワード氏は皆てホルサオ、ムニー、マエーランド并にコンゴ一等に業を執りて機敏にして輕快なるの評あり、又トループ氏は余と共にコンゴ州の爲に働きて、勤勉、賦意の吏員なりしなり。ウキリアム、ボナー氏はズールー并にナイルの腹中に力を致し、又南亞米利加に留ると一年、照固にして視察力に富めるの人なり。

余は茲に解すべからざるの事あり。余等は互に情を分かち、互に負擔を担つて相用れしもの、共に其職

務の爲に力を致すべきことを誓ひしものなり。彼等曰く「恐るゝとなかれ、我等は將に滿腔の心と力を
を棄けて、誠意に君等の後を追ふべきなり」と。余等は彼等を信じて、確信して其手を分ちしものな
り。

余等は今エミン、パンヤの扶助よりして歸るに及んで、少佐パーラフットの報告中に左の首あるを知
れり。

第一 「風説は常に行はるれども、眞なるとは稀なり。マクンレー氏に關しては、余の考に據れば彼
れは死せざる方なり。併し余は彼れの所有品を開く、余等は彼れの物品を盡く運び去る能はざるの事
情あるを以てなり」

斯くて彼れば凡て余の衣服、地圖、海圖、并に遠征隊の爲に供へたる藥品其他の物品を棄けてパンガ
ラに送り、余は今非常に破れたる衣服を以てして之れを代ふるに物なく、止むを得ずボター氏より一
足のメボンをもらひ、又古キブランクットを以て他の一足を調製したり。

第二 「更に四人のソーダ人并に二十九のワンパーベル人、余等と共に進む能はざるものあり。

マクンレーの二箱はマクンレー氏の爲りに持ち來りたるものなるが、中一箱は余之れをコンローに送り
返へせり。彼れは又たヤヤム、サーダインヌ、セーゴ、ヒオカ等の食物許多を有す。余は之れをト

ループ氏の乗り込むべき船に托して海岸の方に送れり。合營には三十三の死に瀕したる人あり」

第三 「余はマクンレーに赴き、エミン、パンヤに會つてマクンレー氏の事に就き問ひ合すべし。且つエ
ミンの進退に就ても詰合する所あるべし。余は君等に對して道途の困難を語るを要せず、又成功は必
すべからず。併し若し彼れにして單に強弱を要するのみならしめば、余は必ず之れを供給し得べきと
を期す」

去歲八月十四日に於てワロン、トループ氏は、余がヤンヤに遣し置きたる二十九箱の彈藥の外に、
一百二十九箱のロミントン彈藥を少佐パーラフットに渡せしなり。此一百五十八箱の中には凡て八萬
個を包含せるものなるに、今年六月九日の少佐の報告に由れば、此供給は僅かに三萬五千五百八十個
と爲れり。彼等は進みしに非らず、又戦ひしに非らず唯此十一箇月尤も放蕩なる生活を爲し、尤も自
由に是等を消費せしものならざるべからず。火藥の一半と衣類の三分の二とは全く行術知れずなり。

第四 「余等の運び難き荷物は皆之れをパンガラに送るべし。是等は千八百八十八年六月八日の船に
托して足下等の許に致す見込なり。足下は此荷物とワード氏を送り返へさんが爲に求めたる二艘の小
舟に關して承諾を與へられんことを望む。余は此路に由ては歸らざるべく、又是等と彼れを要する事
なかるべし」

ワード氏は英國の委員より指揮の電報を得んが爲に海陸に向つて出發し、其後より再び歸るとを察せられたるなり余等其何の故たるを解する能はず。

第五 余等がヤンブヤを出發せし時、則ち千八百八十七年六月二十八日に於て、後隊は二百七十一人の人衆を有せしなり。

千八百八十七年十月に至り、此人衆は少佐の指揮に據て、二百四十六人を減せり。

是れより千八百八十八年四月に瀕り、後隊は尚ほ同一の命營に止るの間に、其數は非常に減じて一百三十五人と爲れり。

千八百八十八年八月十七日、余は當時後隊を率ひし所のウヰリアム、ボナー氏に就て、後隊の人員表を備めしに、彼れは左の表を興へたり――

スタンレー氏がボロボ井にヤンブヤに於て残し置きたるサンワール人の人員表――中に前隊より逃走し來りたるもの等十一人を合有す――

死亡者	七十八人
逃亡者	二十六人
ワニムソン氏に従ひ行きしもの	十人

ヤンブヤに病の爲に残せしもの	二十九人
途上病の爲に残せしもの	五人
パナルヤに於ての現員	七十五人
合 計	二百二十三人

ヤンブヤに於て残し置きたるソーダン人、ソーマリ人并にソリアン人の人員――

死亡者	二十一人
土人に殺されたるもの	一人
少佐の命に由て殺殺せしもの	一人
コンゴに由て埃及に送りしもの	三人
ヤンブヤに病の爲に残せしもの	四人
コンゴ州に托せし病人	一人
パナルヤに於ける現員	二十二一人

合計	五十三人
ザンサーバル人	二百二十三人
總計	二百七十六人

第六 漁船メタンレー號は、約の如くに千八百八十七年八月十四日にヤンマヤに到着し、同じく十七日に此地を出發してレオポルドツキールに向ひしなり。コンゴ州の吏員等は能くレオポルドツキールの意を味して其務を全ふせしものと首肯す。是に於て後隊は速に荷物を鞅して出發の途に就かざるべからず、ランクワは今に至るまで、吏員等は其難むに足らざることを知了せざるべからず。

余はボナー氏に問ふて曰く――

「君等は熱心に、目的に向つて働かんことを希望せるもの非らずや。」

「然り。」

「君等は急ぎヤンマヤを出立せんとを望み給ふべしや。」

「然り、之を望みしなり。」

「又遠く、一日も早く目的の地に向つて進まんとを欲せしむしや。」

「余は何人も斯か欲せしむべし。」

「君等にして果して此心ありたりとせば、君等は何故に、ヤンマヤよりメタンレー、フォールヌに往復を爲すの外、他に其好なる道を見出すとを爲さざりしや。」

「余は之れを知ると能はず。余は主領にあらざ、又君は君が指揮の中には余が名だに示さざりしに非らず。」

「實に然り、其は我が失策なり。併し君は假令世中に君の名を示さざりしとも、是れが爲に君の責任は忘れざりしなるべし。君は此間に終始口を閉ざせしか。」

「勿論余は時に意見を述べたり。」

「他の人々も之れを述べしか。」

「余は之れを知らず。」

余は數々ボナー氏との會話の際に於て、此事實を明にせんとを勉めしが、同氏の言ふ所は實に以上の如きに過ぎざりし。

是れより一年の後、余等ゾクトリア、ナイアンザの南部なるウサンピロに在りし時、余は或る新聞紙上に少佐パークラントが、千八百八十七年十月の奔命を載せ、中に「余等は十一月迄赦に止まらざるを得ざるの必要あり」云々の文字あるを見しが、彼等のヤンナヤに留りしは十一月十二月にして止まず、翌年六月四日迄彼處に在りしなり。彼等は始めより一も方針に従つて事を爲せしに非るに似たり。

余が彼等に與へたる指揮書中には左の規定あるを見るべし。

第十節 若しタンタナにして人を送らず、又人を送るとも定數に満たざる時は、君は君の見込を以て荷物を處分するとを得べし。

第十一節 若し君にして尙ほ進むとを得ざる時は、君は六哩宛二回の往復を爲すべし。

ウサンピロに於て、余は又ロンドンなる委員よりワード氏に答へたる左の電報を見たり――

ロンドンなるワードの手を経て少佐パークラントに送。

委員は君等が六月二十四日のスタンレーの命令に従はれんとを望む。若し君等にして尙ほ此命令に従つて進む能はざる場合には、君等は留りてスタンレーの歸着を待つべし、否らざれば更にスタンレーより指揮の來るを待つべし。

六千哩を離れたるロンドンの委員は能く指揮書の精神を了解せしにも拘はらず、ヤンナヤに於ける五人の吏員は之を誤解せるは如何。余は此事に就ては幾度か少佐に面談して自他の誤解を避けんとを勉めしも、遂に其の念を達する能はず、彼等が故なくヤンナヤに留置せしは實に意外の事なりと言ふべし。

余がバナルヤに返へりし時、ボナー氏は少佐より受けたる左の書を示せり。

ヤンナヤの令然に於て

千八百八十八年四月二十二日

ボナー君足下、余の死去若しくは留守中に於ては、君は主としてノーダン人、サンローバル人并に倉庫の中に積みたる所の諸荷物を監理すべし。サンローバル人、ノーマッ人并にノーダン人に対する命令は君に依て發布さるべく、凡ての荷物衣服等は君の處理に任すべく、而して凡ての經費は成るべく明かに之れを書留め置くべし。スタンレー氏に對する扶助、荷物并に人衆に就ての注意、アラブ人との交際等尤も君の心を用ゆべき所とす。余は今此任を擧げて君に托す、之に關して故障を爲すものあらば速に之を處分し去るべし。

足下の親愛なる

エドモンド、エム、パークラント

ワエームソン氏は如何爲せしか。彼れは才能あり、技術あり、好んで事に従ふを以て其名を知られたるものに非らずや、誠實にして而も機敏なるワード氏は如何。精確にして熱心に又能く事務に通じたるワロン、トルロフ氏は何處に在りや。何故に少佐パークラントは是等の諸氏を置いて、彼れが事あるの日にはホチー氏をしてこれに代らしめんとせしにや。

余は是等の事情に遭着して余自ら發狂せしには非るかと思へり。余が規定したる秩序は盡く打破せられ、余の見定めたる人々の地位は轉倒し、而してロンドンに於ける諸新聞の如きも多くは余の意見に反せり。凡ての記録に由て見るに、少佐は技術あるの人、ワエームソン氏は見識あるの人、世は多くは彼等を稱賛せり、然るに實際に於ては斯くの如き結果あるなり。ホチー氏の背に據るに、後隊の吏員等五人相會して會談を爲せし折、中に一人は、將來は余の指揮書を用ゐず、専ら少佐パークラントの意見に従つて運動すべき由を發言せりと云ふ。余は彼等にして余が背を用ゐざらんとせば、固より深く之を咎めざるなり、併し何故に彼等は他に適當の道を見出すを爲さざりしか。

余にして若し同日の議席に迷ふを得しとすれば、余は將に彼等に對して左の背を爲せしならん——
業を爲む心は則ち是れ善の宿る所、

進んで止まざるは名譽の聚る所以なり。

又

渡務の道は則ち是れ光榮の道なり。

茲に數百の荷物あり、併し荷物の爲に驚くとを止めよ。茲に二百の人夫ありて五百の荷物に對す、困難は困難なりと雖ども、爲し難きに非らず。是れより次の村迄は十里なり、六日にして二百の人夫は五百の荷物を能く彼處に致すを得べし。斯くて四箇月を經ば一百五十哩を進むを得、八箇月にして彼れは三百哩を進むを得。彼等は船上に於て舟行の便を得る能はざるに非らず、ウガローフの舟隊は彼等を助け得しなり、其中にはポドー機將よりの使將に遣ふて其道を案内せしむるを得しなり。在すれば食物に窮する憂なく、健康にして愉快に、尤も困難なるの業を爲し得て、尤も大なるの名譽を得るとを得しなり。事大なれば得も又多し。大丈夫煩らく危険を犯すの精神なかるべからず、殆ど人力を以て勝ち難きの恐魔を征伐し、愈よ益々其敵を磨くに非れば、以て天國に好個の地位を占め得べきに非らず。徒に前途の困難を豫想して以て手を下さざるは是れ瀕瀕の所爲のみ。其日は其日の事を爲せ、安眠は汝の心を愉快ならしむるに足るなり。

然るに是等の吏員——凡て智識あり經驗あるの人、共に相集つて僅に一の爲すべき道を講ずる能はず

りしは抑も是れ如何なるものぞや、余は千思萬考するも今に其理由を見出す能はず。
 従つて事實を得れば従つて不可思議なるものあり。思ふに彼等は共に速かにヤンヤを出發せんとを
 希圖せしには相違なかるべし。併し彼等は之を爲すの道を見出す能はざりしなり。彼等は風腹にも拘
 はらず余の生存し居ることを信じ、命に向つて扶助を與ふべきことを希圖しなから、余の衣服荷物等は盡
 く他に送り去りしなり。彼等は飽く迄もエミン、パンヤを助けんが爲に其道を辿まんことを決し居りし
 なり、にも拘はらず彼等は彼れの必要に應ずべき彈藥をば亂投し去りしなり。又彼等はヤンヤに於
 て三十三の病人あることを知りながら、凡ての酒類藥劑其他の必需品を下流に送くり返へせしなり。彼
 等は歐洲より持ち來りたる糧食は萬一の場合に供すべきものなることを知りながら、固も又彼處より
 他に送り去れり。ポター氏は凡て是等に對して彼れの權利を争はざりしなり。斯くの如き事に就て争
 を爲さざるは紳士の資格に必要なるもの、如しと雖ども、其はロンドンに於ける時の話、此亞弗利加
 に在つては少許の糧食も生命に似するものあり。彼等はザンサーバル人、ソーゲマン人等の欠圓を
 蓄ぐに、マンニエマ井にバクス。ハンゴラ等の食人種を以てせんとし、遠征の間に、遂に少佐は非
 命に斃るゝに至りしなり。此日は實に余等の爲に不吉の日なり。恰も此日に於て前隊の遺體は三百の
 失國者を擧めて道なきの所に彷徨ひ、翌年の此日に於て余は後隊唯一の生存者なるポター氏よりして

此悲惨の話を目にし、又殆ど同時に於てウェームソン氏は最後の息を終り、而して此翌日エミン、パ
 ンヤ井にウェンソン氏は是れより東方六百哩の距離イクエトリアに於て、逆徒の爲に囚虜と爲りしな
 り。

此日に際して一種の魔術は余等遠征隊の破滅を圖りしものあるが如し、何ぞ事の倒行逆施一に茲に至
 るや。

是等の不幸に加ふるに、スマンレー、フォールス井に上都コンゴに於て頻に捕虜取を爲すものあり、
 未だ曾て人跡を止めざるの森林、彼等の好材料と爲るに至れり。余が屠殺せられたりと首ふとは、尤
 も彼等の好む所の問題にして、許多の犠牲が或る探險隊に由て發見せられたる事、鎧の中に人の四肢
 を容れたる話等に附和し、書工は又之れに據て以て、英人が食人種の爲に喰はるゝの繪を書き、又同
 じく英人がアルウィエ河に游泳する間に、土人等が兩岸より弓と矢とを以て之を狙ふの狀を示し、以
 て一時の人心を買ひ、余等の知友をして一方ならざるの心配を爲さしめたり。

蓋し是等風説の據て來る所は、或は逃走者の發明に係り、或は水夫或は奴隸賣買者の虚談に由り、或
 は不注意なる宣教師の言或は暴悪の趣向を有する畫家の想像に由り、次第に其幻影を増大にして徒ら
 に人心を刺戟せんと欲するの情に出でしものなり。

ウ非ワアム、ホター氏が公然の罷逐よりして、余は左の事實を明にするを得たり。
 派船スマンレー號は千八百八十七年八月十七日の朝に於て早く、ヤンブヤより出發せり。該船の持ち
 來りたる荷物は盡く倉庫の中に積み入れ、營内には凡て二百六十六の人ありしなり。東國等は彼等に
 對して余の指揮書を讀まざりしか、將た之を讀みしも彼等は了解するに至らざりしか。余は之れを知
 らず。兎に角彼等はツアツアを待つの上策なることを考へしものなるに相違なし。
 此日に於て東國等は、ヤンブヤの對岸に於て發砲の聲あるを聞き、之れを注視せしに、白衣の人一隊
 土人等を追撃して之れを河中に追ひ落すに會す。白衣の人はツアツアの部下なるべしとの考を懐き、
 彼等は東國を擧げ、五六の人衆を率ひて之を訪問せしめ、且つ彼等と交誼ある土人を管束するなから
 んとを談判せしむるに決す。茲に於て東國は河を渡り、彼等の會營を見出し其の頭領アツダクに會し
 て種々談話の後、彼れをしてヤンブヤなる英國の總督を見舞はしむるとせり。少佐は彼れよりして、
 彼等がツアツアの部下なることを知り、且つ是れよりスマンレー、フォールス迄は、僅かに陸路六日程
 なることを聞きければ、茲に人を派して人火の事に就き、彼れに談判せしむるとに決せり。
 八月二十九日に至り、ワード氏は、ツアツアよりの返事を以て歸り、十日を期して、彼れは相違なく、
 人火を送るべきとを約せる旨を告げたり。六月には九日を期し、八月には十日を期して人火を派し

るとを賭す、果して能く此約に依頼するを得べきか。

數日にしてマニームン氏は、スタンレー、フォールスよりツアツアの功なるサリム、レン、マハメ
 ャドと許多のマンユエマ人を携へて歸る。此隊は則ち遠からずツアツアが自ら率ひ來る人火に對し
 て前部を構成すべきものなりと云ふ。
 斯くて後隊はツアツアの來着を待つの間、於て、彼れの領土なるルマミに於て紛擾起り、彼れは人火
 を集むるの暇を得る能はざりし。ヤンブヤに於ては之を知らずして徒に日々彼れの來着を待てり。
 待てども、待てども來らざるを以て、十月一日に至り、少佐は自らスマンレー、フォールスに赴きて
 之を處理せんと欲し、サリムとトルーフ氏を作ふて彼處に向ひしに、途上ツアツアが自ら、前隊より
 逃亡者六人を率ひて來るに會す。彼等は相談の上共にスマンレー、フォールスに向へり。
 一箇月許を経て少佐はヤンブヤに歸り、ツアツアはスマンレー、フォールス地方に於て六百の人火を
 見出すと能はず、止むを得ず、其れより三百五十哩を距てたるカンマニに向つて出發せしとを告げた
 り。此旅行往復七百哩少くとも四十二日を費さざるを得ず。
 此間少佐の部下二十人許は死去せり。
 少佐は彼れの留守中に、マンユエマの頭領マヤトなるもの威嚇を感ふし、土人を追却して兵營と交

易の道を絶ち、時には自ら仲買人と爲りてサンサーバル人等を苦しめたる事あるを聞きければ、彼れは大に其不法を怒り、ワード氏を派してスタンレー、フオールムに迄第三回の旅行を爲し、以てマヤヤトを呼び返へさしめたり。

千八百八十八年の船に於て、サリム、ビン、エハンツドは再度ヤンマヤに到着し、直に土人に對して凌辱手段を取り、祭内の人衆をして飢饉に迫らしめたり。彼れは又命等がヤンマヤの繼に對して、投石の距離に當り、堅固なる一盤岩を起して以て命等に對し爲す所あらんとするが如きの感情を興へたり。

サリムに向つて一千磅を興へ、マンユエマの人衆を率ひて前隊の跡を辿ましめんとせしも早速に湖は干、少佐とマエーモン氏とは二月半に於て、第四回の旅行をスタンレー、フオールムに爲せり。サリムも彼等に伴ひ行き、途上二百五十のマンユエマ人に遭せしが、其人夫たるべき膏血を所持せざりしの故を以て、サリムは彼等をして象牙の匯集に向はしめたり。

三月に至り、サリムは又ヤンマヤに來り、人火等は遠からずして來るべきも、道はスタンレー氏の跡に従はずしてウウ、を経てウンコロに出づべしと言へり。

三月廿五日に、少佐はヤンマヤに歸り、此間マエーモンは速にクアタテをして人火を築めしめんと

欲し、自ら河に山てカヌマコに向へり。

三月の終に至り、少佐はサリム、ビン、エハンツドと相好からず、彼れは自らスタンレー、フオールムに第五回の旅行を爲して、サリムの呼び戻しを請求せり。

四月の半ばに至りて少佐は合營に歸り、サリムは退却を命ぜらる。然るに彼れはスタンレー、フオールムに歸らずして、ヤンマヤの下部なる一大村落に掠奪を試み、數日を経て又ヤンマヤに來り、彼れは前隊がアルウイ河より下り來るとの風説を聞きしとを報せり。

千八百八十八年五月九日、少佐は第六回の旅行をスタンレー、フオールムに試み、同じく二十二日に至てマエーモン氏と共に一大人衆を率ひて歸る。是れより三日を経て、クアタテも來り、又汽船スタンレー號は遠征隊に宛てたる書翰を以て到着せり。

クアタテの計に、六十磅の重量ある荷物は重くして彼れの人衆に堪え得ずとの事故、史員等は個々之れを解ひて四十磅、三十磅或は二十磅のものを造る。是れ容易の業に非らず、併し彼等は之を爲せり。ボナー氏の言に據れば、史員は前拂として、四十七箱の絨物、彈藥の巨額、其他六百弗程の價值ある物品を、マンユエマ隊の頭領なるマイエ、スマイに渡せりと首ふ。次で歐洲より持ち來りたる糧食等はトルーパー氏と共に同一の海船を以て下流の方に送り返へすに預りしなり。

遂に千八百八十八年六月十一日に至り、二十九の病弱なるマンワーバル人並に四人のソーダン人を省きて、パークラット。ワエーモン並にボターの三氏は、凡て九百のマンワーバル人、ソーダン人、ソーマリ人、マンユエマ入——婦人兒童等と共に、スタンレーとエミン、パシヤとを扶助せんとの意氣を以てマンアヤを出發するの運びに形れり。

少佐並に彼れの吏員等が、六回スタンレー、フォールズに往復せる哩數は千二百哩の多きに達す。此中少佐のみにて八百哩を旅行し、ワエーモン氏の如きは自ら千二百哩を旅行せるなり。若し此千二百哩にしてマンアヤよりアルベルト湖に向はしめしものなりとせば、假令一日數回の往復を爲せしとするも、彼等は已にパンガの池に達せしなるべし。斯くせば其進行は遅くとも日に十目的の方に近寄るとを得て其心を慰め、又種々豐饒なる村落に入つて十分の糧食を見出し共に休養を爲すを得しならん。

彼等は新來のマンユエマ人に向て頗る手厚き報酬を與へしも舊來の誠實なる人衆に對して相みんと爲さざりし。余の出立の際に、二百七十一人を以て數へたる人衆は今僅かに百三十二人と爲り、其バナルヤに逃せる時に及んでや、更に減じて百零一人と爲れり。過半の人衆は飢餓の爲め、尖嶺の爲め、病氣の爲めに去りしなり。

彼等がマンアヤを出發してより十三日を過ぎて、少佐はスタンレー、フォールズに向つて第七回の旅行を爲し、人衆をして他の吏員の下にバナルヤに向はしむ。斯くて九十哩の距離を旅行するに四十三日を以てし、漸くにして後隊はバナルヤの隙間ある村落中に入るとを得たり。聽く所に據れば此地は先頃ツアツアの手の中に入り、彼れの部下アマダフ、コロニなるもの之れを主宰するものなりと言へり。同日に於て少佐は急ぎスタンレー、フォールズより歸り來りしが、翌日遽かに彼れとアマダフ、コロニとの間に何かの誤解を生じ、彼れは激しく頭領を責め、又自ら第八回の旅行をスタンレー、フォールズに試み、事をツアツアに告げて相當の處分を爲さしめんとを決せり。然るに其翌朝則ち七月の十九日に於て不幸なる總領は、唐徒サンガなるもの爲に心臓を撃ち貫かれて死せり。

余は此事實をして一層明瞭ならしめんが爲に、ウカリアム、ボヤー氏の公然の報告を茲に掲げ、以て贈者の參考に供すべし。

千八百八十八年七月十九日 此朝早くマンユエマの婦人は大鼓を打ち、唱歌を始めたなり。固は則ち彼等が日々の習慣なり。少佐は十三歳許なる彼れの使童ソーンを遣はして之を止めしめんとせしむ。忽ちにして怒號の聲聽え、二發の發砲を爲すものあり。茲に於て少佐はソーダン人をして行いて發砲者を探さしめ、又自ら床より起き上りて、短銃を取りて飛び出で「余は發砲せしものを見附次第

に喉を殺すべし」と言へり。此時余は彼れに對して、固は彼等が日々の習慣なれば、之れに干渉するとは得策に非らずと仰げしも、彼れは聴かず。短銃を手にしてソーゲン人等の居る所に進めり。彼等は彼れに發砲者を見出す能はざることを告げしに、彼れは突然マンニエマ人等を突き除けて、大鼓を打ち、歌を歌ひ居る婦人の方に進り、之れを止むべきことを命ぜり。此時恰も一發の銃丸、正面なる小屋の中より飛び來り、少佐の心臓を貫きて其場に彼れを跪せり。屠殺者は該婦人の火なるサソガと呼ぶものなり。

ソーゲン人等は驚散して余に従つて少佐の屍體を運ぶことを爲さず。依て余は一人のソーマリ人并に一人のソーゲン人と共に、取り敢へず彼の屍體を擁して余の家を持ち來れり。此際叫喚の聲四方に起りければ余は一般の屠殺を生ぜしならんと思へり、サンマール人等は一人も見えざりし。彼等は小屋の中に隠れ居るに非れば、他の人衆と共に紛擾の中に飛び入りしならん。余は今一人のマンニエマの頭領、手に旋銃と短銃とを取り、六十の人衆を率ゐて余の方に進み來るを見る。余は武器を有せず、心を定めて直に彼れの前に進み行き、彼れの意を質問せしに、彼れは答へて、敢て反逆を計るものに非らずと言へり。依て余は彼れに對し、彼れの人衆をして靜に家に就かしめ、而して諸頭領を集めて余の前に連れ來るべきことを命ぜり。彼れは之れを諾し、須臾にして頭領等は共に

余の前に來りければ、余は彼等に向ひ、「此責任は余の上に関するに非らず、併し君等の酋長ツアアの上で落つるものなり。余は今君等が君等の部下に命じて盡くの荷物を集め來らんと欲す。ツアアは各君等に托せし所あるべし、君等は之れに對して責任を白はざるべからず。固は全くツアアの關する所、若し荷物にして紛失せば、ツアアは之れを償却せざるべからず、而して君等にして君等の負擔する所を失はば、君等は又ツアアに對して之れを償却せざるを得ざるべし。余は彼れに許を送るべし、彼れは速に來るべし、其際に於て君等は過失の責を負ふべからんとを望む。

斯くて余は漸く百五十個の荷物を倉庫に持ち來すを得、同時に余は余の部下を送りて之れを匯集せしかば、久しからずして二百九十九個の荷物を回復するとを得たり。部下の言に據るに、是等の荷物は或は森林の中、或は米田の中、或は村落なる小屋の内外に隠くしありしものなりとぞ。備五并に彈藥の箱等は已に其蓋を破りて奪ひ去られたるもあり、種々手を盡せしの後、余は總數の中四十八個の荷物何れへか消へ失せしとを發見せり。村内の住民は二百乃至三百人なり。余の率ゐたる人衆は凡そ一百人、マンニエマの總頭領なるマイ、スマイの率ゐたるもの六百三十人、凡て一千許の人數なるが此中九百人は食人種にして、共に二十五ヤードの幅に、百六十ヤードの長さある場所

に驚愕し置くなり。斯くの如き有様なるを以て、彼等が紛擾を醸せし際に於ては、其叫喚怒罵の聲は實に非常なるものありしなり。ソーガン人、ザンワーバル人の如きも、斯かる場合に構計を運らすに於て彼れを取らず、種々の飾玉、織物等を隠し去りしが、余之を察知して彼等の家を捜索し、過半は之を奪ひ返へせり。余は強く彼等の首魁者を縛せり。

マエームソン氏は此時恰も四日程を離れて、獲りの荷物を運び來るとに盡力し居りしかば、余は直に彼れに背を送つて此趣を告げ、又ロンゴ州の東國にしてチアチアの書記官なるマニス、ペアーに背を送り、此事を明にし、余の地位を示し、チアチアをして速に來りて後事を處理し、且つ紛擾の際に、最初に逃亡したる頭領マイコ、スマイに代ふるに適當の人を以てすべきことを求めり。余は又ロンス、ペアーに語るに、若しチアチアにして此際余等を助くるとを爲さざれば、全歐羅巴は彼れを討伐すべき事を以てしたり。然る後余は少佐の屍骸をブランケットに包み、藁を林間に穿つて、木葉を以て掩とし、以て之れを埋葬す。余は斯様の背を續ひて形の如くに備式を替み、漸くにして此恐ろしき日を終へたり。

少佐はチアチアに於て、人衆等が危険の状況を呈せし時、余に向つて彼れが事あるの日は、彼に代りてザンワーバル人、ソーガン人并に諸荷物等を處理すべき旨を傳へられたり。此故に余は自ら

スタンレー氏に會する途、エモン、パレヤ遠征隊、後部の總督を爲すこと爲りぬ。

足下の誠實なる使僕

ウヰリアム、ボゲー

遠征隊總督

ヘンリー、エム、スタンレー足下

少佐の變死の後三日を経て、マエームソン氏は後隊の後部を率めてパナルヤに入り來りしが、七月二十五日に於て彼れは又後事をボゲー氏に托し、スタンレー、フォールズに第八回の旅行を爲し、此度は全力を以てチアチア或ひは彼れの殘虐なる甥サリム、ビン、モハメッド或ひは彼のスタンレー、フォールズをキャプテイン、ブリンより奪ひ取りし所のクレッドを脱き勤め、自ら實を負ふて後隊を引寄せしめんとを求めり。

八月十二日に於て、彼れは彼れが最後の書翰をボゲー氏に與へて曰く「遠征隊は實に憐むべき境遇に立てり、君も亦此事を知了せるなるべし」と。斯くの如きは同人に對しても悲しむべきの事なり。彼れはチアチアの許に於て、親しく虐賊サンガを銃殺し、其屍をコンゴ河中に投ずるを見て、スタンレー、フォールズを出發し、マンガラ地方に向へり。先きに少佐パークランドはブード氏に托して、

電報を以て英國委員の許に問合を爲す所ありしも、ワード氏は再び返るとを禁せられしかば、彼れは空しく其歩を止めてパンガラに在り、従つて其返辭も少佐等の許に達せざりし。ウェー・ムン氏は今之れを知らんと欲し、十人のザンパー・バル人を卒めて一艘の舟に乗り、以て河を下れり。然るに舟ルマの對岸に來りし時、彼れは不幸にも激烈なる熱病の襲ふ所と爲れり。無理もなき事、彼れは殆ど彼れの余力を擧げて東奔西走し、失敗に失敗、船に船を重ねし後、遂に延征隊の有様は、彼れの書に言ふが如く實に憐むべき境遇に迫りしなり。熱病は次第に彼れの腦を犯せり。水火は日夜急行を爲してパンガラの屯營に達し、漸くワード氏と相見るに及んで彼れは最後の息を與へり。時は恰も余等前隊がアルベルト、ナイアンザより千哩の困難を排してパナルヤに入り、「ウェー・ムン氏は何處に」と尋ねんと欲せしの時なりしなり。

悲惨の出來事は悲惨の出來事の上に加へられたり。ムン之れを記する能はず、口之れを述ぶる能はず、遠征隊は果して是れ如何なる運命の下に擄成せられしものぞや。パナルヤの合營内には見るも恐ろしき人物少なからず、飢餓の爲に、落膽の爲に、彼等の容貌は全く魔化せしものゝ如し。彼等は尙ほ心を世上の事物に止むるの餘地あるにや、慄へながら、よろめきながらに來りて余等の周圍に集れり。尙らに六人の死者あれども未だ之れを葬るに及はず、其儘かに生存するものも滿身幾多の腫物を生じ

て恰も癩病者の病院に入りしが如く、余等をして一見尙ほ感傷を覺えしめたり。ヤンヅヤに於て死せるもの已に一百餘人、彼處に残りて將に死せんとするもの三十三人、道にして死せるもの十人、此地に在つて今將た生死の境に彷徨するもの四十人、遠征隊は日に一破滅を告げんとす。剛勇なる英人の一隊は如何せしか。パー・ラントの輩は僅か數ヤードの所に在り、トループは憔悴と爲りて家に歸り、ワードは何處にさまよひにや、ウェー・ムンはフォールズに赴きたりと聽きしが、余等其何の故たるを知る能はず。而して茲に残るものは僅一人、他に何人も居らざるや。」

「見る通り、余一人のみ」とワード氏は言へり。

余等はパー・ラント氏の技倆を信じ、ウェー・ムン氏の誠實を知り、ワード氏の氣力に富み、トループの信用に厚く、併せてポターの剛毅にして而も忠實に富むを考へ、彼等が全力を擧げて以て其目的に達せんとを勉めしにも拘はらず、風潮は常に彼等の機會に反して不幸なる此結果を見るに迫りしとを嘆ぜずんば非らず。

少佐パー・ラント——彼れは進んで未だ付て疲るゝとを知らず、愉快なる一勇士、其が潔白高尚の心を以て常に名譽の爲に之れを碎くことを辭せざりしもの、彼れの性質を以てして、彼れの技倆を以てして、曠を加してマクンレー、フォールの一老婦奴に依頼せざるを得ざるに至りしとは何事ぞや。是れ

少しく余の了解する能はざる所、今にして思へば、余は彼れをして幾度かツアツアと結果なきの交渉を爲さしめんよりは寧ろ、直に斷乎たる處置に出で、速に彼れが違約の罪を併して、自己の人火を以て遠征の途に上られんとを望むものなり。余は彼れが斯く爲すならんとを信ぜり、彼れの決心と勇氣とを以て、ツアツアの爲に遠征一歳に渡りしとは、假令其事情は如何なりとも、容易に信じて得べきとに非らず。

ウエームソン——假令は深き水の静に流るゝが如し。彼れは居常靜態にして事物に思堪に、又危難に際して之を處するの道に熟し、人皆彼れに他人の性質あるとを認めしなり。彼れは遠征隊に加つて非常なる困難を共にせんが爲に、自ら一千磅を譲出し、以て將來に向つて名譽の一筆を留めんと希圖せしものなり。彼れは又博物學上の知識に於て乏しからず、バーナツットは深く彼れを信ぜり。彼れは百難雜集の時に於いて愈々益す其心を奮勵し、自財を擲つと一萬磅の多きに及んで遂にバーガタに其不遇の身を終ふるに及りしなり。

ツアツアは是等の諸氏に對して力を致せしには相違なし。彼等のメクンレー、フォールスを見舞ふ毎には彼れは鄭重なる待遇を以て彼等に接し、亦時にヤンツヤに向つて許きの山羊、米等を送り。彼等は嘗に之に對して報酬を爲せしのみならず、又十分の金銀物品を與へて以て其希冀する人火を得ん

とを欲せしが、ツアツアは元と是れ一個の野蠻人のみ、容易に約束を爲して之を果たす所以を知らず、九日を約して數月に涉り、十日を約して又數月に渡り、數々請貸せらるゝに及んで、遂に責任なき食人種等を獵り集めて之れに應ずるに至りしなり。

併し是等の事實を調べ來つて全体より之を観察する時は後隊も又多少の過失なきに非るべし。彼等が五人の有爲なる壯夫を以てして何故に、速に蠻人等の深く頼むに足らざるとを知り、以てエミー、パシヤ扶助の急務に向つて馳せざりしか。彼等はヤンツヤに在るの久しき土地の狀況をも知り得しならん、又ツアツアの交際に出で彼れの人と爲りをも知るを得しならん。何か故に彼等は最後に至る迄彼れの力を頼んで、已に遠征隊を出發せしめしの後、尙ほメクンレー、フォールスに歸るが如きの事を爲せしにや。思ふに彼等の中にも余と同意見を持せしもの之れなかりしには非らざるべし、時々會議の席に於て一時の氣煩を吐き、正當の道を指示せしものもありしならんが、首途に他の爲に阻せられて共に與に五里霧中に彷徨するに至りしものなるべし。斯くて彼等はする事爲す事、自ら禍を招く手段を取つて、無益の奔走勞苦の中に事を終るに至りしなり。

左の書はハルバルド、ワード氏の報告に係る、余は之れを發表するの義務あるを信じて、之れを茲に掲載すると爲しぬ。

ニユーヨークなるウッパザー、カクルに於て、

千八百九十年二月十三日

千八百八十七年八月十四日に於て、余はトループ。ボナー兩氏と共に人衆と荷物とを以てボロボロリヤンブヤに到着せり。君が六月二十八日に此地を出發せし以來、今日に至る迄、彼の九日間を約したるアブアアは何等の通知をも爲さず、少佐とロニームン氏とは海船に向つて薪を供ふるとに急がしかりし。翌日の午後に至り、マンニューエマ人の一隊は恰も瀧の下に當れる、對岸の村落を襲ひ、以て頗る狼藉を逞ふると知りければ、余はボナー氏と共に河を渡つて之れを問はんと思せしに、彼等は水上に涼船の横はるを見て、遽に其隊を引き上げ、森林中なる合營に歸り去れり。土人に就て彼等所在の距離を問ひしに、河に沿ひ數時間の旅行を以て達し得べしと言へり。翌日マンニューエマの頭領アブダなるもの數人の從者を率ゐて余等の營中に来り、アブアアは約束に従つて五百の人衆を、サラム、ビン、モハメットの下に、舟にて送りしが、途上彼等は土人の襲撃を蒙ると多く、斯くの如きもの數日に涉つて遂に英人の所在を知る能はず。依てサラムは隊を解きて幾多の小隊と爲し、各地方に英人の搜索を爲さしむるとに決し、而してアブダは此一小队の隊長として派遣せられたるものなるを告げたり。又他の説に依れば、此五百の人衆はアルウィー河を上り來りしも、

途上激しく敵の襲撃を受け、彈藥に乏しきを以て之を防ぐ能はず、遂に四方に散亂するに至りしものなりとも言へり。アブダは又余等に對し、アブアアは、唯其道だに開くを得ば、再び喜んで人衆を供給すべく、又スタンレー、フォールスへは數日の旅行を以て遠すべく、更圓にして彼處に赴かんと欲せば、彼れは直に之れが標幟を爲すべき山を告げたり。

少佐はロニームン氏と余とに向つてスタンレー、フォールスに向ふべきことを命ぜらる。余等彼處に赴きてアブアアに會せしに、彼れはアブダの言と同一の次第を述べ、且つ再び之れを圖集すべきことを諾せしが、之れが爲には尙ほ多少の時日を費すべき由を告げたり。

ヤンブヤの倉庫に於て、六百個以上の貴重なる荷物あり、而して今之を運ぶに堪へ得べき人夫は一百七十五人に過ぎず。余等は何れも皆、之を以て一日三回の旅行をなさんよりは、率ゐアブアアの供給を待つて一齊に出立するに如かずとの考を有せり。蓋し余等は此一百七十五の人衆の頼むに足らざるとを知らばなり。彼等は機會ある毎に逃走せんとを好む、數日旅行を爲せし後に於て、彼等は三々五々遠征隊を脱し、ソスタヒリ、若しくはマンニューエマの掠奪隊に加はるに至るべきことを豫想せり。是等の徒は四方に去來して放情無賴の生活を營むもの、是れ恰もザンワール人、ソーダン人等の希望する所なり。殊に余等の主領なる少佐は始めよりザンワール人を謀外するの風あり

りしを以て、彼等は彼れに心服し居らざりしなり。
 アンプアの方は例の通り退引し、此間多くのサンダーバル人は死去せり。勿論彼等は久しき以前より病に罹り居りしものにて、常には適宜の作業を爲さしめしものなるを以て、其死は決して他の害を蒙りしに非らず。或るものは自ら到底回復の見込なきを知つて森林の間に身を隠し、以て永遠に眠に就くに形れり。蓋し是等の中には失竊の爲に竊に預りしもの甚だ少なからざるべし。
 余等は君が十一月の末に於てアンプアに歸り来るべきことを豫期せり。併し時日は疾くに経過し去りたれども、君よりの書翰だに接せず。余等の部下は次第に衰弱を告げたり、今は荷物を負ふて日々三回の旅行を爲し得べきに非らず、依てアンプアに向て人火を供給せしめんが爲め、種々に力を用ゐたれども功を奏せず。
 千八百八十八年二月に於て、少佐并にウェーモソンは再びアールスに赴き、三月廿四日に至て少佐はアンプアに歸れり。彼れはアンプアに更に巨額の金を支拂ふべきことを約し、而してウェーモソンはアンプアをして人火の調集を急がしめんが爲めに、カンゴに赴きしとを告げたり。已にして少佐は又余に對し、彼れはロンドンなる委員に向つて、第一に、ウェーモソン氏の出發後九箇月を経しも未だ何等の報章に接せざる事、第二に、アンプアの扶助隊未だ來らず、一回アンプアに在つて

進む能はざる事、第三に、漁船は其後一回も此地に到着せざる事等を報告すべき由を請れり。
 余等は此時に至て君よりの書翰に接せざりしを以て、多分途上異常の事ありて通信する能はざるものならんと推し、君が運動の結果は却て東海岸の方に於て知るとを得べきかと思へり。
 ローマンダに遣せばロンドンに向つて電報を發するの便あり、而してウェーモソンがカンゴより歸る頃には此返辭を以てアンプアに歸るを得べしと信ぜしを以て、少佐は余に向つて、彼れが自ら認めたる書を渡し、之を電報に附せんとを求められたり。余は恰も三十日にして此旅行を果たし、委員より「余等は君等がウェーモソン氏の指揮書に従はれんとを望む」云々の返辭を得、急ぎに急ぎてアンプアを歸り來りしに、突然此地に留るべきの命に接し、又遠征隊に於ては余を要せざることを告げられたり。
 余がアンプアに到着してより五週間を経て、漁船エン、イベント號は少佐が虐殺に遭ひしの報知を持ち來せり。アールスに在りし所のウェーモソンは自ら虐殺者の處刑に處せらるゝを口聲し、同時に余に書を送つて、アンプアに留るべきことを求められたり。已にして彼れは舟に由てアールスより下り來りしが、激烈なる熱病は已に彼れの身心を破却せり、余は彼れを見て直に種々の介抱を加へしも其功なく、翌日に至つて死せり。彼れは少佐に對するロンドンの返辭を見んとを欲してバ

ンガラに來り、再び余と共に荷物を携へて、海船に乗り込み、以てスタンレー、フォールズに向ふの心算なりしなり。

併し海船は此時に於て來らざりし。余は數月の後に非ざれば海船に由てホサー等の許に達する能はざるとを知り、直に又海岸に赴きて、マエー・ムン氏の死に就き、并に彼れが死に先づて余に預りたる事に就き、リンソンなる委員の許に電報を發せり。彼等は之に對して返辭を送り、余は、余がスタンレー、フォールズに歸るべきと、残りたる荷物は此地州屬の電報に托すべきと、船を送つてホサー并に人衆を迎ふべきと等を命ぜられたり。斯くて余がスタンレー、プールに着せし時に於て、余は始めて君がバナルヤに來り、而して再びエミン、パンヤの方に向ふべきものなる由を聞知せり。併し余は余の旅行を續けてフォールズに達し、少佐がパンガラに送りたる荷物を處理し、此處に留ると一箇月、更に君よりの報知に向つて待てり。

余は少佐が付てランツに托せし所の病人を受取り、再び舟に乗りてコンゴ河を下り、以て歐洲に歸れり、是れ余の委員より命ぜられたるものなるを以てなり。

以上は唯後隊の失敗に關する單純なる事實を擧げしのみ。

余は實に此失敗に就て失望せり。余は深く余の努力の此遠征に關して効果なかりしとを悔ゆ。

常に足下の誠實なる

ハルバルト、ワード

エーナ、エム、スタンレー君足下

第廿一章 ナイアンザに對する第三回の旅行。

ボナー氏非にザンローマル人○ザンローマル人の懇談○マニョウタの港○フエラ非にサリムとの會談○余等陸隊に向つて
 ナイアンザの宮殿を語る○余等サツツアをバンガレンの島に待つ○人員の點檢○八月十二日附ス・メン、フオーセルム
 リのウエー・ムソンの書翰○獨木舟隊の出發○マニョウタの港○ウケロ非にサリム、ゼレ、ウハメンドの遊助○サツツアの
 パーラツト少佐非に其人尖○サリム、ゼレ、ウハメンド○サツツアに對する余の答○サリム非にマンルム人○パドンド
 の部族○マンルム人尖非にマンルム人間の天體○二人の狂女○更に二人のザンローマル人狂者○マンルムに於ける
 約束の破却○アマアリの捕虜ビソソンの証○一行中の十人土人の爲に成はる○マンルムに於ける舟の遊事○マンルムに於
 けるマキの陸軍隊○フエラ非に應○余等の料理人ウヤツア船矢の爲に死す○バンガの証○チロヤンビの証○陸上の出度○一
 行中の病人○土人の愛情○ボナー氏メビカイの村を發見す○モニ、マンヤ非に致致○パビカイ土人との出會○ロガ、ソロ
 ードに於ける遊軍○使領ソードの死○アマヤツに於ける出来事○ザンローマル人捕虜の結果○アミの証に於ける不慮
 ○マニョウタに迫むに先づて食物の調製を爲す。

前章に記述したる余等が悲愴の感想は容易に斯の心を脱却すると能はず、翌日一同ハイビヤに達するに及んで余は再び此事を思ひ起し、深く彼等の不幸を悲めり。

ボナー氏が日記の始にも記せる如く、ソイグー人、ザンローマル人等は此日余に向つて懇辭を爲し、其不平の數々を陳べ立てたり。ボナー氏は彼れの報告中に附記して「將來は願くは天の助に由て、遠

征隊をして一層其果を得せしめんとを望む」と言へり。彼れの報告并に陳述に由て考ふるに、彼の七月十九日、少佐兎變の際に於ける彼れの處理は、尤も其當を得たるものにして膽力に富み、思慮に富み、且つ技術あるものに非ざれば能くすると能はず。其處置や實に稱賛するの價値あるなり。思ふに少佐が彼れを拯擧して後事を依託するに至りし所以のものは、彼れの眼中深くボナー氏に於て見る所ありしに由るなるべし。然るに不思議にも今人衆をして自由に其思ふ所を言はしむるに當てや、彼れに對して不平を懐くもの多く、其初日の旅行に於て彼れの下に屬したるザンローマル人は遂も彼れの命令を用ゐざるに泄れり。

余は彼等をして自由に其意思を吐露せしめんものと思へり。尤も一百二人の中此席に列るを得し者は僅かに六十人にして、他は已に其思ふ所を言ふ能はざるの弊に近りしなり。生存するもの必ずしも死者より好からず、何れも失望落膽の中に、又多少怨恨復讐の情を含むもの之れありし。

余先づ彼等の心を慰めて曰く――

「座せよ兒童よ、余は汝等と共に徐ろに此事を語すべし」。彼等は忽ちに余の前に半圓形に於て座せり、其後部にはナイアンザより余に伴ひ來りたる幾多肥大の壯士を列す。

「兒童よ、今は嘆く事を止めよ、悲しむ事を止めよ、是等不言の日は已に逝れり。汝等の涙を拭ふて汝

等の心を暗ふべし。汝等の後に列する所の肥大なる同胞を見よ、彼等はホワイト、パンヤに而して、親しく彼れの肉と乳と穀物とを殖ち、彼れよりして感嘆賞揚の辭を博せしものなり。彼等は泣けり——喜悅の爲に泣けり。彼等は泣からずして錦を着て故郷に歸るを得るとを知ればなり。余等は久しく余等と相違ひし所の汝等を甯めんか爲に、ナイアンヤより歸り來りしなり。余等は幸に今汝等に遭ふを得たり、自他の幸快是れより大なるはなく、正に是れ天の賜ふ所なり。過去の事は過去の事たらしめよ、余は死者を蘇生せしむる能はず、併し生存者の心を喜ばしむるを得。最早や汝等の痛楚に就て考を運らす勿れ、宜しく光榮ある將來の希望の中に構むべし。余等が先きに汝等に分れしは、汝等の爲に道を開き、又パンヤを、其亡びざるの前に救ふ爲に必要なりしなり。余等は山立の前に於て已に此事を汝等に告げたり、汝等は余の約束を肥肥し爲さざりしか。余等はパンヤを見出しや否や、歸り來りて汝等を求むべきとを約し、而して今之れを爲せるに非らずや。余等は余等の職務を盡せり、汝等は如何。

否、汝等は余の詔を信用せざりしなり。余等の隊より逃じしたるもの、汝等の所に歸り、大衆にもし虚説を播造して已れ等の罪を蔽はんごせしに、汝等ばもろくもこれを信用せり。彼等は余若しくは更目よりの書翰を持ち來りしか。吾等等は銀時計并に其他の物品を所有し居れりと首ふに非らずや。通

常の火が此林間に於て是等の物品を見出し得べきや。汝等は何故に彼等に向つて、何れの處に於て、取争起り、幾多の人、殺傷せられしやと、實地に探検すべきとを求め爲さざりしか。汝等は又何故に彼等に對して、何れの處に於て斯かる銀時計、其他の物品を見出し得べきかを問問せざりしか。彼等は則ち是等の物品を竊んで以て余等の隊を逃れしものなり。汝等は現在是等の事實に對しながら、余が十七箇所の矢傷を受け、一人の白人ウツマの方に逃れしもの、外は、盡く皆殺されたりとの虚説を信せしは、抑も是れ不従の至りならずや。

四百のザンワーバル人并に六人の白人が、少許を除くの外は總て殺傷せられ、而して其少許の人々は、汝等の許に歸らずしてウツマの方に赴きしとは是れ何事ぞや。斯くの如きの事、果して之を信するの價値ありや。ザンワーバル人はもう少し賢きものならんと思へり。

又余にして死せざる以上は、如何にして余は汝等并に汝等と共に殘し置きたる白人等を忘れ去るを得べき。何處に行くとも余は亞弗利加山中に在て汝等と共にするより外なきなり。余等が久しきに涉つて歸らざりしは余等が尚ほ働きを續け居るの證據なるに非らずや。若し途上事ありて目的を達せざるに於ては必ず疾に汝等の許に歸らざるべからず、且よ病癒を爲し、逃走を爲せしもの尙ほ汝等の所に歸り來りしに非らずや。

嗚呼、余は如何にして、汝等が謝かるとを妄言するに至りしやを知れり。汝等は殆ど汝等の背中の腐る途合然に安臥し、何事も為さず、何物も見ず、唯怠惰の間に想像の夢を結び居りしを以てなり。汝等の心と身軀とは運鈍のものと爲れり。主公等を促して以て旅行を爲すべき筈なるに、左はなくて却て之を幸として一日の安を貪りしに由るなり。

皆てフェウツ、汝は頭領なり、何物が汝等の心に不平を生せしめしか。白人等は汝等を虐待せしか。如何に」。

「吾彼等は我を厚遇せり、併し人衆の成るものは誦實を讀れり」。

「如何なる誦實を、如何なるものに」。

「ザンワーバル人に、彼等がチャバ、チャブ(怠惰)なる時に」。

「何故に彼等はチャバ、チャブなりしか。彼等は日々爲すべき要用の仕事を有せしか」。

「蒸汽船の來りし時の外は、別に仕事と言ふべき程のものなし。日々唯室内を掃き、薪木を切り、夜泊を爲すの務あるのみ。併し怠惰者は主公の爲に呼ばれたる時に來らざるとあり、主公等は怒つて再三之を呼び、其聲次第に高きに及んで彼等は漸く、靜に由で來り、或は腹痛、或は頭痛其他種々の病氣を申立て、此馬を逃れんとす。是に於て主公等は之を以て虚言と爲し、大に怒り給ふなり。斯く

の如きものはれ毎日の出來事なり」。

「併し二百五十の人衆を以てして室内を掃き、薪木を削へ、舟術を爲すのみにて、何故に彼等は曾難を感ずるにや」。

「固より曾難を覺えず」。

「此怠惰者の外に、何人か罰を受けたるものありしや」。

「盜賊を爲すものあり」。

「幾許の盜賊ありしや」。

「余は思ふに凡てザンワーバルの盜賊は此隊に紹介せしものならん」。

「其れは虚言ならん、フェウツ、余等の隊に盜賊ありとて少しはまだザンワーバルの方に残り居るものもあらん」。

「同は笑へり、フェウツは其言を續けて曰く――」

「其れは申すまでの事もなし、併し我等の間に許さの盜賊ありとは眞なり。日々には眞鍮器、飾玉、衣服等の紛失するを見る。斯くてザンワーバル人はソーダン人を賣め、ソーダン人はソーマリ人を賣め、ソーマリ人は又ザンワーバル人を賣めて、紛擾常に絶ゆる時なし。兎に角物品の紛失するは妙なり、

枕の下に置きしもの、床の下に置きしもの、或は之を首の周りに縛し置くとも或は之を身軀の中に藏し置くとも、初に至れば其形を見出すと能はず。餘りの不思議に余は時として余の首を奪ひ去られはせやと氣遣ひしとあり』

「併し汝の首は之を賣買するを得ざるべし』

「幸に爾は余と共に生れたるもの、併し盜賊の技術は恐れざるを得ず』

「其れは其れにて好し、併し何故に彼等は拒みず、盜賊を爲せるにや』

「飢餓なり、飢餓は彼等をして盜賊を爲さしむ。飢餓は無賴を殺し、又能く最良の人を殺すに足る』

「飢餓、飢餓とは。是等の田野は一面に皆マニオックを以て蔽ふに非らずや』

「主公よ、マニオックも暫時の間は結集なれど、何か他に附合なくては久しきに堪へず』

「附合とは、フニツタ』

「乾燥せるマニオックのみにて他に一物もなく、朝もマニオック、晝もマニオック、夕もマニオックにて——無窮にマニオックにて、鹽もなく、魚もなく、肉もなく、油もなく、パンもなければ、遂にマニオックは咽喉を通過せざるに至る。何にか他に一二のものありて食事を助くるを得ば、サンサーバル人は満足するなり。之れなくては胃の腑も次第に口を閉ぢてマニオックを容れず、而して人は遂に

死するに及ぶ』

「分つた。併し余は出立の際に許多の鹽を倉庫の中に残り、而して汝等は魚類、産産質、并に油類を買はんが爲に、許多の物品——眞鍮器、飾玉等を有せるに非らずや』

「情て主公は今我等の眞状を知るに迫るべし、我等は久しき間是等を所有せざりしなり』

「是等の物品が倉庫の中に在る以上は、之れを汝等に分ち與ふべき等なり』

「茲に又盜賊の問題来る、彼等の中并、鋤、鎧等を以て、私かに魚に向つて、主人に賣るものあり、

而して之れが分け前を得しものは互に相殺して、其の盜者を告げざりければ、主公等は之を怒り遂に全體に向つて、飾玉、眞鍮器等を與へざるに至りしなり』

「必死するに、フニツタ、マニオックはマニオックのみにては無味な食物なれども、身軀の滋養には適せるものなり。試に思へば、バナナ、ポイントよりスワンシー、ソーオルス迄の熱人は皆是れに出で其

生を解ぐものに非らずや。又現にサンサーバル人はロンゴーに於て六年間、余と共にマニオックの上

に生活せり。何故に爾り此遠征隊のサンサーバル人に對してのみ害毒を與ふるにや。余は何故に此マ

ニオックが十一箇月の間に一百の人衆を斃すに至りしやを解する能はず。何れの時に於て人衆等は病氣に罹り始めしや』

「君が此地を去る時に於て十二人許の滑瘍、腹痛、胸痛等を病みしものありしなり。其中多少は回復せり。其後四週日程を経て、人衆中に非常に衰弱するものあり、次第に重く次第に激しく、遂に骨のみを爲りて死するあり。我等は之れを辨れり。我等の朋友がボロボより來りし時、彼等は肥満にして大にヤンブヤの人とは異なれり。彼等は至て強健なり——我等は皆憔悴然たる容貌を示せり。然るに一月程を經過せしに、不思議や此ボロボより來りし人も我等と同様の有様と爲り、日に一人、二人乃至三人を斃せり。斯くて何れも皆同一の運命を担つに至れり。」

「汝等の中には、コレラ、天然痘、熱病、或は赤痢等に罹りしものは之れなきや。」

「何人も斯かる病に罹りしものなし。ノーマリ人並にノーマン人の如きは、氣候の爲に少しく苦みしものあるべしと雖ども、サンサーバル人は然らざるなり。」

「已に激しく働きしか爲に非らず、又虐待を受けしが爲にも非らず、コレラにもあらず、熱病にもあらず、又氣候の爲にも非らずと云ふか。」

「然り、サンサーバル人は是等のもの爲に死せしには非らず。」

「然らば彼等は瘰癧たれしか、絞られしか、毒殺されしか、將た溺死せしか。」

「是等の事もなし、善人は決して罰を受けず、一週間に一日は休暇を得しなり。」

「然らば余は介障者マクソントの名に由て——凡て此處に列れる汝等か眼を開ひて、此の四十の人を熱視せんとを望む。眼は大にして頬はこけ、頸は瘦せて肋骨は高し、汝等は彼等を見るなるべし、何故に彼等は斯の如き有様に立ち廻りしにや。」

「唯神の知るあるのみ。」

「併し彼等は現に衰弱より衰弱を告げて、將に死去せんとするに非らずや。」

「實に然り。」

「然らば則ち何物が彼等を殺すに至りしか、余等は是非とも此事を知らざるべからず。」

「我等は之れを知ると能はず、恐くは命運の然らしむるものならん。」

「併し上帝は汝等に向つて完全の地位を與へしなり。眼は以て見るに足り、手は以て感ずるに足り、足は以て歩むに足り、胃は以て食物を消化するに足り、情威は以て汝等の歩を世界の大道に進ましむるに足るに非らずや。上帝は決して故なく強壯の人を此極には至らしめず、之れには必ず相當の理由なかるべからず。」

「併してサ、汝は賢良なるフレンドの子なり、又知る所なかるべからず。汝等の中に死者多し、余は其理由を知らんとを要す。何故に何等は安然強壯の中に住居して、却て余等が幾多の困難を犯し、非

常なる森林を通過し來りしに比して、其死者を出すと其れ斯くの如く多きにや」。

サリムは之に對して靜に答へて曰く――

「我れは賢人に非らず、人皆之れを知れり。我れは唯一青年のみ、人火を爲りて小許の貨銀を得んが爲に此地に來りしもの、我れは主公の爲に力を致すと知れども、難問を解釋するには適せじと思ふ。何れに致せ、君が彼の地に出發せしより不幸の出來事は重り來れり。我れは茲に來りて已に一人の兄弟を喪へり。全く我等の舟にては乾燥せるマニオックと水とは我等アタムの子孫に向つて適當なる食物に非らずと思ふ。我等の朋友并に親戚にして死せるものは何れも皆マニオックの害を受けしものなり。幸にして我れは死を免れ、今は健康なるを得しも、皆て我れは一杯の食物に向つて自由を賣るとぞ猶豫せずと思ひしとなきに非らず、余は生きて是下の歸り來るを見るを得べしとは當時に在つて斷念はざりしなり。元來人は人に依て同じからず、凡ての人の情感は一ならず、各自人の相異なる如くに、黑人も亦相異なるなり。或る人は富裕なるべく、或る人は貧賤なるべく、或るものは船底に在つて石炭を焚き、或るものは甲板上に於て命令を爲す」。

此時乘人中にサリムの辨言を稱賛するものあり、彼れは之れに力を得て、咽を拂ひながら其首を擡けて曰く――

「併し疑もなく書海はマニオックに於て存するなり。其結果は甚だ恐しきもの、之れを食せしものは皆之れを知れり。病の徴候は第一に、兩足に痲痺を覺へ、從つて筋に痠みを生し、頭痛は激烈にして恰も頭上に鐵環を嵌めしが如く、須臾にして人は眩暈の爲に天地の倒るゝを覺えて地に伏すに墮る。マニオックを食せしものは何れも皆同一の懸念を受けしなり。其中或るものは勇氣を鼓して他の食物を捜かすものあれども、或るものは衰弱の爲に身を動かす能はずして其儘に死地に就くに墮る。

暫らくの間は、營内何處に到るも、墓所と死人とを見る程なりき。固より茲には鹽なく、肉なく、油氣なきなり。日々見る所はマニオック、乾燥せるマニオック、如何にして平滑に胃の腑に達するを得べき。クレヒト并にソースは消化の爲に必要なるものといふに非らずや。

我等は數週を出でずして、スアンレー、フォールス或は河上に向はんとを思ひ、白人の下に事を執るを止むべきとを決せり――誠く暫。我等の間に死者多く、引き續きて將に死せんとするものあり、我等明らかに其原由を知る能はずと雖ども、或るものは我等が白人の爲に働くを以て、此結果を見るに至りしなるべしと考ふるものあり。我れは固より是等の事を思はず、現に角我等は君の來着處此地に留るべきとを約せり。而して今や茲に相會ふとを得て我等の感情を自由に吐露するとを得、實に我等生存者の榮とする所なり。我れは他に言ふべきとなし、唯心に了解し難きとは、何故に此大陸に於て

生れたる我等は其死者を出すと斯くの如く多くして、他より来りたる白人等は一も之れが爲に死するものなきやの事是れなり。我等がコンゴに於て他の地に旅行せし時には、余等の死するものは少く、白人の死するものは多かりしなり。今は却て反對の結果を生ぜり。依て思ふに是れ全く食物の爲ならざるべからず。白人等は山羊、雞、魚類等の肉を食せしを以て死するとなく、我等はマニオックの外に一物を有せざりしを以て死せしなり。我が見る所は則ち之に外ならず」。

「果して然るか、然らば余は之れが理由を見出すとぞ得たり。余は一々汝等の首を腫らし、一々に解剖せり。汝等は共に首を、マニオックは汝等がヤンマヤに留りし間の食物にして、之れが爲に汝等の兄弟は死するに至りしなりと」。

「然り」。

「而して汝等は人衆がホロホよりヤンマヤに新に來りし時は何れも健全なりしと言ふか」。

「然り」。

「ホロホの人衆はホロホに在るの間何を食せしや」。

「チクワンガ」。

「チクワンガは則ちマニオックを以て製したる麵粉に非らずや」。

「然り」。

「彼等も其後病に罹り、死せしと言ふか」。

「然り」。

「汝等はマニオックを以て麵粉を製し爲さざりしか」。

「成るものは之を造れり」。

「是れ成るものは生存する所以なり。原因は則ち此處なり。汝等は野に行きてマニオックの根莖なるものを集め、其葉を切り、家に歸りて直に之を料理せしなるべし。此マニオックは苦味を有す、此苦味は有害なり、嘗に數百の人を殺すに足るのみならず、數萬の人をも殺すに足るべし。汝等は又根の皮をむき、之を切つて葉と共に生にて食せしなるべし。是れ等しく汝等を毒殺するに足る。」

ホロホに在るの人衆は、土人の製したる麵粉を買ふて之れを食せしものなり。土人等はマニオックを取り來りて、之を河水の中にひたすと四日乃至六日、毒汁を盡く洗ひ去つて而して後之を皮剥ぎ、乾かし、麵粉に造るなり。ホロホに居るの間は彼等之を食せしを以て敢て其身軀を害するとなかりしも、ヤンマヤに來るに及んで、營内の人と同じく生なるマニオックを食するに至りしを以て、次第に同一

の結果を見せしなり。勿論當時食物に窮乏を告げしを以て之れを爲すの暇なき事情もありしならんが、之れが爲に生命を失ふと知らば彼等も少しは考を遣らせしなるべし。中には之れを水にひたすと知りしものもあらんが、其害毒の斯く甚しきを知らずして折り／＼生じて之れを喰ひしなるべし。是れ則ちヤンプヤに於て一百の菓を見出すに至りしの原因なり。又彼等をして斯く遠慮を爲さしめしの原因なり。白人は死せず、彼等は米、豆、ビスケット其他の肉類を食せしを以てなり。若し此死者多き原因を氣候の爲なりとせば、勿論白人は彼等に先つて死すべきの理、其の然らざるを見れば全く之れが爲には非らず、彼等は氣候の爲に、余等の爲に此病を生ぜしには非らず、南星に感傷を覺え、頭痛を感じ、身体に力なきに至るといふは、確かにマニオックの害毒たるに相違なきなり。彼等にして若し余が言の如く、マニオックの根を五六日開水中にひたし、然る後若し飢えを感ずる場合には、粉を以て之を包み、タンブリンと爲して食したらんには害なかりしなり。斯くの如くんば、今日にして余は何は二百の強健者を彼等の間に見しならん。是れよりは余が言に従ふべし、此一兩日は成るべく少許のマニオックを食し、若し遠慮を得るを得ば専ら之れを食すべし。而して彼等は野に行き許すのマニオックを集め、之れを河水の中に浸たし置くべし。数日の中に余は此處より出發の途に上るべし、病人は曠野の旅行程に在る一大島に墜り、慈

に廿日開程の糧食を準備すべし。十分の遠慮を得ざるものは、例の木の網を造り、マニオックを煮ひて此上に置き、夜を通じて之を乾かし、更に之れをつきて粉と爲し、以て食用に供するを可とす。明朝彼等は皆再び余の處に來り、彼等の汚穢なる衣服を脱すべし、余は彼等に向つて新衣を與ふべし。嗚呼余等今幸にして汝を此危難の際に救ふとを得たり、是れ全く上帝の汝等と同調する所以のものに非らずや。

余等は實に能く彼等を失望と不平との間に救出せんが爲に來りしものなり、彼等はパナルヤの牧場に於て運命の柵中に閉ぢ込められたる牛羊の如く、殆ど自ら如何ともしざるの道知らざりしなり。ナイアンザより來れる人衆は之れに比して大に異なる所あり。彼の草原の美麗なると、動物野菜の豐饒なると、牛羊其他野獸等の許多なると、事物の珍奇なると等凡て前隊人衆の心に向つて今尚ほ活々たる感想を興へ、而して再び彼の地に達して此快樂を得んとするの希望は彼等をして常に活潑の行爲を爲さしめたり。彼等は好んで此事を人に話せり、其以前に於て幾多の辛酸を嘗めしとは物ともせず、此最後の幸恵と快樂とを説いて、聞くものをして共に喜悅の情を滿たさしめたり。後隊の人衆も爲に少しく其心を奮へり、彼等が貧血的の容貌と、彼等が幸運を望むの心情は殊に此時に於て是等の話を聽し、更に自由に彼等をして種々の想像を畫かしめたり。此話は彼等の耳には恰も凡ての愉快なる

ものを以て満たしたるエアンの境園の如くに響けり。力を強はんが爲には穀物、牛乳、蜂蜜の爲には牛乳、野菜——是れ今日の境園に於て彼等が専ら心を支配する所のものなり。踏るものも之れが爲に途上の困難を思はず、聴くものも之れが爲に途上の困難を問はず、彼等は共に興に心を一つにして速に彼の地に達するに至らんと欲せり。余は是等大人なれども而も小兒に異ならざる單純の問答を聞き、深く彼等の心を憐れり。斯くてナイアンザよりの人衆、其滿腔の熱情を吐露し終りて曰く「イムレヤ、我等は再び牛肉の饗應に與かるを得べし、君等も亦マエオックと青菜との爲に身味を害せしの日を忘るゝに至るべし」と。

是等勝算的話は果してバナルヤの半病人をして逃亡の夢想を除き、眞直にナイアンザに向はしむるに足るべきや否や、是れ余等の容易に保護する能はざる所なりと雖ども、牛乳と蜂蜜、肉類と穀物、給料と貨幣とが、マコンレー、フオールヌの乾魚、アツツ酋長の杖、見込なき將來に比して遠く勝る所あるべきやは荷も思慮あるもの、了解に難からざる所のものなるべし。

久しきに涉つて後隊人衆の精神を壓却せし所の雲霧は、今將に晴れんとす。併し之れが爲には余等は第一にバナルヤの地に去らざるべからず、是れ幾多月殺と、疾病と、諸種の弊害とを宿せし所なるを以て、此處に留るの間は彼等の心又全く平靜なる能はず。余が八月十七日に於てアツツに、

余等の來着を報せし使者は、同じく二十四日に於て彼れに到着せし筈なり。余は彼れに向つて、彼れが爲に十日間を待つべき由を告げしが、ナイアンザより來りし人衆は尙ほ之を長しと爲して、速に出發せんと求めたり。併し此猶豫は兩リツツツに對して最後の機會を與へんが爲のみに非らず、當時マコンレー、フオールヌの近傍に在りと聞えしマコンレー氏の來着に向つて待ち、勿々余等の側に在つては遠征隊を改造し、諸荷物を取り調べ、又けてアツツが各箇を小にして僅かに兒童の運ぶに適する如くに爲せしものを一々又元の如くに引き直さんが爲に、是等の時日を要するものありしなり。マエームン氏の死去に關しては當時余等未だ聴く所あらざりしなり。

合營に於て止ると三日、余等は凡ての病人と荷物とを舟に載せ、三時間の航行に由てパンカングの島に迫み、此間マコンレー人火等は皆陸に依て此島の對岸に合營すべきとに定む。余等がバナルヤに止るの間、彼のウガローはアツツの瀧より河を下り來り、已に島の大なる方を占有するに至りければ、余等は更に河を上りて一軒適當の場所を見出せり。陸行隊は三日の間、斷續其歩を消きて對岸の合營に入り來りしが、其後部は人衆を駕御する爲に非常の運引を來し、漸く廿四日の夕刻に至りて上陸所に來着せり、而して此間の距離は僅かに六哩に過ぎざるものなり。ボチー氏の如きも二十二日に至る迄到着を告げざりし。前隊は千八百八十七年に於て此距離を四時間に於て旅行せしが、其後此地は

アランの爲に強く村落を打破せられたるものと見え、四圍の風色は大に發射に候りて、營々に繁えたる森も林も、田畠と共に今は雜草、寄生草の叢ふ所と爲りぬ。以て亞弗利加土人の、如何に其生命財產の不安全なるかを察知するに足るべし。同時に余等は、此旅行に於て遠征隊を十分に改造せざるべからざるの必要を感じ、此少許の距離に三日間の時日を費す如き有様にては到底余等が長途の行程を全ふし得べきに非らず。余等は又此間に四箇半の荷物、二挺の銃銃を失へり。併し余等は之れに由て以て直に彼等の状態を視察すると併し、其亂雜にして而も寸毫の制限なきの跡は、余等をして大に心を決せしめたり。ツアンツン若しくは彼れの物をして之れを引寄せしむるに非れば、斯かる暴徒をして前道の廢滅限りなきの野を、安全に經過せしむるを併て期すべきにあらざる。此進行の比例を以てアルベルト、ナイアンザ間の距離を測るとせば四百五十里を費さざるを得ず。ヴェーモン井にホターの兩氏は九十哩を旅するに四十三日を費せりと有り、彼等が途上に於て遭難せし困難は、未だ全く其日記の上に見はれずと雖ども、彼等が此間に忍びたる心情の程は實に推察するに餘りあるなり。余等は此冷しき島上に、八月三十一日迄止れり。此間余等はナイアンザよりの人衆に對して、二十ヤードの織物、四磅の飾玉、十五の眞鍮器を各人に與へ、又後隊の人衆に對しては同じく之れが半額を與ふ、則ち今之を金商に見積ればナイアンザの人衆に與へたるもの七百六十磅、ハナルヤの人衆に

與へたるもの二百八十三磅なり。斯くて余は敢て彼等に向つて賞與を別になしには非らず、唯後隊の人衆は已に一通りの器具を得たれども、ナイアンザよりの人は今未だ羊の皮、木の皮等を靴ふものなるが故に、余は特に是等に向て工額を與へたるのみ。是等の物品は彼等をして十分其心に愉快を感ぜしむるに足る。余は又ウガロワの六百人に、織物其他の物品を與へ、彼等をしてマエオックの菓子、麵包并に粉類等を余等の爲に供へしめたり。

余は自ら檢閲を爲して諸荷物を秩序的に調へしむるの外に、ロンドンなる委員に對し、ロンドン、ローヤル、并にローヤル、スカウツの地學協會等に對し、報告を認むるの必要あり、他に又マンニエアの頭領と相談を調へざるを得ず。彼等は時に或は誠實誠意の旨を聞取し、時に或は其部下が諸種の荷物を以て逃走せしむるを許し、而して毫も自ら責任を負ふとを知らざるもの如し。余は常に彼等に答ふるに、余が十七日に於てツアンツンに與へたる書翰と同一の趣旨を以てせり。凡て汝等は余等と共に旅行するも可なり。又旅行せざるも可なり。余は汝等が自由の意思に任ずべし。余は必ずしも汝等を要せず、併し汝等にして余に従はんと欲せば余は汝等を採用すべし、而して汝等が運ぶ所の荷物に對して相當の賃銀を支拂ふべし。彼等の中之を聽きて或は職務を解かれたりと心得たるものあり、此種の徒は宜しく四方に奔走して掠奪を事とするに如かず。——併し其中三人の頭領は自ら指つて余に

従はんを求めたり。余は彼等にして若し三十日間、余に従つて旅行せば、其後は荷物其他の事を申
けて彼等の手に任ずべき條件の下に彼等を雇へり。

八月二十九日、遠征隊の人員に就き、點檢せし所は則ち左の如し――

サンデーバル人火

百六十五人

ローア人火

五十七人

マンニエマ人火

六十一人

人火合計

二百八十八人

ソトダン人并に吏員

二十一人

病人

四十五人

ソーマリ人

一人

エミン、バシヤの兵卒

四人

マンニエマ頭領、婦人、従者

百零八人

吏員并に使僕

三人

總計

四百六十五人

アルバルト、ナイアンザに對する第二回の旅行に於て運搬すべき荷物表――

火 藥

三十七箱

リメントン彈藥

八十三箱

ウ井ンチニスター

十一箱

マキシム

九箱

小 玉

十九袋

飾 玉

六袋

眞鍮製針金

四袋

絨 物

十七箱

其他の諸物

四十四箱

合計

二百三十箱

則ち二百八十三の火火に對する二百三十箇の荷物あるなり。

此他に多少の荷物あり、糧食、銃器械等、合算すれば計多の重量と爲るものあれども、是等は皆小舟に於て運ぶと爲し、陸上、人の力を要するものは實に以上の如くに過ぎざるなり。余等は今次に荷物に對して五十三人の、餘計なる火火を有すれども、前途旅行の結果は必ず多少の疾病者、負傷者、死者を出して其數を減するに至るべく、又當今後隊の健康に就て觀察するに、遂に或は荷物に對して火火の不足を覺ゆるに至り、頭領は病弱者に代つて自ら之れを擔はざるを得ざるやも知るべからず。併し其れ迄は病弱なるもの先づ十分の休養を爲すとを得、少くとも是れより六十日の間は、彼等は安余に舟中に臥して甚蒸實并に野菜等に不足を覺えざるべし。但し山羊、雞類は容易に得べからず、ウガローフは已に兩岸を掠奪し盡したるを以てなり。又此の他の火火も敢て過度の勞力に従事すべきに非らず。唯彼等にして能く自ら慎み、自ら戒め、安りに食慾の爲に危險を犯すとなく、第一回の旅行に比して其過失者を減するを得ば、彼等も又不幸の境遇に陥ると少なかるべきなり。

余等がハンガンクアの島に在りし時、八月十二日の日附なるウエーモン氏の書翰はスタンレー、フオールスより來着せり。中に彼れはハンガクアに向ふべきとを記せしが、更に使者の傳ふる所に依れば、彼れはバナ、ポイントに向ふやも知れずと言へり。彼れが已にスタンレー、フオールスを去つて河を下りし以上は、ハンガクアもバナ、ポイントも別なる所あるに非らず、彼れはムクに遠征隊との關係を遠ざかるに至りしものなり。余は今ハナルヤ近傍に留つて彼れの到着を待つ必要なし。余はポドー巖岩の東側、エモン、パンヤ并に埃及人に對し、十二月二十二日頃、ポドー巖岩の近傍に來り、一月十六日前後に、ナイアンザに歸すべきとを約せり、余は今ウエーモン氏を遠征隊より失ふとを以て甚だ遺憾に思ふ、然れども余等は再び後隊の轍を踏んで安りに時日を擱引し、ポドー巖岩の東側等をして空しく其方向を失ひしを爲さしむるを願はず。依て余はウエーモン氏に一書を送り、中に若し彼れにして六十の人衆を率むるを得、以て直に余等の跡を追跡し來らば、余等が數百の人と共に重荷を負ひ、沼を渡り河を涉つて此を迫むるの間に、必ず追着するに至るべき山を告げたり。併し諸者の已に知る如く、余等は當此之れを知らざりしと雖ども、ウエーモン氏は、余が此書翰を草する前十二日に、已にハンガクアに於て死去せしものなり。

八月三十日に、余は凡ての小舟、ウガローフの十二艘を併せて二十九艘を賦し、ボナー氏をして二百

三十九の人数、彼等の器具、糧食等を載せて五哩許の上流なるレンダ河の上陸所に致さしむ。彼等は
陸行隊に余等の積道に因りて次の村落に迄進むべきとを命じ、舟隊は其旅客を上陸せしめて再び此島
に歸るべき筈のものなり。

翌日は、クアツアに背を送りしより已に十三日を經しも彼れより何等の返答なきを以て、余等は最後
の旅行に向つてハンガンツの島を出發せり。余等は水夫病人を併せて二百二十五の人数、六十磅乃
至六十五磅の間なる二百七十五の荷物并に各人の器具、糧食等を積んで舟隊を派山す。日は紅く、
人々蓋布の下に、絶へず汗を拭き居たりしが、余等は勉めて六時間の間糧を取り、遂に下部マリ、の
下なる古跡跡に達するを得たり。斯くて九月一日に、余等はマリ、の港に至りしに、ボターの隊は已
に南部ムへに渡りしを見る。單純なるマンニエマ人并にワンサーバル人等は此港の危險に就て氣附か
ざるものゝ如くなりしを以て、余等は使者を南部ムへに馳せ、人数をして舟中の荷物を陸に沿ふて上
部に運ぶとを扶助せしむ。

二日に、余等は激流に撞みて小舟を引上ぐるに從事し、遂に二艘を覆へせり。翌日余等は嶺くマリ
、の港を越へ、而して正午に於て一同南部ムへに集れり。

ウガロークは彼れの舟隊を以て更に他の象牙を購集せんが爲に、余等に從つて上部マリ、の村に合營

せり。余は急ぎてローヤル并にスカツア地學協會に宛つべき書翰を認め、ウガロークを呼んで之を
英國に送るべきとを托せんとせしに、恰も彼等は余等が南部ムへに留るの間、則ち九月四日に於て、
彼のクアツアの甥なる、サリム、レン、マハメッドと共に來れり。サリムは少佐パークラット並にマ
ニムン氏との關係に於て已に數々其名を挙げられたるもの、身の高さは通常にして卑ろ瘦せたる
方、アツア種屬の容貌として立派なるものなれども其顔は強く天然痘の爲に其相を破れり。舉動は活
潑にして果敢決行の氣力あることを示すに足る。

ボターの語に依り、又彼れが少佐パークラット等に対せしの際よりして察する時は、彼等は疑
非道なる人物の如くに思はるれども、今對面の上に其人を爲りを考ふるに、強ち左る程にもあらず。
彼等はクアツアの股肱だけの事ありて又クアツアに似たるの人物なり。彼等は共に北源山の如何に係
らずして亞弗利加土人の血を流すとを躊躇せず、併しアツア人並に白人に對しては、復讐の爲めか、
或は是れより以上の事柄あるに非れば、妄りに虐殺を爲すを敢てするものに非らず。彼等は彼隊に
關し又心算に對して、打破虐殺を圖りしものに非らず、其下手人は全く一時の感情より激發せしもの
なるとは明かなり。併し余は、クアツアが五百の人数を彼隊の爲に、アウウイに送りたれども、迄
上土人の強悍に置ひ、又其地帯を見出す能はざるの故を以て歸り去りしと言ふの説を信ずること能は

ず。少くとも此事實は彼れが遠征隊に對する冷淡の心を顯し、約束に向つて十分の力を致さざりし事を見るに足る。更同等がモクマンレー、フォールムに赴きて彼れに面會し、彼れに請求し、彼れに懇願するに及んでや、彼れ並にサリムは數ぞ一擲千金の好機會なりと併じ、以て其相場に由つて之れに應せんことを圖りしものなり。彼等に理意ありしとは言ふべからず、併し彼等は利の爲に請事を認れしなり。クアラナが甘て余に對して爲したるの約束、余が彼れに與へたる助力の如きも、凡て唯利是れ希ふの心の爲に除却されしなり。少佐は實際彼等の要求に應ずべき金を有せず、併し彼等は、遠征隊は富豪者の保障の下に成り、又少佐もウェームソンと共に富有の身分なりと察せしものなるに似たり。彼等は共に相圖つて曰く「少佐は頻に人を要す、資貨固より尠くべし、モクマンレーは我等に對して懇切ならざるに非らず、併し人は衣箱の爲に努力を拂ふ能はず」と。是に於てか彼等は他に工火を運らせり。彼等の工火は命せり。若しクアラナにして少しく贊助の聲を運ぶ時は、彼れは必ず相當の贈物を受くべきことを知れり。若しサリム、ボン、モハメッドにして少しく情極的の答を爲さば、少佐は彼れの箱を開き華麗なる衣服を取つて彼れに與へ、又四十五ヤーンの施債銃、或は珍奇なる鞍物、或は象牙の柄を以て飾りたる短銃等を以て彼れに送り、而して彼れの義兄弟なるマノードに對しても、又同一の方法に由つて其歡心を得るとに汲々たるの狀を示せり。

サリムは今余に對して、彼れは自ら、余が去る十七日にクアラナに與へたる書翰に答ふる爲に來れりと稱し、且つクアラナの命に由つて是等の火を直にモクマンレー、フォールムに連れ歸るべしと言へり。アラナ種族が心に道徳上并に法律上の制裁を有せず、常に利益の爲に左顧右盼し、約束を破りて即みず誓言を食んで問はざる事、其れ斯くの如きものあるなり。彼等の都合に任せて人と談判するに際しては、インシヤク、マンシヤク力を盡して、心を盡して、必ず此約束を履行すべしと言ひながら、其相分るゝに及んでや、毫も之れを其心に留めざるに至る。今は彼等は官に余よりして利益を得るの目的のみならず、少しく風波の恐しき地位に立つものなるを以て、其言ふ所は固より理言を問はざるなり。余が去る十七日に於て、英語にて一道、アラヒツク船并にモクマンレーに認めたる五通の書翰の返辭は則ちサリムの言ふ所の如きものなりしなり。余はサリムの言に對し、少しく威嚴を示して答へて曰く「サリムよ、先づ暫らく余が言ふ所を聽け。若し余にして汝并にクアラナが少佐の肩殺に關係あると思はば、余は決して汝をして生きて此場を去らしめじ。汝は從來、余に就て唯一部を見しのみ。余は爲すべきことを爲さずして止むものにあらず。併し余は余の心よりして、少佐の死を致せしものは汝并に、クアラナの全く相關する所に非るを知る、

故に余等は直に胸襟を開いて相攻ずる所あらんと欲せしなり。ツァンツァは火に余に不利益を興へたり、併し固は今茲に争はずともザンワーバルの王并に英國領事の方に由つて容易に決するを得べきもの、余は之を彼等の手に一任すべきなり。注意遂に汝は之れを汝の叔父に告ぐべし、彼れは余に對して、彼れ并に彼れの部下九十六人が、ザンワーバルよりスコンレー、フォールスに來りし渡航費銀を交拂はざるべからず。又諸荷物、施條銃、彈藥の紛失に對し、遠征隊をして遺餘の時日を失はしめしむに對し、凡て之れが賠償を爲さるべからず。彼れはよろしく彼れの好む所を爲すべし、併し余は最後はに於て必ず勝利を占むべきことを知る。彼れは余を害する能はず、併し余は彼れを害するを得。汝は是等の事を彼れに告げ、彼れが過去に爲せし所爲の非を知つて、將來に改むる所あらしむべし。若し彼れにして彼れの人衆を聚り、是れより四十日許間に、則ち、余等遠征隊が未だイチャエリを渡らざる前に、余等に迫着するに至らば、余は彼れが過去の過失を許し、凡て法律上の罪を見合すべし。サリムは勢よく之れに答へて曰く――

「余は一々君の言ふ所を聽けり、我は今夜パナルヤに歸り、ウガローワの舟を假りて以てスコンレー、フォールに赴くべし。我は八日以内にしてツァンツァに會し、十七日に於て再び茲に到着し、四十日以内に必ず君に迫着すべし」

余曰く「併しサリム、余は寧ろ汝に對して最後の告別を爲すべし、余等は是れより十八箇月の後に、ザンワーバルに於て相會ふに非れば、其以前に再び相會ふとなかるべきことを信するを以てなり」。

「何故に君は此言を爲すか」

「何となれば汝も亦ツァンツァも毫も約束を重んずるの人に非るを以てなり。汝は已に余に對して凡てのマンユエマ人をスタンレー、フォールスに連れ歸ると言ひしに非らずや。而て不都合の語なり、併し、汝にして彼等を連れ去らんと欲せば連れ去れ、余茲に再び言ふ、汝は汝の力を以て余を害すると能はざるなり」。

「インシヤク、君よろしく心に安んずる所あれ、余等は誓つて四十日以内に君に迫着することを期すべし」。

憐むべし、彼れは余に對して未だ其舌の根の乾かざるに、直にマンユエマ如館の所に赴り、彼等を誘ひ去らんとせしが、如館等は之れに應せず。依て彼れは怒に乗じて強迫手段を用ひ、如館等は余の所に來つて之れが保護を求めたり。

余はサリムに向つて笑ひながらに告げて曰く「汝の約束せし所は眞なり、汝は確かに四十日以内に余を見るに至れり。併し其次第は如何なる譯ぞ。是等は獨立のマンユエマ如館にしてツァンツァの命を受

けて来りしもの、彼等が余に従ふは則ち約束に従ふものに非らずや。彼等をして彼等の意に任せしめし、汝も再び人衆を率ひて余に迫らせんとするものに非らずや、何が爲に彼等をして歸り又來らしむるの徒勞を取らしめんと欲するにや。行け速に行ひて汝の舟に山り、以て四十日以内に余に再會するの約を違せんと勉めよ、恐くは將來の災厄を免るゝを得べし。

五日に於て、余等はバマンドの大村落に到着せしが、此地はウガローア等に出て見落されしものと見え、唐桑の廣大なる野、芭蕉實の鬱鬱せる林等ありて、余等は實に意外の財を分てり。彼隊の人衆は其健康を復せんが爲には十分の食物なかるべからず、肉類は殆ど得る能はざるも、芭蕉實、唐桑等はマニオンクよりも彼等の体に適せり。此處に余等は二日間の滯留を爲せり、此時余等はマニオンク人と備ひしの結果として大に損傷を患き起すに至りしを知る、則ち彼等の間に大熱症を患ふるものあり、其勢ひ至て猖獗にして延いて忽ちマニオンク人火の間に傳播す。サンローバル人は之れに對して恐るゝとを要せず、彼等は千八百八十七年三月、マニオンク號の甲板に於て何れも種痘を爲せしものなるを以てなり。又マニオンク婦人の間に二人の狂婦あり、其原因は子宮瘰癧より來りしものならんが、彼等は之れを以て魔鬼の據る所と爲す。此二人は絶へず、夜を通じて大聲に唱歌を爲すを常とす。蓋し少佐パーラフアントが死を致せし原因も是等狂婦の所爲に出でしものなるべきか。若し少佐にして果して昔

樂上優麗の感能を有せし以上は、斯くの如き亂雜限りなきの唱歌が、彼れを憤怒せしめしり又無理ならぬ事と甘ふべし。

是等狂婦の友人等は又時に聲を併せて彼等の歌に和すとあり、是れ唐桑の手段を用ゆるよりは、幾分か彼等の心を慰むるに足るものありと信ずるに由るなるべし。思ふに是等の事、彼等の如く紛雜を厭はざる種屬に在ては格別感能を害するとなかるべきも、余等の爲には實に甘ふべからざる非常の妨害を興へたり。

此部落に於て二人のサンローバル人、人衆中の働き手を以て目せられたるもの、私かに命符を出で、バマンドに掠奪を試み、途上土人の伏兵の爲に殺されたり。是れサンローバル人中の尤も機敏なるものが、其最後を招ぐに至るの道なり。此中の一人は一隊の頭領にして、千八百八十七年の六月にマニオンクを出で、より余等に追隨して其力を救せしもの、彼等が一時の食慾の爲に、其名譽と生命とを賭すると其れ斯くの如きものあり。余は此機に乗じて嚴しく人衆を戒めんものと思ひ、彼等を盡く呼び集めて言を爲して曰く「彼等が斯くして其生命を失ふに至るは元と是れ痴愚の至に非らずや。數月數歳の間、誠實と剛毅とを以て貯へ得たる名譽と財産と生命とを棄け、一朝之れを食人種の釜中に投ず、痴愚の極に非らずして何ぞや。余は皆て汝等に與ふるに、許多の牛羊其他の家畜、穀物野菜、金銀并

に衣服等を以てしたり、而も尙ほ一人の余に向つて其咽喉を割かんと求むるものなし。然るに今彼等は一匹の山羊若しくは一羽の鶏の爲に、余の命に背りて以て其生命を失ふに至る、是れ豈に一點人生の義務を知るもの、行爲ならんや。

彼等は直に悔悟の状を見はせり、再びアウの名に由て斯かる事を爲さざるべきを誓へり。併し勿論個は一兩日の間のみにして、其他は彼等の相關する所に非らざるに似たり。

余と共に赴き來りたる讀者は何人も、從來遠征隊が非常の危難に罹りしは、凡て皆約束を履行せざるの邊に於て起りしものなることを知るべし。大は後隊の破滅より小は余等が殆ど生命を危ふせし事、何時も破約の罪に瀕せざるものなし。余が亞弗利加に於て會ひし人々は何れも皆——一萬人中九千九百九十九人迄は約束を守るの能力なきものなるに似たり。此黑人等が絶へず、故なく約束を破るの事は實に余が爲の害毒にして、余は絶へず、之れが爲に心を痛め、時々余をして殆ど此情を制する能はざるの思わらしめぬ。余にして若し三四百の家畜を收し、以て此森林間を旅せんとするも、是等黑人を駕御する程の困難と心痛とは覺えざりしならん。余は時に長き繩を以て彼等の頸と頸とを縛し、以て其逃走掠奪の自由を奪はんとを思ひしとありしが、斯くせば彼等は直に虐待を名として紛亂を醸すに至るべし。之れを竟にせば忽ち漫に、之れを旅にせば忽ち亂に、常に寛嚴の中庸を得て、以て類

を人からざるの約束を類まざるを得ざりしと、是れ實に余が爲に至難の業なりしなり。

余等は暫らく「インフハント、ブレークランド」の營跡に留り、其れよりアメンの池に向へり。

余はウガローフの人衆よりして、アメンより内地の方に當つてアメンの種屬あり、彼等の家屋は他に比して著しく進歩せる所あり、居室は大にして快く、立派なる壁あり、又家に接して露臺を供ふるとを賜けり。又彼等の鍛工は至て其好なる手腕を有し、槍、刀、ナイフ或は矢等を作るには種々の裝飾を加へ、中には三枚刃或は四枚刃のものありて、其形はモンツ并にナイフ、ナイフのものに似たりと云ふ。

十二日にアメンの池を離るゝに際し、余等の舟隊は一百九十八人を運び、ホター氏の率ゐたる陸行隊は二百六十二人を以て數ふ。陸行隊は荷物を有せざりければ、其中の練熟なる人々は、舟行隊の未だ遠せざる前に、早く已に合營に着けり。道も以前に比すれば一層明瞭と爲り、後に此間を旅行するもの又道なきを憂ふるを要せず。

併し合營に達せし時、彼等は小屋の屋根を蔽はんが爲に、アメンの葉を集むることを名とし、森間に飛び入りて警衛の眼を離れ、深く内部の方に向へり。此中或は數匹の雞、少許の甘蔗、芭蕉實等を獲て歸るものあり、中には又不幸にして災厄に罹れるものあり。三人のマンヌエマ人は殺され、

エモン、ハンヤが兵卒中の一人は、背部に於て大なる傷を受けしが、併し幸にして急所を外れたり。傷口は之れを縫ひ、其上には細帯を加ふ。又後部の報告に依るに、途上五人のマンニエマ、三人のザンワーバル人、并に一人のソーダン人は食人土人の爲に襲はれて、敢なく其身を彼等が晚餐の料に供するに預れりと傳ふ。是れ偏に彼等が余に對する約束を破りしに由る、彼等にして施徳を手にして注意する所あらば、土人等は決して其目的を達する能はざる筈なり。余が彼等に向つて注意を促せしは僅かに五日前の事、彼等は其時に誓ひし事を忘れ、無用の業に向て有要の身を失ふに至りしなり。余等は敢て彼等をして食物に割せしむるに非らず、苟も必要ある時には、一隊の人員を派遣して許多の道蕪實其他を採りしめ、歸來之れを火に乾かして以て運搬の便に供し、彼等をして數日の糧食に不足を感ぜしめざるものなり。然るに彼等は之れを以て満足せず、小事の爲に冒險の業を取つて、以て遠征隊をして已に十二人の死者并に十三人の重傷者——死に瀕するものを出さしめたり。また天然痘はマンニエマ人并にマリア人の間に、其勢力を逞ふして、未だ何れの日に止るやを知らず。余は彼等を駕御するの道に苦しみ、彼等をして其爵を受けしめんと欲せば、之れを土人の手に待つより外なし、理由と則成とは悉も彼等の心を制するに足らざればなり。

恰もマンニエマの上に於て、一艘の舟は全然彼等の不注意に由て轉覆せり。隊中の游泳を能くすもの、

直に彼處に赴きて、之れを水底に搜索し、一箱の火藥并に一箱の銃玉の外は、盡く積物を回復するを得しが、舟は爲に破れて又川ゆべからざるに預れり。

マクウィを過ぎて余等はマンニエマに達し、是れよりインクウエアに向つて涉る所の廣野に供へんが爲に、此處に二日間の滯留を爲して糧食の匯集を爲せり。此合營に於て、常に勇剛を以て任ずる所のクァー曾てハンブアの夜襲に於て、彼等は人肉を喰はんと欲す、併し我等の肉は與ふべからず、彼等にして之れを喰はんと欲せば、彼等の仲間を喰はしむべし」と叫びしクァは、同好の徒を以て組織したる秘密隊の頭として二十四時間程の留守を告げしが、歸來背部に露積なる毒矢の傷を負へり。余直にアンモニアを傷中に注入して之を洗ひ去り以て彼れの一命を救ひしに、彼れ自らの考にては、烟草の葉を以て傷口を蔽ひしが爲に毒氣を散ずるを得しなりと言へり。

余等が林間の合營を構成する毎に、數々山羊に似たる小鹿の群に由て驚かざるゝとあり。是等の獸は常に林藪の中に隠れ、余等近く其側に至るに及んで、速に足許より飛び出すなり。人衆は之れを見るや直に聲を擧げ、手を振りて跡を追ひ行き、之れを捕獲せんとを勉む。或時此小鹿の一群河の方に飛び行き、或は小舟を涉り、或は水中に入るものありしに、人衆等も跡に沿ふて河の中に飛び入り、幾十の人水面に頭を連ねて游泳し、身を忘れて獲物を争ふの狀を呈す。彼等は殆ど狂亂せるものゝ如し。

毒矢を注ぐものあるとも、槍を振ふものあるとも、食人種の怒を引惹くものあるとも、此際にて彼等を止むるも能はず。此種彼等は互に相争ふて遂に溺死するに至るやも知らず、一匹の小鹿を逐ふに十數の人を以てす、假令之れを獲るとも自他の腹を肥やすには至らざるべきに、何事ぞ相争つて斯かる痴愚の舉を爲すにや。依て余等は五艘の船をして彼等の救助に従事せしむ。殆ど半哩許の下流に於て、小鹿は非常の速力と狡技とを以て逃げ行きしにも拘はらず、遂にマニユなる一少年、首に依て先づ之を捕へ、後より又五六の人之れに飛び付き、以て相争ふに至りければ舟之れを救助する勿りせば、彼等は疑もなく共に溺死するに至りしものならん。マニユは斯くの如き困難の後にて漸く一匹の小鹿を獲しも、之を殺すや否や四方八方より來つて肉を争ふもの多く、遂に彼れは僅に一口の分前を受くるに過ぎざりし。

次の旅行に於て舟行隊は大に苦しみり。余等はウングラ并にイチニョ合流の邊に於ける古營跡に近けり。前方に進みたる舟中の一人は毒矢の爲に背部を射られしが、傷は直にマニユを注入して之を治療せしにぞ、幸に危病を招くに至らざりし。

翌日舟行隊は再び苦しみり、此度は恰も銃丸を受けしが如くに殆ど直に死去せり。余等の料理人なるウヤアは、水夫等が四十尺許の距離なる岸に在つて舟を急流に引くに際し、少しく不注意にも獨り舟

中に在つて船の方へ坐し居けるに、大膽なる土人あり、弓と矢とを供へて近く舟の方に進み來り、以て其毒矢を放ちたり。矢は肩に近く腹を通して咽喉を貫き、傷は實に大針の跡に過ぎざりしも、彼れは幸ふじてマハメントの一部を遺し其氣息絶えたり。

余等は次にパンガの池に向へり。翌日則ち九月廿日に於て、余等は此池を上り、二十七の小舟を無事に、フカート、アイランドに對する上陸所に繋ぎ、然る後凡ての荷物を運んで之れを合營に致せり。

余等が此近隣を通ずる第一回の旅行に於ては、一人も土人の武器に依て死せしものは之れなかりしなり。併し其後に至り、土人は白人の注意なき場合には、容易に黒人を殺傷することを得るの經驗を得しものと見え、今は絶へず余等の跡に附き刺ふに至れり。前隊よりの逃走者は彼等に向つて其味を占めしめしに相違なく、又ウガローフの部下なるバクス等は彼等に向つて興みし易きの考慮を與へしなべく、斯くて食人種は頻りに林叢の中に潜伏して恰も山羊を狩るが如くに、余等の人衆に對するに至りしなり。余等は三十日間十四人を失へり。廿日に於て驚恐なるローグ人、森の中に對を集めに行きしが、忽ち土人等の取囲む所と爲り、其身軀は槍創の爲に恰も鮮血の如くなり。廿一日に於て、マニユの婦人は余等の合營を去ると五十歩許りの所に於て土人の毒矢を受け、余等之れに達せざる前に已に死去す。是等の災厄に加ふるに、後隊よりのサンワール人はマニユの毒箭の爲に又此

命を終りぬ。

カロヤンビの湖は余等が次の合營なりし。余等到着を告げて荷物を積み上るや、直に殆ど二百の人は飢餓の爲に驅られて芭蕉林に向つて一散に飛び行けり。合營に残りし所の余等も又爲すべし事少ならず、翌日を以て此湖を飛へんが爲に道を開き、又小舟を引き揚げんが爲に丈夫なる蘆葦の綱を供さざるを得ず。

夕刻に至て集積者の成るものは相當の報賞を得て歸り來りしが、其中の多くは未だ歸らず、余等は夜半に至る迄合營の爲に銃丸を放ち、又大なる象牙を吹きて其聲を四境に馳せたり。尤も夜九時頃にて二人のザンワーバル人は海矢に由て殺されたりとの報あり、一時間許を経て其屍骸を持ち來すを見れば、則ちフェラワなり。彼ればベナルヤに於て後隊に關して余と問答を爲せしもの、常に輕快平意の一頭領なりしなり。屍骸よりは一面に玉の汗を吹き出せり、左腕の上部に於ける矢傷は實に小なるものなれども、其傷は已に全身に廻はりしものと見ゆ。彼れは傷を受けしより一時間程の間合營の方に歩み來りしが、忽ち息切れの爲に休まんと欲し、路傍に伏する十分許にして死せりと云ふ。ハッシーン、ドン、ツヌマなるものはザンワーバルの相應なるものなり。彼れも又次の屍骸として余の所に持ち來されしが、未だ全く死せしにはあらず。矢は右腕の外皮を破つて第三肋骨の間に入

れり。直に此矢を抜き去つて之を檢するに、尖銳なる部分には濃厚なるコール、ターの如きものを附け、其裏は實に弱穢のものなり。腕の方は膨れ上るに至らず、併し側腹の方は少しく弱狀を呈して、周囲の肉は常よりも軟かになれり。彼れは一時非常に衰弱を感じ、又非常に發汗を爲せしが、今は少しく快きを覺ゆるに至れりと云ひぬ。余は双方の傷を能く洗ひし後、之れにアンモニアを注入し又アフンダーを服せしめたり。

十日を経てハッシーンは全く回復し、常の如く其職務を盡すを得るに至りぬ。夜半を過ぎて集積隊の二隊は到着し、幸に他の出来事もなく、雞類、芭蕉實等許多を得しとを告げたり。翌朝に於り、ヤロハンナの土人なるムは天然痘の苦難を蒙つて、自ら湖の中に飛び入り、溺死せり。余等は皆て彼れに種痘を授けしも彼れは敢て之れに應ぜざりしなり。

余等は陸上凡ての小舟を、四分の三哩許を通じて引き揚げしの後、越に一日の滞在を爲して五日間の糧食を供ふると爲せり。小舟の中已に腐朽せるものあり、此際余等の舟隊は二十二艘に減せり。余等は無事に、インクウエンの長き激湍を越つてアヒンバの方に向ひ、共に歩を急ぎてマヘンクの湖に達せり。此處は余等が千八百八十七年八月に於て、マヘンクの卒むたる陸行隊と其道を失し、大に悲愴の境遇に迫りし所なり。

翌日は滞在し、強固なる一隊をしてイナリに向つて集積を爲さしむ。午後に至り彼等は数頭の山羊并に糶と共に數日分に渉るべき世蕪實を得て來り、茲に始めて余等はスープを作り、又肉類をバナルヤよりの病人に分ち與ふるとを得たり。隊中に樹木の報告を爲すものあり、マンニエマ人中に、婦人の死骸に對してナイフを振ひ、其肉を得んとせしものありとの事を聞きければ、余は早速マンニエマの頭領を呼んで此事を糾せしに、彼れは全く無實の說なるとを確めたり。若しマンニエマ人にして果して此事を見しものとするれば、其結果は實に一片の風説に止まらずして將に非常なる紛擾を醸すに至るべし、其然らざる所以のものは一時の浮説に相違なかるべし。

九月三十日に於て、余等はアアガドの瀧を上りて其上部に合營し、此處に野生の密柑あるとを發見せり。他に又例の甘熟せる赤色の菓物あるを認めしが、固より萬止むを得ざるの外は是等を食せんとするの勇氣なきなり。

土人の一婦人路上に於て一子を擧げ、突然側立つて之を墮め居るを見る。マンニエマ人は之を見て珍らしきと思ひ、一同彼處に馳せ行き、已にして一人は曰く「邪魔だから河の中へ投げて仕舞へ」併し子供は生きて居るのだらふ。他の一人は問へり。「生きて居るには相違ないが、白子だ、黒人の子に白子は、災厄の基だ。」

無智の徒は知らずして幾多の悪事を行ふもの、彼等は斯くして殺人の罪を行ふことを知らざるものなり。毫も其心に怪しむ所なく、以て此種妙なる生活の斷片を滅却せんと欲するものなり。嗚呼無智の罪又決して許すべからず。

當時余等の部下には潰瘍を患ふるもの多し。ソーアと呼ばれたる十三歳許の少年は皆て少佐パーチアットの使僕なりしものなるが、足に受けたる傷よりして四寸程骨を見はすに至り、憐むべき有様と爲れり。更に天然痘に苦しむもの十五人あり、彼等は毫も傳染病を豫防するの意なく、マンニエマ人等は自由に出隊を共にせしが、幸に種痘の結果に由り、之れに感染するものは非らざりし。

マホコの對岸なるアベサーに到着する時に於て、或るマンニエマ人の妻は、野菜を集めんが爲に野に行きしに、忽ち土人の伏兵に出會ひ、弓矢の間に圍まれたり。七本の矢は彼の女の味を蔽ふ。其叫聲を聞き附けて人衆等は直に馳せ行きしが、連れ來りてマンニエマを注入するの間に、彼の女は其味を轉ばし、腕を延ばして尖の味を抱き、最も憐れなる有様を呈して遂に一長息の下に死せり。誰れか言ふ「亞弗利加土人には愛情なし」と。是れ盲目者流の言のみ。此場の有様を見て誰れか同情の感を見はさざるものぞ。

他にマンニエマの一婦人あり、合營營の爲に顔面一體に彫れ上り、其氣鼻を打つて相接する能はざる

福なりしも、彼の女の火は心を盡して月尙ほ日の如くに、之れを介抱するとを忘たざりき。實に余等の一行は死に就くもの多し、其危険なるは取場とりばたに在るよりも危険にして、何時何處に上人等の毒矢に罹るやを知るべからず。彼等は愚愼ぐしんの民なり、思慮あるに非らず、併し愛情あいじやうの一點に於ては決して他に比して劣るべきに非らず、彼等の心は之れが爲に奮ひ、彼等の道は之れが爲に明なるなり。

十月二日に於て、余等はイチニリとウツガイユ合流の下なる小瀑布を涉りし時、忽ち焔に暴風に會せり。常には波なき水而も恰も巨浪きよなみを轉ずるが如くに、岸より岸に向つて河水を水崖より轉動てんどうし來り、泥土は流水を濁として激湍げきたんの流岸を打つに別ならず。余等の小舟は彼處此處に急激げきげき漂蕩してす々に打ち碎かるゝかと怪まるゝばかり、時に兩岸の森林は其數限りなき枝と枝との闘争いくさを爲し、叫聲きよこゑの聲は暴風に和して殊にすさまじく、ヤンヤより始めて來りたる人衆は何れも大に其胸を冷せしものゝ如くなりし。須臾にして天地は一掃せり、河水は平常に伏して激湍げきたん掃すべく、山林は遂に静寂せいじやくを告げて恰も化石かたしせしが如く、互に前刻の亂暴らんぼうを忘れて宇宙の平和を樂しむに似たり。

三日に於て湍たぎ在の川、余等は博物上の、些末なる品物を收めたるウエームソンの箱を開けり。其物、日記にちぎ其他保存ほぞんするに足るべき品物は盡く封印ふういんを施して歐羅巴おろばに送るととし、其他不必要の品物は其れこゝろ處分ちぶんし終れり。

余等は從來の旅行に於て、ハンボの瀧よりイブウイの川、河の南岸、二百哩の荒野を通じて非常に苦しみければ、今回は之れを避けて他地道を見出さんと欲し、ホター氏をして二十八の斥候せつこうを率ゐ、ウツガイユを過ぎて一の上陸所を見せしめんとを圖れり。ホター氏は歸來きらい歸りに、斥候等が道を渉るの敏捷びんせつなるを稱し、其凡ての障害物しょうがいぶつを軽く飛び越へて進むと恰も鷹の奔るが如く、千歩の間に於て彼れは常に五百歩を彼れたりと言へり。北岸に於ける上陸所より一哩半許の所に於て、彼れは數なる芭蕉林はしやうりんを以て圍める一村落いんらくを見せしとを報ず。此村は則ちベヒカイなり、余等は一同之れに向て進み、其れより六十哩許の哩程りりやうを北東の方に馳せ、而してアルバルト湖に對して直行徑ちゆくじやうを見出さんとを窺めり。

四日、一同を對岸たいがんなるベヒカイの上陸所に渡せし時、余はローゲ人が、其數十二許激しく天然痘の爲に苦しむに際し、側らには又二十四五の同種どうしゆ、近く之れに接して相談あひだんするを見る。余は一見直に自ら其歩の退くを覺えざりし。世に無知無識むちむしなるべきはなし、吾大膽なるはなし。彼等は凡ての病を以て自然に歸す、故に其之れに罹ると罹からざるとは自然にして、全く人力の如何ともする能はざるものと信ずるなり。併し斯くの如きとは唯に彼等の間にのみ存するに非らず、余等も亦時として不注意ふざいよりして非常の危害きがいを招くとあり。若し余にして意外いがいの事に驚るとせば、一時全く注意ちやういを欠きし

の時か、或は思慮を一方に注いで一方を顧みざるの時なるべし。世の闇黒なるに對して注意の届く所果して幾時ぞ、思ひ思へば余等も亦無知の中に彷徨するの一動物たるに過ぎざるなり。

十月五日の日記の中に、余は亞弗利加の悪氣に關して左の記事を爲せり。

余等今阿此森林間を通じて旅行するに當り、皆てマ・ン井にスタンレー、ツールの間なる平野を通行せし時に比して、熱病に罹るとは至て少なかりし。

併し林間の間地に滞在すると久しきに渡れば、余等は尙ほ未だ全く悪氣よりして安全なるものに非ることを知るべし。唯四方に草木の生ひ茂りたる所に於ては、假令之れに感染するともあるも、常に斬草にして、時々キョイナを用ゆれば全く之れを避くるとを得。

カバリ井にウンドヌマの高原に在ては、ヤムンソン。パークの兩氏井に余等も引き續きて熱病に罹れり。此地は海面を抜くと四千五百尺の高さに在るなり。

是れよりナイアンザの平原に下ると二千五百尺の所に於て、余等は再び之れが爲に苦めり。

海面と殆ど平均線に在るバナ、ポイントに於ても、熱病の絶へず流行するを見る。

是れより八十尺の高所に在るボ・に於ては、更に其流行の激烈なるものあり。

ビ・はボマよりも高きと二百五十尺の所に在り、近邊に沼澤あるに非るも、熱病の流行は尤も激しき

所なり。

スタンレー、ツールは海面を抜くと二千二百尺の所に位するものなるが、此地の熱病は至て危きなり。

風を後に受けてコンゴ河を上る時には、余等熱病に罹ると少し。

併し風に向つて上部コンゴを下る時は、常に病人を出すとの多きを見る。

アルウィエ河を上る時も之れと同一にして、此間余等は熱病の事を忘るゝに至るも、舟に山つて再び之れを下り來り、以て海面よりの風に對する時には、余等常に熱病預防法を講ずるの必要に會す。

之れに依て見るに、亞弗利加に於ては、海面と平均點より五十尺の高所に至る迄、全く熱病の憂なき所は非らず。湖水を去ると四十哩の所に於ても之を免るゝとを得ず、又河水の流るゝ所は千哩の遠に至るに當り悪氣を清き、到る所に之れを感染せしむるを以て、巨大なる林木の間、繁茂する芭蕉林の中、或は四方に障柵を爲るべきものある家に非れば、到底之れを免るゝと能はず。斯くの如き地に於ても尙ほ其地より發出する所の悪氣あれども、是れは甚しく人身を害するに及ばず。平原の地に在ては如何なる小屋も又天幕も、此悪氣を助ぐに十分ならず、常に戸よりして、入口よりして、悪氣は自由に入り來り、以て居住者を遊するに至る。

斯くて余等は凡て此海而よりの風を防ぐを得るの所は又熱病を避け得べきことを知れり。

エモン、パンヤは此事に關して命に告ぐるに、彼れは到る所に蚊帳を用海し、此中に臥するに、夜間悪氣に感染するとなき旨を以てせり。

左すれば呼吸器若しくは顔蓋の類を携へて旅行する時は能く此平原の地に於て悪氣を避くるを得べきか。

余等は此日四十人宛の人衆を以て組織したる三隊を三方の路に向て派出し、パヒョイよりして余等の進むべき道を見出さしむ。第一隊は忽ちにしてウツガイを境する林叢の邊に山でしに、此邊に引き退きたるパヒョイ土人の襲撃に遭ふて引き返へし、第二隊は北東の方に涉れる道に依て歩みしに、同じく三箇の大なる村より山で來りたる土兵の大軍に會して進む能はず。人衆の一人は毒矢の爲に頭部に負傷せり。第三隊も又遂に途なき林叢の邊に出で、人々手を分つて諸所に其歩を試みしに、何れも皆芭蕉林に至りて終り、此極彼等も土人の襲撃に遭ふて歸れり。依て余等は再び河を南岸に涉り、更に上部に於て道の搜索を爲すに決す、蓋し彼の如き道に依り、再び林間にトンネルを造つて進むは、往々時日を費すの恐あるを以てなり。

十日に於て遠征隊はヒボ、アロードに達す。此處に余等は小さな羽虫の大群、一面に河を蔽ひ、水

而よりして林木の最高梢百八十尺の高さに涉つて厚き葉を破きしが如きの狀を呈するを見る。余等は之に近かざる前には霧ならんと思ひしが、左にてもあらず、恰も白雪の霽く降りしきたるに似たり。其飛行の速力は一時間三ノット許なり。朝來の静閑なる空氣に於ては彼等は一樣に飛行を爲せども、岸よりして多少の風吹き渡る時には忽ち混亂して恰も陣雲の烈風に舞ふに似ならず。余等歩を進むる毎に、此羽虫の大群が河上より移り來るに會し、日光は其幾億無數なる透明の羽に映じて、白日尙ほ螢火に對するを疑はしむ。

此邊一畝は河に沿ふて彼處此處に少許の綠草あるを認め、許多の合油棕櫚、アレンア、アモヤ井に樹根の類を繁茂せしむ。依て思ふに亞弗利加に於ける最古の部落の跡にてもあらんか。余の天幕は之れを枝うちたる一樹の下に繋ぎ、以て日光よりの暑熱を防ぎしが、河上より反射し來るの熱は、午後三時、陸に於て寒暑計の八十七度を示せり。此暑氣は遂に暴風雨を招き來り、電光閃々、百雷空を震して、天河を決せしが如きの觀を呈す。

パフェドの瀧に於て一人の婦人余等の手に入りしもの、ウツガイユ河の他の岸に住む所の種屬はメツにして、其左岸のものはバマンダなるを告げたり。

アハイヤアに近く、一人の土人は、一大巨木の枝に懸かれる莖草の葉の中に隠れ居たりしが、突然飛

び出で、マンユエマ人の一女子を捕へ、短刀を振つて胸より背に刺し通したり。已にして彼れは此刀を己れの頭上にかざし「侵入者は死すべし」と言はんばかりの様子を以て恐るべき叫びを挙げたり。次の命懸なるアインベリの上陸所に於て、曾て彼の少佐に仕へたる少年ソーアは命等が小舟を流の上に引き揚ぐるの間に、人の肩に依て少許の距離を歩みしが、忽ち途上に於て死せり。彼れは滑場の爲に已に腰骨の關節を失ひ、自ら動くも能はず、命等がベンガングの島を出でしより、彼れは常に人の手を假りて療養を爲せしものなるが、如何にせん、運動足らず、又絶へず舟中に在つて日光に照され、風雨にさらされしを以て次第に其の食慾を失ふに至れり。彼れの身味は元々至て健全なりしが故に、始めの内は左程の事はあらずと思ひしも、命等の購品はベンガクに在つて、故には已に欠乏を告げれば又之を治療するの道なかりしなり。

十月十八日、命等はアミリの湖に達せしに、一人のサンワーバル人は天然痘に罹りし徴候を呈せり。命等がバンドの部隊に到着してより以來、日に十人乃至二十人の患者を出せしも、サンワーバル人の間には至て少なかりし。凡て種痘を命じたる六百二十人のサンワーバル人中、或るものは之を拒みて命に従はずしが、今に至て彼等は深く其効験の著しきを感じたるもの、如し。マンユエマ人、モア人并に土人等の間に於ては此病久しき以前より感威を遂ふし、之が爲に岩を負ふて河に葬られしも

の甚だ少なからず。併し種痘を爲せしものは何れも皆此災を免れたり。此土地に在つては死者を路傍に葬ると能はず、何となれば食人種等は直に之を殺いて好下物と爲すに至るべきを以てなり。

サンワーバル頭領の一人は自ら船頭と爲りて舟を運るの間激しく黄蜂の刺す所と爲り、心に再び此の能はずと思ひしにや、遺言を爲すべき旨を告げ、同じく部下に在る所の彼の兄弟を以て遺産相続の事に定めたり。余は彼れの意を慰めんが爲に之を承認し、且つ同時に皮膚アムユエマ十クレーンを與へしに、翌日に至り彼れは全く回復を告げ、余の前に來り謝して曰く「白人の術は奇妙です、此分では死ぬものより外は何でも治療が出来ましたらう」。

漸くにしてアミリの湖を越え終りし時に、又復た災厄は命等を見舞へり。後隊よりの不熟練にして而も愚鈍なるもの共數人、命令も受けず、如船も載かずして芭蕉林に侵入し、敵地に於て恰も見處に等しき所爲を爲し居りしに、忽ち土人等の圍む所と爲り、三人は負傷し、後の二人——一人は心臓を刺み、一人は平素頑固なるものなりしが、共に何れか其身を隠すに至れり。

九月一日より此日に至て、命等は十三のサンワーバル人を失へり、中九人は殺され、一人は自殺し、一人滑場の爲に死し、二人は失踪せしなり。マンユエマ人衆に就ては十六人を失ひモア人間には十八人を失ふ。則ち四十九日の間に四十四人の人を失ひしなり。

アメリの池よりアパタコ迄は七日間の旅行程なるが、此間は凡て住民なきの荒野にして全く食物を得るに所なきなり。已にアパタコに達すれば、其れよりは余の考へたる道に従ひ、二日間の旅程に依つて食物を得るの所に至るべきを思へり。前隊に於けるサンワール人等は已に十分林間の旅行に向つて細熟なるを以て敢て此事を行ふに難からざるべし。併し若し余等にしてアパタコに於て食物を得る能はざる時は、其れこそ一大難事たるべし、アパタコを去る一日程の所迄は余等は舟を用ひて豫備の糧食等運ぶを得るを以て、成るべく多くの準備を爲すを可とす。而して余等は嚴重なる制裁を設け、彼等をして堅く命令指揮の下に服従せしむるの方針を取らざるべからず、否らざれば再び飢饉の慘状を呈するに至るべし。

廿日拂曉、余等は二百六十の銃手を派出し、アメリの池より五哩許の内地に入つて蘆葦質の鹽田を爲さしむ。山嶽に際し余は彼等に告ぐるにアパタコ迄の距離を以てし、此間の糧食に十分ならしめんが爲に、各人六十磅乃至七十磅の蘆葦質を得、而して少なくとも十日間の糧食に宛らしめんと欲せり。併し彼等の中には或は十五日間の糧食を運ぶものもあるべきも、或は之れが重きを厭ふて僅かに四五日分のものに止め、遂に各其報果を収むるに至るべきを思へり。

二十一日の午後に至り、彼等は其目的を全うして歸り来れり。此分を以てすれば彼等にして糧食を徒

費するとなくんば能く安全に此荒野を渡るを得べきなり。

第廿二章 ガドー船着に到着す。

再びウガローの屯營に歸す。○イナマヤ河を渡る。○余等アハヤの耕作場に達す。○ガトー兵隊人の丈けを計る。○婦人の腰止非に衣服の平綴りな以て會話す。○婦人の女。○森林間に於ける餘其他の歌。○アハヤの田地。○余等、散れたる衣服。○イヒル河。○食物の欠乏。○アハヤの食物。○ウラツグ種食を獲集す。○防衛糧食の欠乏。○余等がロイヤ、ロイヤの村に對する。○此に死するものあり。○森林、旅行に備へ加ふ。○アハヤの建物の小橋。○婦人非に種類の種。○余等カローの陣を通ぐ。○旅行隊の失敗。○ソーマヤ人の最後の生存者。○強雨降る。○インマヤに於ける種食の種見。○余等イナマヤ河に渡り。○余等の會話に於ける遠年。○余の使領サマヤ森林に達す。○余等ウラツグ種食の行く所を知らず。○余の使領サマヤ歸り來る。○肌積の會話。○余等失物者を探索し、林間に於て之に遺す。○イヒル河。○大でガトー船着に對す。

遠征隊は十月二十三日に於てウガローの古營跡に達し、其が荒れ果てたる小屋の中に竊ねたり。曾て旅隊の酋長が起臥したる大建築の跡には一間に稻の生長せるを見しが、其實は已に鳥の爲に踏く踏み去られたり。一百餘人の人衆は今尚ほ存在する所の廣間の中に快く眠るを得、諸器種等を使用に堪えたるものありければ、余等は一週間位茲に滞在するも可ならんと思へり。併し糧食の思あり、少許の快樂の爲に飢饉を買ふべきに非らず。此地や恰も荒野中の中央に位し、急ぎ此間を旅行し去るに非れば悔ゆるとも及ばざるの災厄に罹らざるを得ず。

翌日余等はパンダに達す。舟行隊はウガローの死卒より襲撃を受け、マンニエマ人は矢を避けんが爲に河の中に飛び入りしが、後より來りたるサンワール人等は之を見て直に岸上に飛び上り、側面より敵を殲滅せしかば、幸にして好んで助けなきの地位に立らるマンニエマ人等を救ふことを得たり。

イナマヤ河は濁水なり、雨は日々非常の量を以て降り來るを以てなり。イナマヤに流れ入る所の川、小川の如きも其水甚だ高くして容易に涉るを得ず、旅行隊は爲に首ふべからざる困難を嘗めたり。彼等は腰を没する程の少流を涉るや香や、須臾にして又他の流水、以前よりも一層深きものを涉らざるを得ず。彼等は絶へず衣服をしぼり、絶へず困難の叫びを爲す。更に深き河に會すれば最早歩いて涉るべからず、依て一列に舟を連ね、浮橋を造つて之を渡らしむ。側に在つて彼等が圓々之を渡るの状を見るに奇觀少なからず、前方の一人泥足を以て之れを歩めば、舟上には附かなる跡を印して後人をなやまし、一人は衣襟を水上に委して忘然此上を歩し、忽ち滑べりて舟中に倒るゝあり、又河上に墜つるあり、共に見るものゝ一變を博するに足る。此日旅行隊は三十二の流水を涉れり。

二十五日に於て余等はレンダ河の口に對する一會營に移れり。余等は相當の進歩を爲せしが、夜に入つて余は試に左の書を認めたり。是れ以て人衆の心を慰し、併せて余の心を遣り、以て一時の樂に供せ

しものに過ぎず。

「余は真に余等が森林旅行の途からずして將に終りを告げんとするを謝するものなり。此處より草原に達するの距離は僅に二百六十哩に過ぎずして而して余等途に——從來の旅行よりも一層速に此距離を縮少するを得べし。此間余等は希望を以て樂と爲すべし。余は此處々たる降雨に對して敢て嘆息すると爲さず、草原に於ける廣大なる田野は雨後の爲りに其の收穫を益するを以てなり。余は又敢て途上の泥濘を厭はず、余等は假令昨日に於て三十二の流れを涉り、非常に余等の足を疲勞せしめしものなりと雖も、之れが爲に他に多少の利益を得るものあるを以てなり。余等は之れが爲に、赤色の股鞆を避くるを得、晝夜とも全く無事を樂しむに至るべし。余等が最後に、足の汚泥を拭ふて再び頭上の杖葉より露のまた、れ來るを免るゝに及んでや、又一物の敢て平和の邊を擧げするものあるなし。余等は敢て危殆なる小蜂の襲來を感せず、無數なる小蜂の四肢に刺さるを忌み、貴鮮の針、百足の毒、群蝶の幼虫、蜘蛛の危害、道からずして皆是れ昔日の一語柄と變じ去るべし。尙ほ少しの忍堪は能く汝等を樂園に導くべし。余等は此林間に在つて八月十七日以来、唯四頭の山羊を獲しのみ。斯生を困難の間に繋ぐものは、僅に燒きたる芭蕉實あるのみ。依て以て余等は幸ふじて精神を身軀に繋ぎ止むるを得たり。假令余等は今健全強壯なりと稱むべからずと雖も、敢て之れを嘆息することを

要せず、余等にして一度彼の地に達せば、牛肉、小牛肉、羊肉、山羊肉、唯是れ欲する所のまゝ他の甘蔗、豆類、并に粟粉は牛乳と共に粥を作るに適し、而して結構なる胡椒の油は以て凡ての料理を爲すに足る。余等は又再び土人等の襲撃に對して弓と矢と及槍とを恐るゝを要せず、一歩を進むる毎に彼等が樹の蔭若しくは藪の中より突出すべきかを氣遣ふを要せず、食物を得んが爲に敢地に生命を賭するを要せず、安心して以て土人等と親密の交際を爲し、間ある毎には相共に唱歌舞蹈、能く此日を樂しむに至るべきなり。

余等は二十六日に於てウメノの合營に達するを得しが、此處には唯二房の小なる芭蕉實を獲見せしのみ。時に旋風起り、静かなる森林は變じて惡魔の棲む所と爲り、其齡、幾千歳に渡るべき古來の大木を其根根より震盪し、同時に一時に黒色を潮したるイチエリの水は相撞突し相揉み、相揉み、相叫喚し、泡を吐き霧を飛ばし、天地は一方ならざる亂雜を極めたり。

翌日余等は一大瀑布の下に漕ぎ寄せ、荷物を卸して舟を林藪の間に委し、半時間許に漕ぎ出せしの後、直に一同を促かし、荷物を肩にして内地五哩許の所に進めり。余等は是に於て全くイチエリの航行を終へたり。

二十八日に於て余等は三時間の進行の後、アマアコAmakoの耕作場に達せり、恰も人衆の多数は殆ど飢饉に

迫りし時なりしなり。彼等は飢えたる狐が餌をあさるの勢を以て一同芭蕉林の中に飛び入り、暫ばし之を取つて之を口にするの外又餘念なかりし。此處に留ると二日間、余等は更に十分糧食の準備を爲せり。

余等がアマノコに遠するや、間もなく二人の矮人を連れ来るものあり。彼等は男子と女子なるが、其大妻なるや否やは知る能はず。男子は若くして其年二十二なるべし。ホサー氏は起つて彼れが身尺を計り、余は側にて之れを記録せり。

身の丈は四尺にして頭の高は二尺と四分の一、額より頭の上端迄二尺四寸と四分の一、胸の高、二尺五寸と二分の一、腹の高、二尺七寸と四分の三、背の高、二尺二寸と二分の一、手足の周囲、四寸と四分の一、左腕の周囲、七寸と二分の一、足首の周囲、七寸、腕の周囲七寸と四分の三、食指の長さ、二寸、右掌の長さ、四寸、足掌の長さ、六寸と四分の一、腕の長さ、二尺二寸、背の長さ、一尺八寸と二分の一、腕より指の長さ迄、一尺九寸と四分の三。

余等は是れまで矮人の矮人を見るとき多かりしも、男子の十分生長せるものを見るは今回を以て始めとす。彼れの色は銅色にして諸所に半インチ許の毛皮を附着するを見る。頭上には僧侶風の帽子を戴き、羽毛を以て之を飾れり、是れ彼れが何處よりかもち受けしものなるか或ひは盗み取りしものなるべし。

し。彼れは又廣き木の皮を以て襟袖を蓋ふ、其手は至て汚穢にして、殊に其洗ひしとなき彼れの容貌は一同余等の注意を牽けり。彼れは芭蕉林に於て芭蕉の實を取り居りしものなり。

ロンドンに於ける肥者諸家等は恐らく一人も、余が此聖弗利加森林の中央に於て、矮人種に對する胸間の感情を推知すると能はざるべし。彼れは余に向つてはセイアスのメンノムエームよりも尙ほ一層神聖なるものなり。世界の人類中原人の一なる、古昔の風情を見はせる彼れの一小味は、實に最古の時代よりして世に存在を続けしもの、同一種族のイスマールは人間の喧嘩を厭ふて、家庭の快樂を擲ち、無窮に寂寞を尋ねて木實草根に其生を了するに至りしなり。恰も二千六百年の昔の事なり、彼れの祖先は五人のナサウニアの探検者を囚にして、彼等をナイガラの岸に於ける彼等の村に置き、以て人類等の玩弄に供せしは。更に彼等は四千年の古代に遡りて、夙にビクメー(矮人)として世に知られ、而して彼等と大體との間に起りたる有名なる戰爭は、詩人の囂中に入りて今尙ほ余等の口にする所に非らずや。紀元前五百年の頃なるヘクターアム以來、何れの地圖に於ても彼等の部落は其地位を失ふとなく、依然として月山地方に存在するを疑す。彼のメスがサヤコの子孫をゴツレンの外に置きし時に、彼等は開黒聖弗利加唯一の主人として廣大なる土地を主宰し、埃及、アソリアのペルシヤ、ギリヤス并にローマ等は比較的少許の時に榮えて已に滅亡を告げし今日に當り、彼等矮人

種は依然として尙ほ茲に在るなり。而して此種人類は過去幾百年の間、遠近を跋渉し、ナイガールの川より引き續き許多の移住民を送りて此地に來り、森林間の未だ皆て人跡なき所に向つて、彼等特有の小風を打ち逃ぐるに至る。彼等の同種族は、クイブ、コロニーに於てはマツレ、マンとして知られ、ルワンクの谷に於てはクトワと名づけられ、モンに於ては、マカ、マボアに於てはバリア、イロエルの谷に於てはソソアテ、而してルケー、モンタスの隙の下に、彼等はバトワと稱せらる。

モリア人は長大の身幹を有し、ソーダン人も丈け高く、サンサーバル人は更に丈け高し。今此種人をして彼等と共に一列に立たしむる時は、余等に向て巔嶺の觀を最するのみならず、更に巔嶺なるは此種人が彼等の長大なるを見て巔嶺の思を爲すの様に於て其觀實に巔嶺なるものなり。彼れの胸中驚きを以て満たせり、彼れは今彼れの運命に就て強く危險を感ずる所あり。彼れは獨り之れが解釋に習し、時に頭を擧げて他の人衆の顔を睨み、而して其喜笑の色を帯ぶるを見て、彼れも暫はし其心を安んぜしものゝ如し。彼れは是等巨大の魔物に就て其考慮を運らせり、何處より來り、何處に行かんと欲するにや、彼等は遂に我れを殺さんとするものなるべきか。如何にして。生きながら焼かるゝに照るべきか、或は直に沸騰せる大釜の中に投入せらるべきか。彼れは心に思へり、顔色淡色を漸し、獨り首傾して心に願へり、願くは斯くの如き運命を避くるを得べきとを。彼れは今何事も余等の命に掛

はんとを決せしと、猶ほ二千六百年の昔に於て、彼れの祖先が古エグレマンの村に在て五人の囚徒に對せし時に對ならず。余等は靜に彼れを導きて余等の側に坐せしめ、輕く彼れの背部を打つて之を慰めながら數個の香蕉實を取つて彼れに與ふ、彼れは喜び笑つて之を喰へり。彼れは如何にも狡猾の所あり、又如何にも敏捷の性を有す。彼れは話を爲すに至て雄辯にして舉動さへも之れに伴ひ、其言ふ所は音節に通せざる余等をして尙ほ能く其意を了解することを得せしめたり。

「余等が次に食物を得るの村に達するには何日を要すんや。」
 彼れは彼れの右手を以て左の左手に横へ、二日以上の旅行を要すと言へり。

「其方向は。」
 彼れは東方を指せり。

「其れよりイヒル迄は幾許哩なるや。」
 彼れは「オー」と叫びながら、右の手を左の腕の上に横へ、以前の距離に倍するを示して四日程なりと云へり。

「北方には食物を見出すの所なかるべきや。」
 彼れは頷をふれり。

「西方若しくは北西の方には如何」

彼れは同じく頭を振り、彼れの手を以て恰も積み上げたる沙を掻き散らすが如きの状を示せり。
「何故に此邊には食物なきにや」

彼れは彼れの兩手を指し延べて鉄砲の形を作り「ド、ド、ド」と叫べり。
彼れの背に違はザンノニエマ人等は諸物を盡く打破し去りしなり。
「此近所に尙ほ其「ド、ド、ド」を為すものありや」

彼れは余等の顔を見つめて笑ひながら「それは君たちが知つて居る筈、我れに向つて聴くには及ばざるべし」と、恰もロンドンなる滑稽家の状を以て答へたり。

「汝は余等の爲に、食物を見出し得る所の次の村に案内するを得んや」

彼れは之れに對し、彼れが満月形の腹を撫して首領せり「我れは君等が十分之を得べき所に案内すべし」彼れは又彼れの指を食指の先きに附して「此處の遺棄の實は斯くの如く小なれども、彼處に至れば、彼れは又彼れの腰を兩手にてつかみながら「斯くの如きの大きなり」と首へり。

「其れは結構の所、早く彼處に案内せよ」と人衆は叫べり。是れより彼の矮人は頗る敏活の舉動をなし他の人々の甘心を憐れんと勉めたり。余は彼れの首の果して眞なるやを信ぜざりしも、人衆等は之れを

聴きて大に喜び、彼れの周圍に來りて丈け高き頭を屈し、彼れと接吻を爲すの状を裝ふものさへありき。余等が目には彼れは天神の郷より來りしものなるかの如く、實に可憐可愛の情を籠ふなり。

凡て此間、彼れと共に來りたる藍色の矮婦人は又彼れと同じく其感情を見はすに敏なるものありし。彼の女の眼は彼れが寛待せらるゝの有様を見て喜を以て輝き、彼の女の顔は能く其が機敏なる精神を代表し得て、一舉一動電光の速力を以て其容貌を貫通せり。彼の女は最初に於ては彼れと同じく危険の思を爲せしもの如く、從つて之を疑ひ、彼れを窺み、果ては好奇の心を以て余等の何物なるかを知らんと欲し、誤つて余等が彼等に危害を加ふるに至らざるべきやを恐れ、馴りに彼れと共に如何なる運命に遭着すべきやを氣遣へり。彼の女はサンクスギング祭の七面鳥に非ざれば、クリッサムスの鷓鴣の如くに肥満し、其胸部は古き象牙の光澤を以て輝き、而して其双手を前に垂れて悠然として余等に對するの相は、其身の裸軀を以てして凡て彫刻家の好材料と爲すに足る。

疑もなく彼等は男子と女子となり。彼れに於てはアダムに似たるの威嚴を存し、彼の女に於て小なるイノアの婦態を供ふ。今や彼等の精神は全く歐力歐心の爲に蔽はるゝと雖ども、其内部に於ては一片靈妙の感能を具して、他の聲聲に山つて大に其光を發揮するに至るの質あるや疑なし。當時は彼等は是れアパチヨの荒蕪たるイアンに住むに適せるもの、彼等の快樂は又自ら此中に存するなるべし。

新に乾かしたる鹿蕨の供給を得、矮人等の案内に由て、余等はアマツコの山村を山登し、方向を東北東に取つて正午にウツゴキの清流を渡り、而して午後三時に至りイペユの水邊に合營を構えたり。余等は途上矮人に關する種々の形跡を發見せり、或は異種なる彼等の合營に就て、或は彼等が其實を喰ひし後擲げ棄てたるマモマの赤き皮に由て、或は胡桃の殻に就て、或は彼等が林間旅行の際に用ゆるマツキ樹の小枝に由て、路傍に散置せる月の係蹄に就て、或は彼處此處の獸徑に於て遺りたる陷窠に由て余等は彼等が此邊に徘徊生存するをを知れり。土地は從來に比して更に幽邃の境に迫り。余等は荒蕨たる圓形谷の淵を繞つて歩を進むるに、生ひ茂りたる枝葉は屋上に星を結し如く、一眸の綠葉に對して諸所に或は赤色の葉を點じ、或は白色の花を開き、恰も自然の迷途に向つて彩色を施したるに類ならず。余等は時に歩を止めて下よりして此村々たる枝葉を窺むに、層々又層々何れの所に至て盛くるものなるやを知らず、恰も軟かなるサクソンの蒲團を積み重ねて彼の天神の座に供したるものなるかの如くに思はる。此森林の主人公を以て自ら任ずる幾多の猿猴は絶へず此間に往來して一族の無事安寧を對衛するもの如く、時には余等の頭上一百尺の所に在つて突然枝より枝に飛び移り、其將に落ちなんとして俄かに長き尾に依て其身を掛くるの様、ロンドンンの輕業師に見せたまものなり。彼等は實に機敏の舉動を爲す。其眸をひねつて空間數尺の距離を涉り、對面の枝を手にして余

等の一行を下照し、告別を爲すが如きの狀を曉ふて忽ち叢葉の中に其身を没すると凡て狡猾の技倆を欠く所なし。アイリス(曲に似たる鳥)は彼等の友を呼んで奇妙なる動物の一族、今此處を通行し居るとを告げ、ウツゴキは群り來つて銳どき聲を放つて不意の侵入者を叱責するもの如く、フワンター、イーダー、サンバード、藍色の百舌、白色の鷲等又對る所に其羽影を止め、或は枝葉の淵を渡るあり、或は靜かなる古木に倚つて閑に眼を俯すものあり。此間枝葉の香あり、花卉の香あり、鹿、猪、鹿等の汚物と共に一種奇怪の香を混成して余等の鼻を打ち、而して余等は絶へず流水懸河の音を耳にし、又其兩岸に沿ふてフレモニア、アマム並にアママ等の繁榮生息を遂ぐるを見る。

翌日余等は引き續きて、殆ど限りなき懸崖の下に、道なきの道を通じて進み、而して十二月の一日に至り、一同アンタキの閑地に田づるとを得、此處に余等の身心を慰諭するに足るべき静まの鹿蕨實を發見せり。鹿蕨實は甚だ大ならず、併し正に成熟し居りたり。一時間を経る中に、余等は彼の木の網を用意し來り、葉實を此上に載せて遠火に之を乾かせり。毎月一口と二口は、各人の運び得べき丈け、十分の糧食を準備すべき旨を傳ふ。余等は今北緯一度十六分二分の一の所に在り。ヤロンガ、ロソカの屯營は一度六分にしてホドー嶺驛は一度二十分に當るを以て、余等の行程は誤らざるなり。二日に於て一部の斥候隊、東方に涉る所の路を搜索するに際し、二人の矮人を捕へしに、一人は是れ

より北方に當て食物あるべき一大村落を知ると言ひ、又他の一人は是れより東北東の方四日程の旅を以てアングダリに遠すべく、此所には許多の食物あつて、アングダの如き、之に比すれば唯一貧村たるに過ぎずと傳げたり。

アングダを出で、一小崗を過ぐるや、間もなく余等は一大廢村の閑地に出でたり。住民が此處を逃れ去りしより恐く一年の時日を経過せるものならん。彼等の部落は火の爲に焼かれ、芭蕉の林は已に他の雜草雜木の藪ふ所と爲りて、象は雜樹に此上を踏み散らし、其跡にはアレンニア等の時を得顔に繁茂せるを見る。余等は已に雜木が其枝と枝とを伸ばして互に相抱合し、少許の間隙だになき迄に其葉を繁茂せしめしを以て見る所、數尺の厚きを以て地上を蔽へる自然のカーペットに似たり。之れを通じて余等は歩を進りざるを得ず、人衆は斧を振り、鶴野を振り、一々之れを伐採して而して先導と爲す。土人の婦人の如きも其道を失せしに黙けり、何人も驚かざるを得ず。余等は恰も林間に向つてトンネルを作るもの、此トンネルに従つて一同歩行を爲し、殆ど落殺せらるゝに足るべきハット、ハウスを通じて十時間の忍堪を爲し、漸く一小流の邊に來りて合營せり。余等は著しく疲勞を感ぜり、再び此歩を續くる能はざるに至れり、漸くして其旅行せし處は僅に五哩許に過ぎず。

四日の朝に於て余等は再びトンネル開通の事業を始め、例の通り斧を振り、刀を振り、或は何知し、

或は綱を渡り、時には巨木の上に立ちて前途の方向を按し、時には倒木の下をくぐりて蜘蛛網と戦ふ。疲勞に飢餓を加へたる一行を瀕死して以て限りなきの荒林を涉る、決して容易の業に非らず此枝照くして折る能はず、彼の變太くして除く能はず、右に開き、左に折れ、會ま流水の邊に來れば、或は小石を取りて斧を磨ぐあり、或は急ぎ一掬の水を呑んで暫はしの空腹を凌ぐあり、余等は止つて息を暇なし、如何にもして進まざるべからず。行け行け、此處ぞ汝等が氣力と手腕との試みし所なり、口を開きて食物を喰ふは何人も爲し得べし、何人も爲し難き所に於て始めて汝等の功勞を積むを得るものに非らずや。突け、進め、進め、余等は世の最愚者と爲りて斯くの如きの地に立往生を爲すべからず。彼の道か、此道か、中央を直截に、氣を附け、誤つて危難に罹る勿れ、斯くの如き掛牌の下に自他の心を鼓舞して余等は十六時間の勞働を続け、漸くにして更に巨大の林木を逃ぬるの邊に出でたり。

此進行の間余の衣服は殆ど寸裂の狀を呈せり。余のシャツ、フット等は諸所に房を齧れて恰も亞弗利加土人風の裝飾を加へたるに似たり。人衆等は笑へり、一人は私かに余の有様を評して係蹄の齒を通じて引き出したる鼠の如くなりと言へり、實に其れに相違なかりしならん。併し余等は尙ほ閑寂に暇めらず、共に少許の芭蕉實を食して飯飯を濟まし、更に旅行を爲して午後三時に至り、イニール河

に半時間行程の所に達せり。

翌日未明に、余等は一同を促して出發し、イロニル河と平行したる急流に従つて歩を進めしが、此邊は一昧に流水激湍を爲すものと見え、到る所に奔放懸河の聲を耳にせり。余等幾多之れに注入する所の小川を涉りしが、常に廣き急流に従ひしの故を以て殊の外に足並早く、午後に至て合營を爲せし時には已に九哩を經過し來りしなり。

此數日の間、後隊よりのザンワール人十三、エミン、パンヤがダナクらの兵卒一人死去せり。マリア人とマンニエマ人に至りては今其數を詳にするに能はず。

六日の夜に於て、八哩を進行し來りしの後、余は人衆の狀態を觀察して、速に糧食を見出し得るに非れば一同其生を保つ能はざるべきと思へり。獨り飢餓を忍ぶ已に難事なり、此上に重荷を負はしめて其空腹を壓す、道は遠くして宿は——或る部分に向ては明ならず、此間若し疫病の起るあらば急に於て強く全隊を滅殺するに至るべし。余等がナイアンザよりの人衆は已に經驗を有せり、此邊若しくは彼の邊に於て必ず食物に耐すべきを知りて之れが準備を爲し、又閉鎖、野菜の類を取つて之を補ふとを爲せども、後隊よりのマニオンク海を受けし人衆、モーア人并にマンニエマ人等は注意を注意と思はず、警戒を警戒とせず、自ら好んで困難の極に迫るなり。

アマニと呼ばれたる一青年頗る衰弱の容態を見はし居ければ、余は彼れに問ふて、彼れが過去二日の間に食せしものを示しめ、左の事柄を知るとを得たり。

彼れ曰く「我れは最初に於ては尙ほ是れより二日間を支持するに足るべき道蕪粉を有せしなり。然るにマンニエマなるもの之れを運び來り、暫ばし之を路傍に委ねて自らは閉鎖の糧食を爲せしに、歸來此糧食の跡を失ひしとを發見せり。彼れは言ふ、マンニエマ人が之を竊みしものならん。依て我等は昨夜合營に達せし後、共に閉鎖を取り來りて粥を造り、漸くにして一時の糊口を爲せり。是れ昨夜の晚餐なり、今朝我等は食するものなし、併し是れより再び閉鎖を集め來らんとするなり」。

「而して明日は何を喰はんと欲するや」。

「明日の事は上帝の意に任す、余は何物をか得べきの希望中に生を繋ぐものなり」。

此青年は僅に十九歳にして六十磅の銃包を運ぶもの、明日も進まざるべからず、明後日も進まざるべからず、而して斯くの如き有難にては日に／＼死に近づくものなると思はざるなり。野蠻人は多くは信を運命に俵きて、自ら進んで之れを取るとを爲さず、有は無を告ぐるの期おれども、無は有を生ずるの期なきを知らず、徒らに運命に向つて、其悲惨なる六尺の身を托せんとを欲するものなり。余等はマンニエマの合營に達せり。ウレンアは彼れが千八百八十七年十一月に於て、マニオン井に於

ルソンの兩氏をイボトに待つの間、糗糧の爲に奔走せし場所等を指示せり。
 六日は滞在の事と爲し、ウレンをして一隊を率ゐて、合營より東、西六哩許のマンダクの閑地に糗糧を爲さしめんとせしに、百餘の人は已に疲勞の極に達して動く能はず、依て余は余が萬一の場合に貯へ置きたる芭蕉粉を取りて一杯宛を彼等に分與し、此粉を食して後に山麓の途に上らしめたり。
 八日に至る迄、殆ど二百の人衆は合營に留りて糗糧隊の歸り来るを待つ。午後に出り来た此帳に接せず、彼等の中殆んど斃れんとするものを生ずるに預りければ、余は更に少許の芭蕉粉を取りて分與せり。

九日に及んで糗糧隊は未だ歸らず。二人は合營に於て死せり。一人は圍の海に因て發病せしものにて、芭蕉粉を受取らんが爲に余の前に來りし時に、其の足並已に限々として身を安ふるに苦しむ様子なりしが、遂に茲に最後を告ぐるに至れり。此有糧をして尙ほ三日間に涉らしめば、余等は疑もなく皆斃死するに至るならん。余等は時々、刻々、分秒を數へて彼等の歸り来るを待てり。

十日の初に預り、余はボデー嶺背の東面に向つて進ぶべき歐洲よりの糧食に就て心附きければ、命を傳へて之を吟味せしに、豈に圍らんや、肉類、茶、コンパニー、牛乳等の餽物四十七筒を紛失せしとを見たり。是れマンエマ入に山で盗み去られしなり。亞弗利加森林中に在つて歐洲よりの糧食は

幾許の價值を生すべきや圍るべからず、余等は何れも珍重の上に珍重せしなり、然るに一二の奴奴の爲に已に此巨額を私せらる、何れも皆其大膽なるにあきるべかりなりし。併し余等は直に糧食を彼等マンエマ入の手より奪ひ、ウカンチエヌムに並にマヤンラの彈藥を以て之に代へたり。彼等は尙ほ之れを喰ひ去るの術を知れるや否や。

午後二時に至り、待ちに待ちたる糗糧隊は各三口分乃至六口分の糧食を得て、或る山村の芭蕉林より歸れり。彼等は茲に幾り居りしもの糧は飢餓を感せざりしならん、何となれば見附け次第直に之を喰ふを得しを以てなり。余は彼等が一同其糧食の分配に與りしを見て、余の先きに與へたる二回の糧食を取り戻し、又一碗宛を病人に與へて其糗糧を爲す能はざるの心を慰せしめたり。斯くして各病人は凡そ八磅許の芭蕉の粉を得、余は將來の爲に二百磅を貯蓄するを得たり。

十一日、一時間半の旅行を爲して余等はキング、キングの渡船場に達せり。土人等は彼等が再びイヒエルの西岸に掠奪に來らんとを恐れ、盡くの小舟を打破し去るに至りければ、余は心にキング、キングに面會して或る事件を取極めんと欲せしが、果す能はず。河は折廻しく瀟水にして四方は荒蕪たる原野なり。余等は此岸に沿ふて歩を進め、更に折を見て東岸に渡るの道を講ずるより外なし。一行は今北東を北に山で進めり。

十二日に余等は矮人等の往復する道に従つて此山を迫りしが、途上到着所に菓實の皮、胡桃の殻、マンニエーの實のくきを散布せるを見る。此地方に於てはイチエー河の南岸に於けるか如く、野に採つて食すべきものあるなし。渡船場の側なる合營に達せし時、余は部下に六人の死者あるを見る、一人のロープ人は遊園の爲に、ユミン、パンヤがラドカの兵卒一人はクヌアの瀧に於て土人の爲に刺されし槍創より死去し、他に後隊よりせし二人のソーダン人、ボサー氏に仕へたる一人のマンニエー少年並にサンワーハル人イフツヒュは、足に受けたる鎧甲の毒の爲に逝けり。

十三日終日を通じて旅行の間、限りなき森林も余等の爲に少く利便を興ふるに阻れり。鳥成は其他の獸類の往復する道は余等を導いて、アンダツより東方に涉れる道に至らしめ、須臾にして又矮人等の通行する大なる道に出でたり。余等は此道に由て二時間の進行を続けぬ。余等は途上一々、彼等が煙草を吹ひし所、胡桃を碎きし所、獸類に向て餌を供へし所、並に休息或は相談の爲に留りし所を分つとを得。枝は恰も三尺許の所に於て折られたり、是れ矮人の爲せしものならざるべからず、路上軟かき泥土ある所には、其上に恰も八歳許なる英國小女の足跡に似たるの跡を印す、是れ古來より此森林間に生々相續して繁殖し來りたる小人の足跡ならざるべからず。彼等の合營は到着所に之れ有り。土地は豊沃にして樹木は他の地よりも一層大に、且つ高きに達せり。

一同合營に入るに際して、余は彼等の百糧を見、更に糧食の供給を得て、何れの處にか休養するの必要を感ぜり。彼等は全体に氣力に乏し、故と以て寧止自ら毅然ならず、ナイアンザよりせしサンヤーハル人の履具なるもの、如きも、又昔日の勇氣なきに阻れり。間斷なき過度の労働と、之れに對して至て不十分なる彼等の食物は、彼等をして活潑の行爲を爲さしめず、其重荷と其不慮とは六尺の体を地下に壓して其微蕨の中に入らしめんと欲するものなるに似たり。之れを以て思へば彼等の忍耐力は決して足らざるに非らず、彼等の側に過失あるに非らず、全く時と所との如何ともする能はざるに出でしなり。

彼等は久しきに涉つて食せず、時に會ま過度の食事を爲すを以て、強健なる胃腸も其の働を爲す能はず、今は胃病に罹るもの多く、殆ど自ら旅行すると能はざるものあるに及べり。二十日に於て五哩の進行を爲せり。矮人の街道を通行するは、イチエー近邊なる能く水氣を聚集するの道を歩むに似り、地は概ね赤土にて、降雨の時には流水、途上に溢れて川を爲し、地は滑かに、水は濁りて甚だ進行に便ならざるものあり。

正午の休憩間に於て、一人の頭領五百ヤード許の前方に散歩し居りしに、忽ち北部アンダツクより來れる土人の商隊に遭着せり。土人等は彼れを見て驚きの叫を擧げしが、已にして彼れが武器を存せざ

るとを知りければ、遂に彼れの方に進み來つて各槍を振ふに至れり。併し彼等が叫喚の聲は已に余等
 全隊の滞留所に達せしを以て、何れも銃を取つて彼處に馳せ行き、恰も能くサンサーバルの頭領を危
 難より救ふとを得たり。接戦は始れり、土人の二人に負傷せしめ、一人を殺し、遂に其凡ての荷物を
 奪へり。此荷物の中には鍍製の環、足環、腕環等あり、又未だ用ゐざるリメントン銃包の數箇を含め
 り。

此銃包は余等をして多少の疑惑を起さしめたり、何となれば亞弗利加森林中に於て余等より外に之れ
 を所有するものあるべき筈なればなり。ホドー蟲若は土人等の襲撃する所と爲りて遂に其所有物を
 失ふに至りしには非らざるか、或は彼等の斥候隊が途上土人等の圍む所と爲りて、是等を彼等の手に
 渡せしものには非るべきか。暫ばし其判断に苦しみしが、遂に彼のキロンガ、ロンガの部下等が余等
 の彈藥を盗みし事共を記憶しければ、多分彼等の手よりして土人の有に歸せしものならんと思へり。

廿一日に於て、余は人衆等が旅行の度殊に遇きに感ぜり。彼等は尙ほ先きの食食の爲に、冒険を思ふ
 るものなり。此日正午、余等は北緯一度四十三分の所に來れり。依て思ふに余等は東方への道を取り
 來りしにも拘はらず、少しく北方の方に此地を失するに至りしなり。

ノーマ人の最後の生存者なるチャマ、イサは此日に於て死せり、余は恰も正午に、彼れの容態を視



ノーマ人の最後の生存者なるチャマ、イサは此日に於て死せり

ることを知りければ、速に彼れの方に進み來つて各槍を振ふに廻れり。併し彼等が叫喚の聲は已に余等
 余等の滞留所に達せしを以て、何れも銃を取つて彼處に馳せ行き、恰も能くサンサーバルの頭領を危
 難より救ふを得たり。接取は始れり、土人の二人に自傷せしめ、一人を殺し、遂に其凡ての荷物を
 奪へり。此荷物の中には鐵製の環、足環、腕環等あり、又未だ用ゐざるリメントン銃包の鐵筒を含め
 り。

此銃包は余等をして多少の疑惑を起さしめたり、何となれば亞弗利加森林中に於て余等より外に之れ
 を所有するものあるべき筈なればなり。ホーニ蟲等は土人等の製煉する所と爲りて遂に其所有物を
 失ふに至りしには非らざるか、或は彼等の斥候隊が途上土人等の圍む所と爲りて、是等を彼等の手に
 渡せしものには非るべきか。假し其判断に當りしが、遂に彼のキロンガ、ロンガの部下等が余等
 の彈藥を窺みし事共を記憶しければ、多分彼等の手よりして土人の手に歸せしものならんと思へり。

廿一日に於て、余は人衆等が旅行の度殊に運きに感せり。彼等は尙ほ先きの食食の爲に、胃腸を患ふ
 るものなり。此日正午、余等は北緯一度四十三分の所に來れり。依て思ふに余等は東方への道を取り
 來りしにも拘はらず、少しく北方の方に此形を失するに墮りしなり。

ノーマ人の最後の生存者なるチャマ、イサは此日に於て死せり、余は恰も正午に、彼れの容態を視



ノーマ人の最後の生存者

察し、最早や其終りは遠からざるべしと思ひぬ。兎に角彼れは彼れが種屬中の最後のものなるを以て、大に他の心を惹くに足るものあり、余は日に余の食物を分つて彼れに與へ、二人のソーダンに命じて特に彼れを運び、彼れを渡ふの勞を取らしめしが、是に至て事終れり。此日の夕刻に至る迄に、パナルヤの後隊よりせしもの、中、三十二人死去せり。余はパナルヤに於て彼等を見し時、已に其一半は此旅行を通じて生存する能はざるべしと思ひしなり。彼等は舟中に在つて旅行を爲すの間は格別力を要するとなかりしも、陸上旅行を爲すに及んで著しく其最後の足を早むるに漚れり。

二十二日に於て、余等の前部會營に遠するや香や、強雨聲に來りて寒氣激しく加はり、一行をして非常の悲愴を嘗めしめたり。氣力を失ひたる彼等の精神と、体質を欠きたる彼等の身軀とは、殆ど寒氣に堪ゆると能はず。モーグ人并にサンローバル人等は何れも皆其荷物を路傍に擲ちて、轉ぶが如くに營内に馳せ入りたり。一人のモーグ人余の天幕に近く匍匐し來るあり。森林間の風雨に際しては晝間は夜に異ならず、余は已に燭光を點じ居けるに、彼處に異様の人物を認めければ直に燭を取つて之を擒せり。見れば則ち裸軀なるモーグ人泥土の上に伏して動く能はず、唯燭光を見て眼を大きく見開き、彼れの手を以て之を壓まんとするの狀を爲せり。余は人をして彼れを火邊に持ち廻らしめ、近き彼れの軀を横へて之れを暖め、ロービック會社の製造に係る肉汁を以て暖かきスープを作り、之れを

彼れに與へしに幸にして蘇生するを得たり。跡上後部に於ける二人のモーア人は之れが爲に死去し、又パナルヤよりの一人のサンサーバル人、同じく寒氣の爲に即死せり。

余等は翌日二時間の進行を爲し、而して是れより四十五人の強健者を選出して肉類を捜索せしむ、パナルヤよりの人衆并にモーア人等は已に糞窟を極めて一步も進む能はざるの有様なるを以て、今多少の肉類を得て彼等の療養に供せんと欲するなり。捜索隊は二十四時間許の後、漸く一頭山羊を獲て歸りければ、則ち直に之れを屠りて三十ガロン許のスープを作り、小麦粉二磅許を加へて之れを糊和し、六十の人衆に向つて之れを分與せり。二十五日午前十時、余等はイングアローに逸す。村は小丘の麓なる洞谷の中に在り、イヒュールの支流ダイ河を去ると六哩の所に當れり。

イングアローに於て、久しく飢餓の間に忍堪し來りたる遠征隊は、再び減亡を免れて蘇生の運に向へり。世落林は廣大にして其實は正に甘藷し、香氣は四方に涉つて鼻を打ち、人々をして欣喜奮發せしめたり。併し斯かる場合に於ては余は更に他の慮を爲さざるを得ず、何となれば彼等は迄も食物を節約するを知らず、又貯蓄するの考を有せざるを以てなり。イングアローに於ては其糧食の貯蓄なるを一軍勢を養ふに足るべきものありしも、彼等は飢餓の憂慮を絶して見事に之れを喰ひ盡し、果ては胃腸を起すに至りしが、イングアローに來りては朝と此事を打ち忘れ、又親の仇を棄つが如きの意氣込

を以て之を食せしと故、翌朝より再び種々様々の病人を生山するに陥れり。

人を放つて道路を捜索せしめしに、イングアローよりダイ河を涉つて進む一路あり、又他にポドー嶺野より東北凡そ十五哩許の一大村落イングアペリに逸する一路あると發見せり。余の始の考にては、今回、イボトよりしてポドー嶺野に出でんよりは、直に森林を通じて草原の地に向はんことを欲せしなり。又余はヤロンガ、ロンガに對して二二の處理すべきとありしかば、一隊を彼處に送つて之れを調へしめんとせしも、イヒュールを渡るの道を見出す能はず、止むを得ず一回河に沿ふて遂に陥りしなり。

余の觀察する所に據れば、余等は今北緯一度、四十七分、東經二十九度、七分、四十五秒の所に在るなり。併し彼の土人の商隊が所有せるリミントン銃包の事は、今尙ほ疑を余の胸中に殘し、ポドー嶺野は果して依然彼處に存在するものなるや、或は已にパンヤと共にナイアンザの方に移りしものなるや、或は此間に擧事を生ぜざるや等の憂慮もありければ、兎に角路を南方に取りて一先づポドー嶺野に過ぎり、實際の摸標を確めて然る後ナイアンザの方に向ふべき事に決せり。依て余はポター氏をして頭領ランツドと共に六十の人衆を率ゐてダイ河に赴き、之れが架橋に從事せしむ。

五日間の滞在の後、遠征隊はイングアローよりダイ河に進む、時恰も十二月一日なり。ポター氏并にランツドは鋭意に人衆を督して已に架橋の業を終へ、實に満足の成功を告げたり、是れ偏にポター氏の

力に山る。余等は臨時の滞留をも爲さずして直に、八十ヤード宛の幅ある五條の流水を渡り、一の山事をも生山せざりし。

マイの對岸に達せし時、余等は取り敢へず人員の點檢を爲せしに、後隊よりの入衆中に三十四の死者を出だし、而してサンローバル八十六の病人中十四人は同じくヤンマヤよりせしものなるを知れり。彼等は何れも皆回復の見込なく、其運命已に數日の間に迫り居るなり。余等が獲能ふ所の凡ての山羊雜類は、皆是等の病人に分與して其二日の勢を長ふせんと圖り、ホター氏は日に藥劑を調へて以て彼等の急に應じ、彼等の健康を回復するの道を講せしが、如何にせん彼等が久しくヤンマヤ並にパナルヤに於て忍びし所の苦痛は、已に藥に彼等の健康を破りて又如何ともすべからざるに至り、降雨寒氣等少しく氣候に異變を生ずる時は、忽ち其影響を彼等の上及びして不踏の旅に上らしめ、又旅行の際小枝を以て突きたる傷、小石に踏きし創等も忽ち潰瘍と變じて三四日の内には數寸の廣さを腐敗せしむるに至る。如何なる醫法に巧みなるものを以てするとも殆ど之れを治療するの道なきなり。

余等は少許の進行を爲してアンマヌバの一小村落に達し、其れより三時間の旅行に由てアングハの大村に到る。余等は此間幾多矮人の村落を通過せしが、一人も之れを見るときを得ざりし。森は深くして容易に通行すべからず、已にして數箇の小流は數箇の村落を挟んで流るゝあり、恰も此所に余等は、

余等が十二月四日の合營を建てたり。已にして合營の中央に、一匹の乳房を有せる山羊、生れて四箇月許を経たる二匹の山羊を伴ふて靜に歩むを見る。余等は之れを見るや否や飛び出して、是等と捕へ、天の興ふる所と一同喜びて之れを犠牲に供せり。半時間許を経て余等は、ホター氏に仕へ居たるウナムの土人は海矢に山つて其味を賞かれ、又マンユエマの見童一人は、矮人の爲に殺はれて死せしとを耳にせり。余は彼の遺骸を葬らんが爲に一隊を派して之れを森の中に運はしめしに、翌朝に至りて其所在を知る能はざるに至れり。疑もなく土人の食糧中に入りしものなるべし。

余は營内に命令を傳へて各五日間の糧食を準備せしむ。人衆は直に大なる「木の網」を持ち來りて芭蕉實を乾かすの用意を爲し、五日全日を通じて皆之れが爲に急はしかりし。

翌日余等は、南方に向つて進み、次第に坂路を下りてイヒル河の方に出づ。余等は途上六箇の廣き河を涉りしが、兩岸にはラフヒア、棕櫚、藤等の繁茂せるを認む。午後三時頃以前部は種々の矮人の家族に遭ふし、一人の老婦、一人の處女十八許の一人の男兒を捕へたり。外に少許の芭蕉實並に鶏卵を得。此老婦は至て強壯なるものにて、馬の如くに馳せ廻り、又芭蕉實等を選ぶに尤も熟練の機子を示せり。

此等の矮人等は頻りに此の間の道路を熟知せる事を述べしが、實地に案内を爲さしめしに、ホター殿

將に遠かりて東、北、東の方向への傾ありければ、余は彼等を後部の方に送り、更に東方を南方に馳せ、時には南、南、東に向ひ、七日に大湖の流れを涉り、八日にも同様の險害に遭へり。

本營の天幕を張り終り、地上の糞草等を除去するや否や、余は一人の青年將に倒れんとするの状を見る。伏て彼れの側に至て其故を問ふに、彼れは食物の不足よりして殆ど立つ能はざるものなるを告げたり。汝は已に五日間の糧食を喰ひ盡せしにや。吾我れは重きを減せんが爲に之れを放棄したり、何となれば彼の矮人等は是れより一日行程にして芭蕉林の有名なる地に達し、故には世界一、大なる芭蕉實を得べしと言ひしを以てなり。

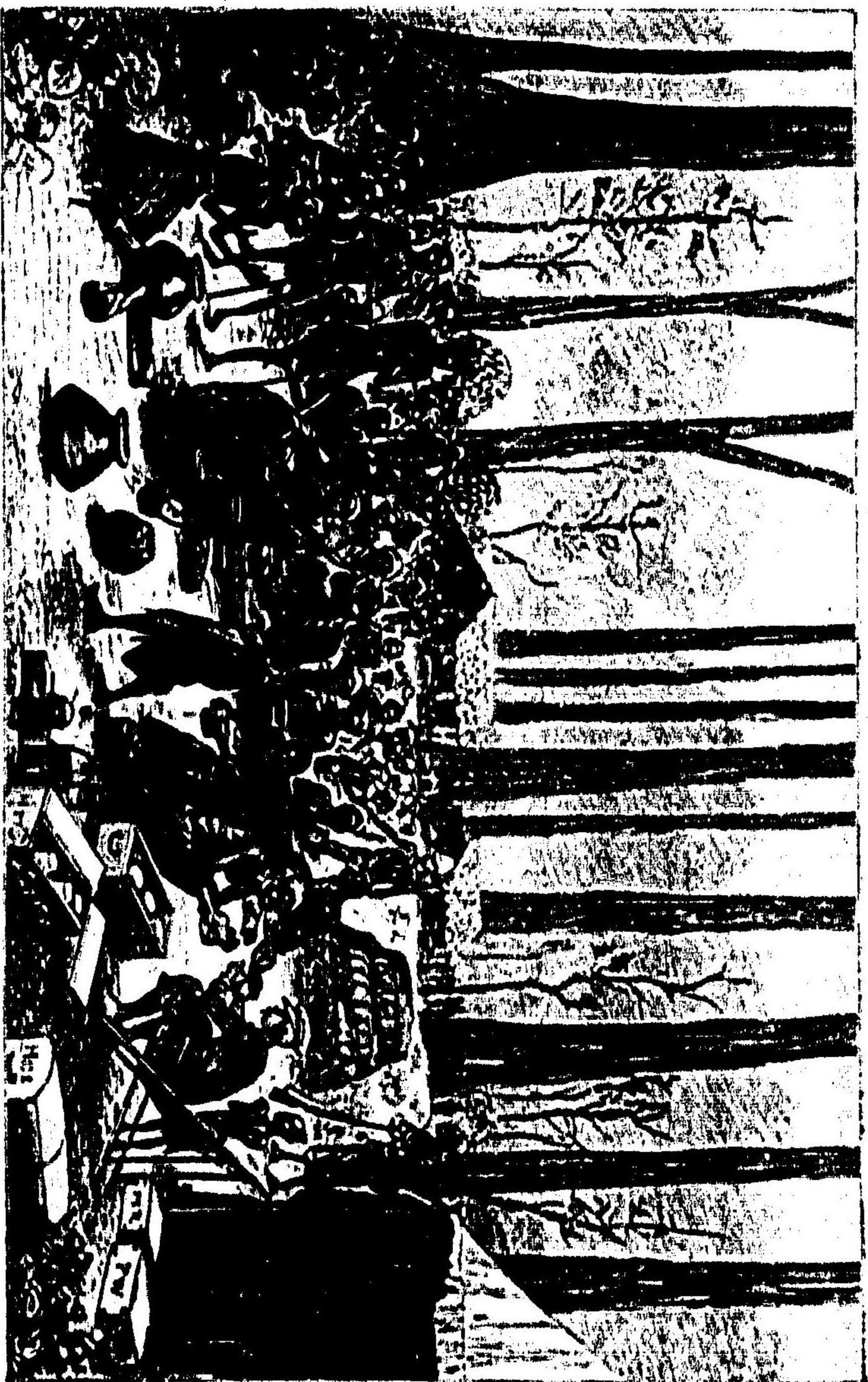
余は更に營内に就て之れを取り調べしに、凡そ二百五十の人は同一の例に從つて或は放棄し、或は喰ひ盡し、此日と翌日分とは一物も有せず。夜に入つて余は頭領等を招集して會議を開き、彼等の不注意を諷責せし後、翌日を以て凡ての強壯者を集り、余等か去る六日に出發せし所のウマンシウエザに歸り、糞草を爲さしむるに決せり。此間の距離は余等に向つて十九時半を要せしものなるが、固は元より最初の旅行にして且つ絶へず斧と刀を用ゐたるとなれば、今彼等にして輕便彼の地に向は、大に其時を破じ、十一時間にして彼處に達し得べしと思へり。

九日の朝に於て、殆ど二百の人衆はウマンシウエザの芭蕉林に向つて出發せり。山立前彼等は病人に對

する豫備として二百磅の芭蕉粉を寄附したり。余等と共に残りしものは、其數凡そ一百三十、男子あり、女子あり、矮人ありて其多數は已に瘡疥の境に迫りしものなり。余は此日の爲に各人に半カウツ宛の粉を分與し、然る後ポター氏をして十人を率ゐてイヒュル河の方位を搜索せしむ。余の計算に據るに、會營は北緯一度二十七分、十五秒、東經二十九度、二十一分、三十秒の所に位し、ポドー嶽野の北九哩の南極に當るとを見出せり。併し此事を以て人衆に告ぐるは得策に非らず、何となれば忽ち又糧食等を放棄して飢餓を招くに至るべきを以てなり。凡て彼等の見る所は限りなき森林ならしむべし、四方の望を閉ぢて靜窟の中に在らしむべし。彼等にして、二日若しくは三日にして彼の地に達することを知る時は彼等は忽ち此二日三日の時日を忘れて、早や身彼處に在るが如きの思を爲し、遂も此間に食すべきもの等を問はざるに至る。併し彼等は已にイヒュル河はポドーを去ると道からざるを知る、故に彼等にしてポター氏が之れを發見せしとを知るときは、少しく心氣を鼓舞するを得て徐ろに之れが準備を爲すに至るべきか。ポター氏は河を發見するとに於て成功し、而して途上に附屬を附して歸れり。

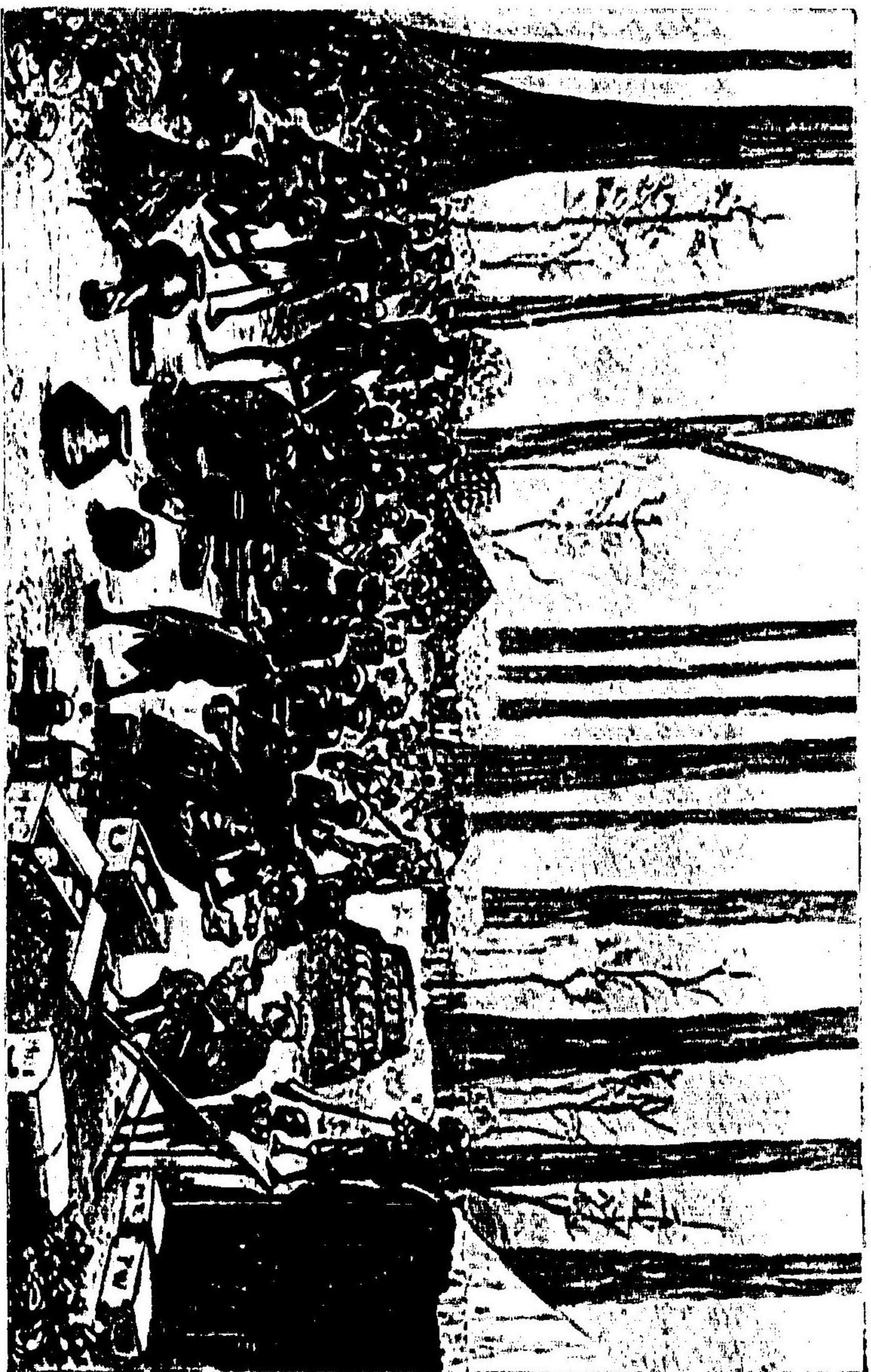
余は此間余等の通過し來りし所の地位風土等に就て再調査を爲し、苟も誤算あれば之を改算し、以て其觀察の誤なきとを期したり。十四日に至て此事は終へたり。余は明日は必らず人衆等が許多の糧食

を扱つて歸り来るべきと豫想し、一般の人衆等は憐むべき有様なりしも何れも皆希望の中に住り。歐洲よりの函箱一箱を開き、パンと牛乳とを取つて之れを沸騰せる湯の中に點じ、湯きスープを作りて、彼等をして其一時の空腹を補はしむ。六日に至り、彼等は再び土器を携へて余の周囲に連れければ、余は牛乳とパンと沸騰水とを掻き混ぜて各人をして之れを飲ましむ。彼等は之を得て少しく氣力を溜へ、各自森の中に出で、フレンニア并にアマナムの實等を捜がして之れを食ひ、其脱氣を以て幾分か胃の痛を避けたり。諸所に又困難を得るとも難からず、併し茲に困難なるは、漸くして彼等各自に森間を跋渉し、實を逐ひ、樹を這ふて次第に其歩の速きに進むを知らず、遂に其方向を忘れて又歸るを得ざるに至るの恐れあり。果して然り、二人のもの、并に入城の見童なるザッパは歸り來らず。余は特別に彼の見童を愛せり、彼の職務として、彼れは余のウァンチエヌターと銀包袋とを運ぶ。容貌至て機敏にして身軀又健全に、一小頭腦の中に老壯者の智識を收むるが如きものあり。余は旅行の際に在つても彼れを忘れず、路を曲り、或は障害物の在る所に到着する毎に、顧みて彼れを喚めば、彼れは常に近く余に接ふて歩み來るを見る。彼れは余の旅條統を持つもの故、尤も余に親近せしめざるべからず、依て余は常に彼れに向つて余の食するものを分與し、飢餓の間にも彼れ獨りは飢餓を知らざる程なりければ其小さな腹も次第に肥満を告げて、頗る人衆等の羨む所と爲りしものなり。然



つしち 旅の間にし其分々をアムと乳牛を余の飼養

を携へて歸り來るべきことを豫想し、一般の人衆等は憐むべき有様なりしも何れも皆希望の中に住めり。歐洲よりの函詰一箱を開き、バターと牛乳とを取つて之れを沸騰せる湯の中に點じ、薄きスープを作りて、彼等をして其一時の空腹を補はしむ。六日に至り、彼等は再び土器を携へて余の周囲に連れければ、余は牛乳とバターと沸騰水とを掻き混ぜて各人をして之れを飲ましむ。彼等は之を得て少しく氣力を添へ、各自森の中に出で、フレンヌア井にアマナムの實等を捜がして之れを食ひ、其酸氣を以て幾分か胃の痛を避けたり。諸所に又凶類を得るとも難からず、併し茲に困難なるは、斯くして彼等各自に森間を跋渉し、實を逐ひ、肉を追ふて次第に其歩の遠きに進むを知らず、遂に其方向を忘れて又歸ることを得ざるに至るの恐れあり。果して然り、二人のもの、井に入炭の見當なるザアリは歸り來らざ。余は特別に彼の兒童を愛せり、彼れの職務として、彼れは余のウジャンヌヌターと録包袋とを運ぶ。容貌至て機敏にして身軀又健全に、一小頭腦の中に老壯者の智識を收むるが如きものあり。余は旅行の際に在つても彼れを忘れず、路を曲り、或は障害物の在る所に到着する毎に、顧みて彼れを喚めば、彼れは常に近く余に揃ふて歩み來るを見る。彼れは余の旗條杖を持つもの故、尤も余に親近せしめざるべからず、依て余は常に彼れに向つて余の食するものを分與し、飢餓の間にも彼れ歸りは飢餓を知らざる程なりければ其小さな腹も次第に肥満を伴だて、頗る人衆等の羨む所と爲りしものなり。然



じしら高を懸てし真分なてマニと乳牛、雪々の深淵

るに彼れは何處に迷ひ去りしや。疑もなく他の人々等と共にマニエアの實を求めて遂に其道を失するに至りしものならん。

遙か前方に人の松火を焼くあり、是れ歐州に向つて係路を馳貫するものならんか。午後九時頃に至り、余等は小兒の聲を聴きしと思ひければ、之れに對して聲を掛けしに、應答は命替の端の方より來れり。大なる象牙を以て製したる「洞の音」は高く其響を放つて四方に反響し、然る時に反對の側よりして叫聲の聲之れに應ぜり。其有様少しく弱様なるものありければ、人衆等は兒童サマの幽霊、其死を悲しむの所爲なるべしと首へり。恰も此時に於て余も亦彼れの事と思へり、彼れが如何に成り行きしかを想像し、道を失して大に驚きしの間に、口は已に毒れて愈々困頓し、忽ち危毒なる矮人等の取りまく所と爲り、辛ふじて之れを逃れて更に猪、象、豹等の野獸に會し、逃げんと欲して逃ぐる能はず、遂に之れが爲に其身を寸断せらるゝに至りしなるべきと思へり。余等は全く彼れを以て死亡者の中に數へたり。

今日は實に是れ余等が災厄の時期なりしなり。午後更に一人の兒童は死去し、三人は失脚し、而して人衆多數の脅は斯心を破るに足るものあり。或は地上に伏したる儘立つと能はず。凡て是等の状態は余の神經を刺激し、常に道徳上の悲痛を感せしのみならず、著しく精力を耗して、共に大に余の氣

力を破殺せしめたり。

此夜余は床中に在つて深く彼等集積者の爲に心と痛めり。余等は何故に斯く迄不運の境地に立つにや、森に於て失脚せるものあり、芭蕉林に迷せずして飢餓の爲に倒るゝものあり、而して衰弱は時々刻々余等の身体を透縮せしめて、左なきだに冷かなる一片の希望をして又更に冷かならしむ。若し爲し得べくんば願くは少許の人を此遠征隊より救ひ得て、パンヤの所に送せしめ、異日此事をして歐洲諸國に知らしむるの便を得んとを願む。余等にして今若し全隊を擧げて此所に滅亡せば如何。パンヤは月より月に涉つて余等の安否を按ずるの間に、余等は一回露と爲り、塵と爲りて以て此限りなき森林の、知るべからざるの所に沈み、一歳を出でずして道途は元の如く雜草雜木を以て蔽ひ、皮剥きたる樹木も其面目を改めて最早や余等の道を指示せざるに及ばず、余等の當所は遂に世界に向つて無窮に遠滅するに至るべし。茲に今殆ど二百の人衆あり、食物に窮して、之を得んが爲に三十五哩の距離を涉らんとす。此中彼の地に達するを得るものは恐く百五十以下なるべし、他は何れも彼のローア人の如くに地に伏して、以て人々が糧食を得て歸り來るに阻らんとを待つなるべし。若し此中の強壯なるもの五十人にして果して戰事に際會するとせば則ち如何。或は矮人の爲に射られて死し、或は他の土人の爲に擧はれて倒れ、人々首領を欠くの故を以て次第に四方に散亂し、道を失ふて個々悲慘に泣き、

敢なく土人等の槍に罹りて死するに至るべし。余が先きに送りたる人衆の運命は之れと同様なるものあるべきか。果して然らば余等は無窮に歸らざるの人衆に向つて余等の生命を托するもの、余等又日を出でずして三人行き、六人歩き、十人離れ、二十人去り、遂に火の消ゆるが如くに一回其跡を滅すべし。吾余等は之を待つべからず、生命あるの間によろしく前進して何事をか爲すべし。

六日目に至り、余等は常の如くに薄きメープを作りて之を一百三十の人に分與し、而して余は諸頭領并にポター氏を呼んで小會議を開けり。集積隊の運命如何に關しては彼等何れも其理由を想像するたに爲す能はず、敢て一宵の意見を吐露するものあるなし。彼等入衆は實に可憐のものなり、吾等衆の物なり。過失に過失を重ね、輕率に輕率を加へ、余をして日夜此事を憂慮せしめしなり。私に救済を試みて遂に歸らず、一匹の小鹿を獲んが爲に五十の人水中に飛び入り、森間に於ける十五箇月の經驗の後に、尙ほ糧食を放棄するの事爲し、妄りに敵の潜伏せる芭蕉林に入つて鎧甲に足を傷め、或は不注意に湖嶽の尖に觸れて潰瘍を惹き起し、甚だしきは腐條銃を買つて自ら奴隷たらんとを願む、彼等の愚は實に極まる所を知らざるなり。此歴史に由て今彼等集積隊の運命を卜す、余は實に希望を聚ふる能はず。勿論三百人の人衆が三人の吏員の下に、六日間森林中に没せしの例なきに非らず。左るにても余は彼等に對して、彼等にして四日以内に歸るに非れば、余等は再び起つ能はざる

に至るべきとを告げしなり。彼等の川渡よりして今は已に六日を経過せしに非らずや。五十の人は將に死せんとす、其他も續々之れに従はんとす。嗚呼余等は茲に於て遂に此志を非らざるを得ざるべしか。

須臾にして一の者は又余が心に浮べり。余等にして若し此儘に動かずば、令營に止らば遠からずして動く能はざるに至るべし、如かず進んで以て倒るゝの道を取らんには。依て余等は諸荷物を地下に埋め、一同出發してウインクウエザの方に向ふべきかと思へり。是れ暫つて死を待つに勝るや萬々なり。併し茲に一の困難なるは、余等は余等に從ふ能はざる病人を此地に遺せざるを得ざる故、余等が出發の後彼等は單に一片の好奇心よりして諸荷物を埋り出し、一々之を破壊し去るに至るやも知るべからず。

ホター氏は之に對して首を爲し、自ら十人の人と共に令營に止るべきとを陳述せり。余等は喜んで之れを諾し、彼れ並に彼れの人衆の爲に十日間の糧食を供ふ、是れ余等が見積りたる留守の時日なるを以てなり。糧食と言ふも此際のことなれば固より十分なるものには非らず、唐黍の粉を一人前一日一合の割合にて十三人に十日分を計り、他に一人一口に付四箇の牛乳入ボックスとを與へたり。余は又ホター氏に數箇のパンと牛乳とを與へ、例のスープを作るの用に供せしむ。但し身軀の健康なるにも

拘はらず、唯自己の自由を以て余等に従ふと欲せざるもの、爲には、余等は等の食物を與ふるとを得ず。十三の人此地を守るの間に、余等は是非とも晝夜を待て歸り、共に自他の生命を全ふするを圖らざるべからず。

此朝、余等は已に死したりと思ひ居たる、小童サアは突如として令營に入り來り、常の通り輕易の風を以て恰も愉快なる散策より歸りしが如きの狀を爲す「ア、ア、ア、其方は何處に居りしや。」「我れは彼の口、木の實を採ぬるの間に時を忘れて漸く夜に入つて道の方に川でたり。此處に、諸所の樹木に斧の跡あるを認めければ、是れに依て以て令營に達するを得べしと思ひ、急ぎ此處を越めしに、忽ちにして大なる河の邊に出でたり。是れイロエルの河なるべし。時に夜も明け、足も疲れければ、側に在りし大なる樹の洞に入つて眠り、翌朝又道を引返へし、歩みに歩みを續けしに漸くにして茲に來るを得しなり。是れ火けの事」。

余等は十五日に於て人口の點檢を爲せしに、マンユエマの頭領サアは彼れの部下十五人は旅行に堪え得ざることを告げ、カボックは彼れの部下は盡く死去して、今生存するものは唯一人の兄弟のみなれども彼れ又病を以て動く能はずと言ひ、マハンソは妻と一人の子を有すれども、共に疲勞の爲に歩む能はずと嘆ち、止むを得ず遠征隊は遂に二十六の病人を此地に留むると爲せり。四十三の人は二

十四時間内に多少の糧食を得るに非れば、又將に明日を期する能はざらんす。余は勉めて有留の状を示して彼等を鼓舞せり、余の心は殆ど將に寸刻せんとするの實を察して、彼等に向つて勇剛の精神を發揮すべきとを教え、此精神の存する所には必ず能く成果を得べきとを説き、以て彼等をして幾分の氣力を回復せしめんとを圖れり。余等は途上に於て果して彼等第糧隊に遺ふとを得べきか、彼等は今如何なる境遇に立ち居るにや。嗚呼事茲に至る、唯、一上帝の指揮に任せんのみ。

余等は午後一時に於て、三十五哩の距離あるウングウエザの方に向つて糧食を得んが爲に出發す、一行は兒童を併せて六十五人にして外に十二の婦人あり。余等は夜に至る迄旅行を続け、其れより各自身を地上に委して、或は單獨に、或は群衆と共に、無限の愁を懷て寝に就きしが、余は余の心に強く紛擾を惹き起して容易に眠るべくもあらず。此際にて睡眠は實に一刻千金の價値あるものなり、余は賭事を擲つて之れを求めんと欲せしが、事は遂に徒勞に帰せり、吾却て益々反動の力を強め、余をして心に種々の幻影を畫かしめたり。幾多の死者は續々として余の前に見はれ來れり、余の想像は種々に之れを色取りて愈々悲愴ならしめ、余の心は殆ど爲に狂へり。余が途上に於て見來りたる凡ての事物は——彼處此處に骸骨の横はる様、人の將に死なんとして哀を需むるも人之に應ずるに道なき様、凡て皆余の心に蘇生し、現在之に對するが如し。合想や夜は闇然にして滿天一の光を認むる能

はず、此七重に入重に、失血の烟の中に包まれたる重き心は、澀して凝して將に此身を殺さんとすれども、未だ明朝の晴天を期する能はず。余は恰も百鬼の爲に因附と爲りたるもの、如し、彼等は四方より八方より異様の形を以て、異様の語を以て、舌頭火焔を吐き、拳頭刃を磨して迫る。かすかに聽ゆる所の聲は何事ぞ、幾多の人衆墓中に在つて以て余等を迎ふるの準備を爲すには非るか。風は吹き來り、冷氣は加はれり、營中の人又余と共に眠る能はざるもの多きにや、彼處此處に大息、長大息の聲は頰りなり。事終れり、事終れり、爾の勞力も爾の悲歎も益なし。照あるべからず、望あるべからず。大膽なる心も今に至て何の効を有せん。爾等は一々死して以て塵と爲り、露と爲り、此荒原の雜草を肥さるを得ず。

「アウ、カー、アップバー」の叫びは一人の悲愴なる口を衝て、闇夜を通じて響けり、余は之に應じて思はず「神は愛なり」の語を發せり。ア、何故にモスメンの首は斯く遠にクリスマツヤンの心を動かして共に上帝の名を呼ばしむるに至れるにや。「愚者よ爾等は何れの時に於て賢なるを得べきか」。余等の爲に眼を遣りしの彼れは、今將た余等を見ざるべきか。余等の爲に耳を遣りしの彼れは、今將た余等の首を聽かざるべきか。嗚呼余は過去の經歷に由て之れを知る、上帝は眞に是れ愛なり。余が百千の思慮も彼れが一手の指す所に如かず。茲に至て余は余の心を舉げて余く之を彼れに托せり。

曉に近く、余は少許の眼を買ふとを得たり。已にして眼を開くに夜は未だ全く明けず、人々は明闇の間に臥して、其様恰幽霊的の活影を見るに似たり。

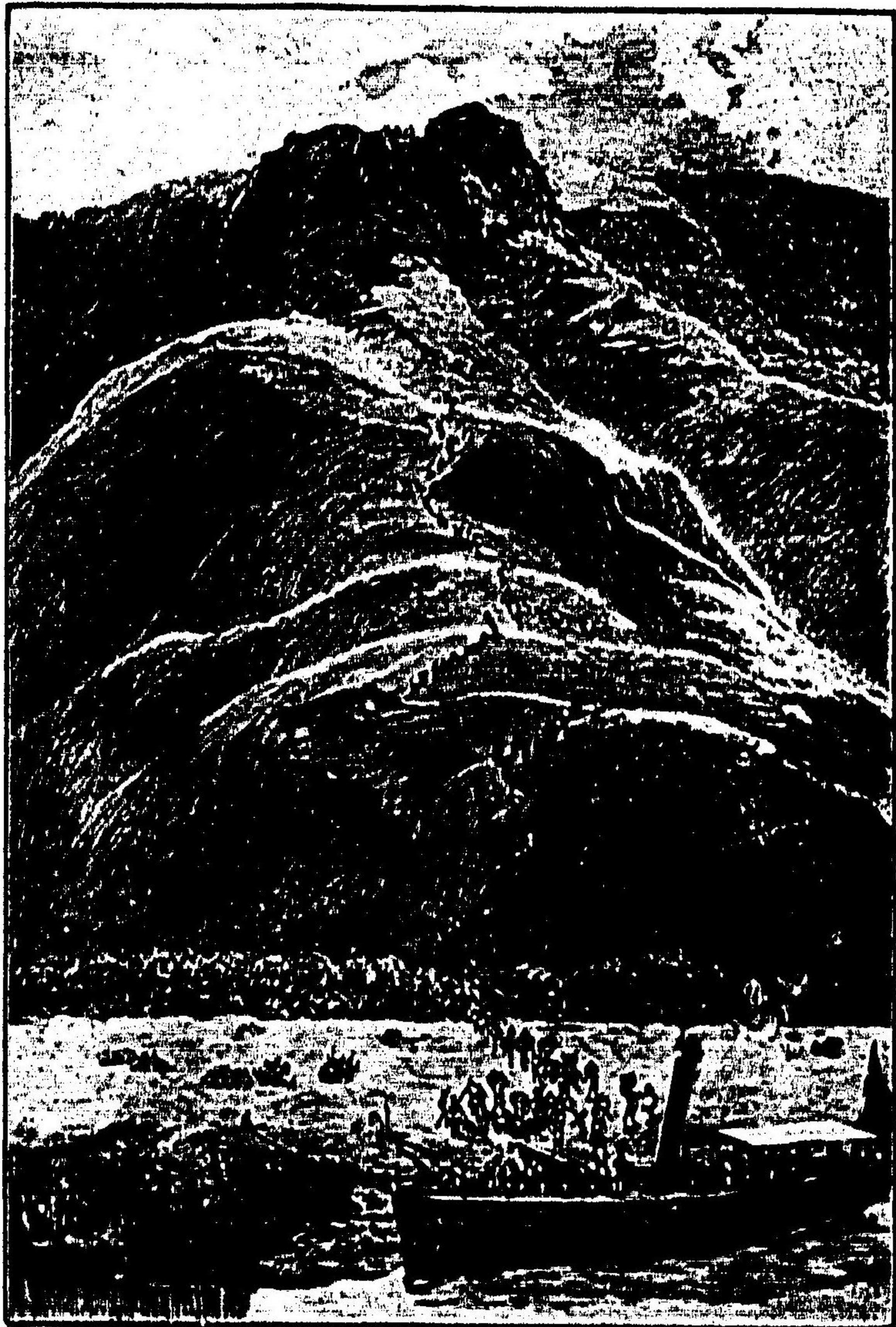
「起きよ起きよ、芭蕉の林に向つて起きよ、余等は今日を以て是非とも彼處に達せざるべからず」。斯くて余は彼等の心を引き立てんとを望みり。数分許にして余等は一同旅行の途に上る、人衆は何れも満足なるものならず、或は足痛の爲に、或は腹痛の爲に、或は疲労の爲に、共に暫くとして静養の状を學ぶに似たり。余等は進行の爲に幾分か暖氣を加へ、幾分か愉快を覺ゆるの頃、忽ち前方に於て人衆の聲あるを聴けり。侍童サマは余が少しく手を動かせしを見て、直に近く施徳銃を供へしが、尙ほ意を止めて之れを熱視するに、彼等は火なるマニエアの葉を以て蔽へる許多の眞物を運び來るもの如くなりければ、余は直に我が集隊隊の陣り來りしものならんとを推せり。須臾にして果して其實を證せり、疲勞せるもの、敗足なるもの、不具なるもの、痲痺なるもの、大息せるもの、長大息せるもの、何れも皆之れを忘れて飛び立ち、共に其聲を併せて上帝の慈悲を謝せり。英人も亞弗利加人も、クリスチャンもモスレムも一同共に深く彼れの方を感ぜり。上帝は此處にあらざ、彼處に在らず、常に凡ての所に在つて凡ての事を主宰するものなり。

余は彼等に對して何故に斯く迷途引を爲し、余等をして殆ど餓死するの状況に迫らしめしやと詰責せ

んとを思ひしが、今や此暇だになし。人衆は火を焚き、皮を剥ぎ、急ぎて其口腹を満たせしの後、共に「飢餓の合聲」に對する耐途に上り、午後二時に至て彼處に達せしに、ホター氏を始めとして十三の人は勿論、其他の病人等も又爲に蘇生の思を爲して余等を歓迎せり。此午後を通じて凡て皆——老幼男女の別なく、ザンサーバル人とマンユエマ人、ソングン人とローア人とを問はず、共に過去の苦痛を忘れて一場の饗燕を樂めり。彼等は又相共に將來に向つて節約を旨とすべきことを誓ひしが、固は未だ深く信を屬するに足らず。

十七日に於て、余等はイロホルに達し、而して翌日河を渡り、其れより森を通じ、林を通じ、又戦を通じて、直截に行程を開き、十九日の午後に於て早く、一同は道なきの境を出で、直にホード懸野なる芭蕉林の外圍の邊に出でたり。人衆皆歡呼の聲を擧げたり。

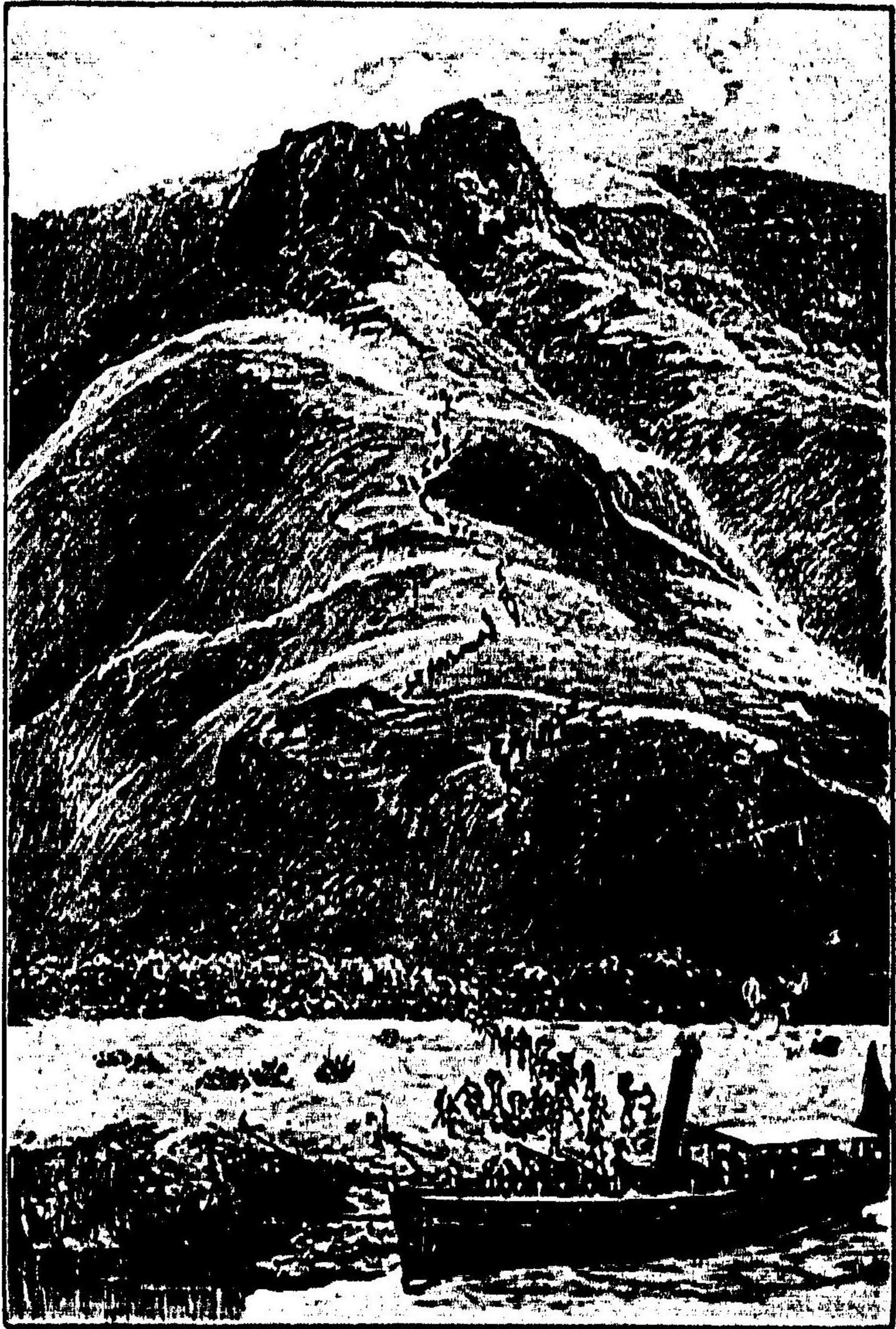
二十日に、余等は此芭蕉林を通じて直行し、半時間許を経て、驟て余等が熟知せる道の邊に出づ、是れ皆て余等が數々散策を試みたるの所なり。已にして余等は又新しき道を發見し、其路傍には近頃の集積を示して芭蕉の皮を高く積み上げたるを見る、是れ何物の爲せし所あるべきか。彼の土人等が再び此邊に住居するに至りしものなるべきか、或は矮人等が自由に出た此土の豐饒を濟するに至りしものなるべきか。斯くて余等は皆て余等の作りたる西方の軍用路に達せし時、固らず或るザンサーバル人等



一 行 城 小 山 景

閩黑亞弗利加第四編終

の進行するに會せり、彼等も驚けり、余等も驚けり。到着の合國に砲聲は響けり、砲聲は應ぜり、忽ちにして靜寂なる開地も人々の情激を以て動けり。已にして壘内の人衆は續々聲を以て飛びながら、踊りながら、來つて余等を歓迎し、中にも余の親友なるドクター、パークは最先に迫り來つて「壘内凡て無事なり」と叫びぬ。



一 行 地 小 小 小

閩黑亞弗利加第四編終

の巡行するに會せり、彼等も驚けり、余等も驚けり。到着の合點に砲聲は響けり、砲聲は響せり、忽ちにして潮間なる間地も人々の情激を以て動けり。已にして壘内の人衆は續々喜を以て飛びながら、踊りながら、來つて余等を歡迎し、中にも余の親友なるドクラー、パータは眞先に進み來つて「壘内凡て無事なり」と叫びぬ。

闇黒亞弗利加第五編

目次

第廿三章

エミン、バシヤ井にジェフソン氏の禁獄。

ホトー船中に於ける余等の四捕○メナーアス中尉の報告○ジェフソンの所在を詳にせず○人員の點檢○余等船中の焼く捕ひ
エミンの井にジェフソンの捜索に向つて出陣す○カンゴの會營○余等再びメナーアス中尉井に外科醫パーダに別る○マ
ザンボ余等に、ジェフソンとエミンとの事を語る○カピタ余等を捕縛す○二人のレヒルマの使者、エミン井にジェフソン
よりの舟輪を持ち来る○余等酋長モゴに托して之れを返す○バレンガ余等を誘ふ、併しバビラの助力を得て之を逃び出
くるを得たり○ジェフソン兵隊を出で来る○余等エミンに就て相訪す○ジェフソンの種々なる報告。

第廿四章

エミンバシヤ井に吏員等、カバリに於ける余等の會
營に來る。

メナーアス中尉井に其一行を贈ふ○エミンをメナケルより救出するに就ての方法○ジェフソンとの會話に由て其概況を知る
よを得たり○レダレーに於ける謀反の吏員○彼等はエミンを許し、嵐船キイグイア井にナイアンザに滑下て余等の會營に
向ふ○エミン、メシヤの來營○メナーアスの一打、マイヤンキの地に通す○湖上よりカバりにメシヤ等が四へたるレヒルマ
ンの舟輪○バシヤの部下到着す○余等會營外に於て觀戦式を行ふ○湖見所に於てキヤム、バー○メナーアスの一打貨物小
艇よて入り来る○カチー兵に命じてナイアンザより貨物を持ち來さしむ○余等レダレーに於ける殘餘の遺蹟に向つて舟を返る

○オチー兵よりの善状○希臘の商人マールヨ来る○ザンローバル人ウウマの自殺○近隣の諸酋長余等に火矢を供給す○チルソ
ン大尉エモンの遺物を匿び捕たる○イナニヨ河よりナイアマンに遷する間の諸酋長との契約○酋長カバ、レサ○エモン、バ
シヤの如○セラム、ムー奇カフハマレ、ムラより受く○ハンヤ位位証に因つて博覧會者非に紅鬃馬を爲たり○ハンヤは
博覧會者なり○ドクター、ハンヤ来る○余等營内を巡視す○カサヤ来る○オチー兵マレン、エツフモンザ非に彼の遺物を以て
来る○世界に於ける稀有のドクター○成る報復の報見○ハンヤ諸酋の圖謀を事すとす○婦人の丈夫○余はエモンの人衆に對し
て、彼れを見解を施す○兩昨を合衆前に於ける種々の旅行○ザンローバル人教徒者に就て懇諭す○ハザン、バカ○埃及の
官吏○レヤタ、アヤヤとの會談○パレガの國に於ける草木○ウレの酋長余等の同盟に加はる○セラム、ムー非にレヤタ
、アヤヤに關してエモンとの對話○エモン、ハンヤの前に於て、ステリアス、チルソンの、エツフモン非にバークに對する
余の演説○彼等の答辭○セラム、ムー非にレヤタ、アヤヤに與へたる結果。

第廿五章 余等共にザンジーバルに向て歸る。

マザンゴの地に旅客ありとの傳報○ハンヤの義子○オスマン、エツフモン余に向つて、彼れがマレの官吏に關する
意見を通す○余の使節サ、會衆内の斥候を爲す○エモンは彼の領土よりの出境に對してキヤナアン、カサヤの所見○ス
ターアス中尉第一に友誼の方に向ふ○諸所に於て計りたる余等官吏の跡地○ルウエツソの峯を見たるを得たり○カサヤの妻
實したる小女子○余ハムツ、エツフモン、彼の妻非にエモンの時に伴人となる○ザンローバル人の小島よりして施
徳を蒙はんとするものあり○余等マケレー非にムスリに於て困難を感せしに報に據す○エモン、ハンヤに對する
二種の軍隊○軍裝品の點檢を命ず○ザンローバル人エモンのアツツ兵を點檢に出せしに報に據す○埃及人非にソードン人に對する
演説○ステリアス中尉ハンヤの使節等を歸す○セルア非に他の三人首魁なるの故を以て拘束を爲せり○ハンヤが部下の

探險○オスマン、エツフモン非に彼のの時○カサヤ非にエモン相好からす○備付に向つて準備す○エモンのオチー非に
ザンローバル人間の神懸ち○闘争者に對する余の判定○余等ザンローバルに向つてカバが出立す○余等一行の數○マザン
ゴの境内に於て止る○余等舟の爲に苦しむ○ドクター、マークの治療○輪船に關する余の心の企圖○會衆内に於ける議及
の探報○ステリアス中尉非に四十人、余等の船隻を以て逃走したるレハン非に三十二のもの小捕獲す○法廷を開き、レ
ハンを絞殺するに決す○バーク非にエツフモン病む○マレに向つて宛てたる書翰數通余の手に落ち、依て以てエモンの
吏員間に於ける煩悩なる議及の次第を知るを得たり○同事件に就き、エモン、ハンヤとの會談○レヤタ、アヤヤ二人の從者
を率ひて余等の會衆に来る○ステリアス中尉成る報復を通知す○マザンゴの配意非に其懇情○三人の兵士書を以てセ
ム、ムーより来る○兵士等との會話○彼等はエモンよりの言を以てセラム、ムーに歸る○マヤ、エツフモン非に彼の使節
兵士に傳ふてセラム、ムーに歸す。

第廿六章 再びエモン、バシヤに就て。

エツフモン非の扶助と、エモン扶助との比較○エモンと最初の會合を爲すに由る迄、復讐報復の情略○埃東エモンに關
する多少の諷刺○余等エモンに對する高尚なる想考○兵卒の心情、エモンの不決斷○余等第三回の旅行に於て彼れが因縁
を爲りしに關く○エモンにして多少の注意と氣力を以てせば之を脱け難きに非らざりしなり○エモンの船隻非に高貴なる
希冀○余等の設法する所のハンヤ○カートムに於けるエモンの地位非に其外進○ソードンに於けるゾルデンの田植○エ
モンの想考非に埃東○エモンの小段檢○ハドリアン帝が埃及人に關する記述の正確○千八百八十五年より千八百八十五年迄、
エモンとオチー軍との戦争○ドクター、ロヤンカーは千八百六十六年にエモンの書を取つてザンローバルに對る○カバ、レ
ガはエモンの公敵なり○余等扶助隊の到着前、エモンの實況は善良なる政府を構成する能はざるの事情を察せり○オチー、ソ

闇黒亞弗利加第五編目次終

闇黒亞弗利加第五編

ヘンリー、エム、スタンレー著

五洲 矢部 新作 譯

第三十三章 エミン、パンヤ井にジェフソン氏の禁獄。

ボトー船内に於ける余等の四編○メサーアス中尉の報告○ロエフソンの所在を詳にせず○人員の點檢○余等船中を焼く拂ひ
メミンの井にロエフソンの捜索に向つて出發す○カンアールの會費○余等再びメサーアス中尉井に外科醫パータに對する○マ
ザンガニ余等に、ロエフソンとメミンとの事を知る○カセフ余等が船中○二人のツヒヒマの使者、エミン井にロエフソン
よりの消息を持ち来る○余等皆長キに托して之れが返書を書く○パレガ余等を降ふ、併しパレフの助力を得て之を逃ひ退
くるを得たり○ロエフソン兵隊を出で来る○余等エミンに就て相話す○ロエフソンの種々なる報告

過去六箇月の間、僅かに五十九の船隻を以て守護したるボトー船中の有様は、ヤンツヤなる後隊の
熱劇に比して大に弱なり。余が西方の道を通じて追み来るに際してや、余の心は喜悅を以て舞へり。
余の周囲の人々何れも皆同じく其朴直の味を以て、叫べり、跳れり。ドラクマは余等に向つて一同無
事なる趣を告げたり、兩側に於て唐黍の畝は到る所に鬱鬱の状を示し、障柵は新に修置を加へて一も
破れたる所なく、小屋は沓麗にして街は清潔に、而して余の遺ひし所のものは盛く皆白人も又黒人も

共に健全の色を帯びたり。ナルソンは全く則復せり、「飢餓の令營」に於て身を蔽はれたる不運の雲霧も茲に始めて晴れ渡り、昔日の男兒らしき骨格と容貌とは再び氏の行に隨せり。ステリアス中尉は常に能く最上の務を爲すに適するもの、彼れは能く命令を全ふして寸毫も其方針を誤らざりしものなり。

地内の穀倉には二萬四千箇の馬糞を藏し、又周囲の耕作地には芭蕉實、甘蔗、豆類并に煙草等の肥料を蓄積せるものあり、又近隣の川筋よりして魚類を捕獲するの便を供え、更にと人衆との間は悉く親密にして何事も一致の運動を爲すに足る。此間ステリアス中尉は閑暇を樂しみしには非らず、象の群は數々地内に襲ひ來り、又土人は晝夜の別なく、烟草其他の物品を得んとして潜み來り、矮人等も亦其の指押を以て芭蕉實、甘蔗等を奪ひ去らんとす。併し中尉の機敏なる決して彼等の爲に欺かるゝものに非らず、彼れが適當にして而も斷然たる所置は、能く人衆等の心を鼓舞するとを得て、絶えず注意を怠るとなかりければ、奸惡危毒なる土人矮人等も遂に其手を收むるに至り、威嚇なき象の如きも又再び彼の威嚴を犯すとを爲さざりし。左の書簡は則ち彼れが六箇月間に處理したる事實を報告せるものなり。

中央亞弗利加、インウヰリなるポド・操特に於て、

千八百八十八年十二月二十一日。

遠征隊總督

エーチ、ユム、スクンレー君足下。

親愛なる足下よ、余は今千八百八十八年六月十三日に於ける足下の指揮に従ひ、爾來ポド・操特并に其兵營を處理し來りたるの事實を、足下に向つて報告するの榮を得たり。

時に兵營の人数は——更目三人、サンサーバル人五十一人、ソーダ人五人、モーグ人五人凡て六十四人なりしなり。

足下のヤンアヤに向つて出發するや、近隣の土人等は遽かに不法の行爲を遂ふるに至り、殆ど日毎に余等が耕作地に侵入し來りて芭蕉實を奪ひ、遂には近く曠野の東部なる園畝の中に押し入り、許多の煙草、豆類等を奪つて去れり。斯くて八月二十一日の夜に於て、彼等は再び煙草を劫まんが爲に來りしが、併し此度は已に哨兵の配置せるあり、直に銃砲を以て彼等を驚散せしむるに至りければ、爾來彼等も少しく其手を收めしが、周囲の林に於ける芭蕉實の剪採は今尚ほ止まざりし。是に於て余は毎週三隊の巡邏隊を送り出すの必要を感じ、依て以て全く土人并に象を遠ざくるの道に供えたり。殆ど數日毎に松火を點するに非れば、象は芭蕉林に來り、忽ちにして數エーシルの地を

踏み亂すに至るなり。

九月一日に至て、余等は土人を制御するの道に於て全く成功し、幾時を去る四方八哩許の内には又土人の足跡を留る所なきに至れり。是れより南、南、東に當れる土人は尤も余等に手数を與へ、而して彼等は余等の耕作地より最後に立ち去りしものなり。

七月の終に於て、余等は皆、ロントナー、ヴェンソン氏が兵隊を扶助せんが爲に、アルバルト、ナイアンヤより來り、而して余等の荷物を湖畔に運ぶに至るべきとを期せり。併し日は去り、時は過ぎしも、彼れよりの通知だに接せず、人衆は何れも不安の念を懐けり。嶽内に於ける多數の人々はヴェンソン若しくは足下よりして扶助の道を得る途は、茲に留るべきとを決せる様子なりしが、中に八人乃至十人ものは速に湖畔に逃して、聞きしが如くに十分の肉類を得んとを望み、動もすれば荷物を棄て、白人を棄て、嶽内を逃げ出でんとするの色を示せり。

余は事情を察し、又彼等の心情を察し、凡て彼等を遇するに寛容を旨とし、成るべくホーイ嶽内の生活をして自由に且つ愉快ならしめんとを圖れり。

ヴェンソン氏の來着期の後、間もなく、人衆の或るもの余の所に來つて相談會を開かんとを求む。余は之れを諾す。此相談會に於て、アリ、ヴェンヤなるもの左の助談を提出し、凡て列席せるヴェンヤ

バル人等の賛成を得たり。

第一に、余等は嶽を離れ、マゼンボエの領土に由て湖畔に向ひ、途上二回の旅行を爲して荷物を盡く湖畔に致し、而して糧食の充分を得る事。

第二 番らざれば、十五の使者を平原の地に送り、バンドエマは何は能く余等の朋友なるべきや否やを確め、若し朋友たらざれば其嶽内に歸り、又朋友たらば、使者は其地を通じて書をヴェンソン氏に致し、以て扶助を求むる事。

此助談に對し、余は左の如く答へたり——

第一 マゼンヤ氏は余に向つて、如何なる事情あるとも、他の助けを得るに非れば、平原を渡るべからざるとを告げたり。

第二 スタンレー氏はエミン、パンヤに對して、假令土人等は皆平和の意を示すとも、六十の銃を以てするに非れば、決して平原を涉る勿れと言ひしに非ずや。

第三 余等は僅かに三十の強壯者を有するのみ、他は皆病人なり。斯くの如き有様を以て然かせば遂に凡ての荷物と病人とを失ふに至るべし。

余が此事を彼等に告げしのは、彼等も能く其心を諭して共に與に平和の中に住めり。余等は恰

も此處に永住するかの氣込を以て地を鋤き、土を耕し、以て唐黍其他の種を播けり。九月一日に起り、激烈なる暴風、飛に伴ふて來り、殆ど六分の唐黍、芭蕉實等を打破し、其餘一箇月を越るの間は其の萌芽だに見るとを得ざりし。此事だにかりせば、余等は互願の唐黍を積み得しならん。併し今は人衆を養ふに窮する程なりければ、余は非常の節約を命じ、各人に向つて一週間僅に十箇の唐黍を興ふると爲し、而して病弱なるものには、ドクロー、パークの說に従つて同じく一ロ一カツツを興へたり。一時余等は三十以上の人を擧げて滑場を思ふるに至りしが、ドクロー、パークの間斷なき盡力に出り、今は僅かに四人の外は盡く全愈せり。

足下の出立より十二月の二十日に至る迄八人の死者を出せり。中二人は矢に由て殺され、又二人は土人の爲に虜にせられたり。

凡ての事物に對する裁斷は、余は必ず他の皮肉と共にせしなり。余等は一同窮乏なく足下の到着を待つことに決す、蓋し足下は必ず余等を扶助するに對つて怠たらざるべきを確信せしを以てなり。

十二月二十日、余は薩特總督の任を擧げて之れを足下に致し、同じく二十一日凡て余の監理し來りたる荷物を以て余が責を解けり。

足下の購買なる使價

中尉 ダブリュー、ワー、スターアス

今余等の想像は凡てマニフソンの上に集れり。彼れは活潑敏捷にして、何事を感じずにも未だ竹て期に後れしとなきものなり。假令多少の障害ありとも、又假令ペレヤがボドー嶺特に旅行の不必要なるとを説くとも、彼れは之れに従つて交通を欠くべきの人に非らず。

併し事實は事實なり、過去六箇月に涉つて通信なきを如何せん。余等は人火に對して五十五の餘計なる荷物あり、他に又各自必要の物品等を運ばざるを得ず。余は夜間多少の考慮を費せしの後、ボドー嶺特に平原の嶺なるイナエリ河との間に二回の往復旅行を爲し、茲にカンブロン嶺の嶺に於て、スターアス中尉、皮肉並に病入を留め、余等は先づエモン、バシヤとセントナー、マニフソンの搜索に向つてナイアンザの方に進むべき事を思へり。斯くするも余は最初の見込に對して十日を後るゝに至る、併し實際種々多なる事情と嶺越との爲に此歩を阻斷せられたるものなれば、今に至る何ともすべからず。ボドー嶺特に余等の見込より二日早く進するを得しなり、若し今二回の往復旅行を爲し、一月二十六日に於てナイアンザに達するものと見れば、余は彼處に於て正に十日の遅延を爲す都合なり。

十二月廿一日に於て、余は人衆を集めて此事を告げ、往復旅行を爲して荷物を運ぶものには特に賞與